



稀子 KIKI

人を創造するイメージメーカーの恋



稀子 ルーツ@中華街

「ただいま JIN！さすがに中東はバテた。寒暖差が一日で30℃はあるよ。お腹すいた。小籠包と春巻きが食べたい。」

「KIKI、おかえり。あっちで食あたりは大丈夫か？RONが迎えに行っただろ？食事は用意するから早く帰ってこい。」

成田空港から横羽線みなとみらいまで高速道路がスムーズならば90分。

RONのポルシェならもう少し短縮できるかも・・・。

「RON、マジでおなか空き過ぎ。空港や機内では何も食べないで爆睡。いつのまにか着陸態勢だった。至急ウチ飯プリーズ。」

稀子に乗せたポルシェ911GT3は東関東自動車道から首都高速に入る。

シャークブルーのボディに高層ビルが反射して美しい。

RONは昔からポルシェLOVERだ。

ここは横浜中華街、全国でも人気の観光スポットであり繁華街だ。

KIKIこと稀子はここで中華街を取り仕切る家に生まれた。

中国人の祖父は広東省から来日。チャイニーズを日本に広めた成功者として有名だ。

港町である横浜だからか日本人×アメリカ人のDNAを持つ祖母と結婚。

中国×日本×アメリカの血が流れる美しい稀子の母が生まれた。

祖父母はいまの中華街や近隣の土地を買って料理店を経営。

中華街で働くひとのために共同住宅も建設した。それから学校、食品や生活用品の総合スーパーなど、中華街を生活しやすい街へと発展させていった。

稀子の母紗稀は横浜の大学病院で働く医師だった。

婿養子である父は、2人目の出産で妻を亡くした、中華街で働く広東省出身の料理人だった。シングルファザーとして2歳と0歳の男児を育てる大変な毎日だったらしい。

ある日、救急車で0歳のJINが高熱で運ばれ、救命医だった紗稀が治療したのがきっかけで、父と息子のARAN、JINと知り合った。

父親が乳幼児2人を抱えて働くなんてかなりの難易度だ。

母の紗稀は社員専用の保育設備が整った父のレストランで料理人として働くことを彼に薦めた。乳幼児は24時間保育が必要だ。紗稀の実家は24時間体制の保育園と社員寮が併設されている。シングルファザーやマザーにとってはありがたい職場だった。

「この子供たちのことも考えて是非24時間保育の職場が必要です。わたしの実家はすべて完備されています。ぜひ転職を薦めます。連絡をください。」

と自分の連絡先を父親に渡した。

「わたしはHANといいます。息子がARANとJIN、母親は次男の出産時に亡くなりました。いまの職場の

代表に相談してからご連絡します。ご実家はどちらですか？」

「中華街にある翠麗館です。父が経営しています。」

翠麗館は中華街にレストラン2店舗、ファストフードタイプの店2店舗、食材スーパー2店舗などを経営する中華街の老舗だ。

首都圏のホテルや商業施設にレストランや店舗を持つ、従業員200名ほどの企業でもある。

紗稀の父母は中華街を子育てしやすい街にすることで、家族が増え発展すると信じて、働きやすい環境を整備することに注力した。街全体で子供を育てるため保育園、学童倶楽部など充実。学習塾やスポーツ施設も建設した。

ほどなく HAN 氏は2人の息子を連れて翠麗館の料理人として職を得た。HAN 氏は抜群の料理センスでめきめきと頭角を現し、横浜の老舗ホテルに出店する翠麗館の料理長に抜擢。息子2人も子育てにやさしい街ですくすくと成長した。

普段は紗稀の実家にいることも多く父母をグランパ、グランマと呼び、まるで孫のようになっていた。

紗稀は大学病院を辞めて実家近辺に新しくクリニックを開設した。救命医だったこともあり10床の病室とオペ室、20名の精鋭スタッフを揃えた英語、中国語、ハングルなど外国語対応の総合クリニックだ。

院長である紗稀はクリニックに自室があり、食事は実家でという生活スタイルだった。休日は忙しい父親に代わって ARAN と JIN を動物園、水族館、遊園地に連れ出した。1年後、HAN と紗稀は結婚した。HAN 氏の口数の少ないやさしい人柄からは想像もつかない猛アタックで紗稀が根負けしたらしい。

「わたしは妻を心から愛していました。2人の息子を授かったことを後悔したことはありません。紗稀さん、わたしは過去形ではなく、今この瞬間もこれからもずっとあなたを愛し続けます。紗稀さんを想う気持ちが進形に変わり、あなたと共に生きていきたい。ハンディだらけのわたしの想いをどうか受け取ってください。」

いままで何人もの男性にプロポーズされた紗稀だった。医者との縁談も多かった。

超多忙な病と向き合う毎日に、子供を慈しみ、紗稀のカラダを心配し、美味しい食事を差し入れてくれる優しい HAN 氏を好きだった。

いきなり2児の母になること、先妻が病死していることなど躊躇したが、彼の熱意に賭けてみたいと思った。

「妻と母と医者、欲張るのも悪くないですね。わたしにしかできないし、わたしを逃したら HAN さんは一生子連れ狼だし。父母に報告しないとね。」

「いまわたしがこの世で一番幸せだと断言します。紗稀さん、ありがとう、ほんとうにうれしい。」

まるで子供のような笑顔で、紗稀の手を握る HAN 氏、最高のプロポーズだった。

祖父母は、継母になる娘を心配したが、喜ぶ ARAN と JIN の姿をみて同居を条件に了承した。

1年後2人の間に3番目の息子 RON が生まれ、2年後に稀子、待望の女兒で家族みんな大喜び、とくに5歳になる ARAN は妹にびったりだった。JIN 3歳、RON 2歳。祖父母、父母、4兄妹は港が一望できる邸宅に居を構えた。

長兄の ARAN と次兄の JIN は中高とインターナショナルスクール、RON は一貫教育の男子校に。3 兄弟は全国級のモテっぶりだった。横浜中華街生まれの生粋の浜っ子で、中国×日本×アメリカ式兄弟は揃って長身でイケメンだ。女性に追いかけられ、贈り物はそれぞれがトラック 1 台分、スター並みだった。(施設への寄付として重宝した)

ARAN はアメリカに留学、JIN はフランス留学、RON は防衛大学にそれぞれ進学した。

帰国後 ARAN は実家の資産である多くの不動産や施設など多角経営でさらに成長させた。JIN はフランスからヨーロッパを回り上海を最後に帰国。天性の料理センスを生かし、実家の飲食事業経営に辣腕を振るっている。

RON は防衛省のエリートとして外国の日本大使館勤務で世界を回っている。

父は総料理長と、調理学校の経営に。

母の紗稀は病院の理事で ARAN の妻が院長だ。

JIN の妻は英語、仏語、中国語にスペイン語をこなす通訳で稀子は仕事で関わっている。

ちなみに RON は独身主義だ。

インターからの付き合いがある妻たちもいろいろな血が混ざっているので、稀子のファミリーは多国籍軍だ。全員が日本式とは無縁な生い立ちだった。そんな混在した関係が稀子は気に入っている。

久しぶりの稀子と RON の帰国を祝って家族全員が集まる。

もちろん世界で一番美味しいチャイニーズがテーブルいっぱい並ぶ。

稀子=KIKI

久しぶりの自宅。今日は休暇で一時帰国している RON と箱根までツーリング。湯河原の別荘でクルージングの JIN と合流、5泊程滞在予定だ。昨日中に点検を終えた稀子の KATANA1000CC、RON の HAYABUSA 1300CC がエントランスに並んでいる。砂嵐の中東からやっとな気分転換できそうだ。

箱根のプリンスホテルでランチ。さすがに2人のレザースーツスタイルは際立っていた。

「KIKI、2週間程度休んだら仕事を頼みたいんだ。ソウルの財閥 SG グループの LEE は聞いたことあるよね。彼の会社からの依頼でしばらくソウルに滞在することになると思う。」

「ふーん、LEE か。韓流スターは受けないし、プロモーションもやらない。あくまでもパーソナルであってクローズドされたイメージメイキングが仕事。それがわかっているならいいよ。」

「いろいろな伝手で依頼がきた。詳細はソウルに入ってから聞いてほしい。どうしても KIKI に依頼したいとか。多分築地からの紹介かもね。」

「RON に来る仕事なら国際的だし、間違いなく面白い。久々本場の韓国料理が食べたいからソウルに入る。古臭い慣例や常識に縛られないならやるよ。」

RON はすぐに携帯からソウルに連絡。

「LEE さん、RON です。KIKI は2週間後にソウルに入る予定。まずは直接 LEE さんに話を聞いてから仕事をするか決めたいそうです。よろしいですか。」

相変わらず RON の英語は美しい。ソウルなら英語がほとんど通じるので仕事がしやすい。どんな仕事か楽しみだ。

「RON、ソウルでは外事ナンバーの KATANA1000 を用意してね、足に使うから。お願い！」

「はいはい、KIKI 様が仕事を受けたらね。」

「久しぶりに美味しい参鶏湯とチヂミが食べたくなった。」

KIKI は別荘から RON に聞いた電話番号に連絡をする。

「KIKI、はじめましてだね。LEE です。噂ばかりでまだ直接仕事はしていなかったね。」

今回の依頼は HD グループの代表からです。韓国の財閥です。代表を含む3人の息子はそれぞれ優秀だけど、次男は内向的でオタク、末っ子は自信過剰で傍若無人と問題あり。もちろんファッションとは無縁で人前に出せる状態ではない。そこでまずは見た目から替えてほしいという依頼です。3番目は特に問題児だそう。ただ2人とも素晴らしい頭脳の持ち主で代わりはいないと断言できる逸材だ。人格にもかかわるからどうかなー報酬はいままでのギャラ越えで。」

「3倍増しなら。それと3番目の御曹司が経営する IT 技術の資料をちょうだい。開発したいプログラムがあるんだ。彼ほどの天才なら可能だと聞いたから、それが条件。それに次男の案件に役立つかも。」

「さては RON だな。了解。滞在先はどこにする？わたしのオフィスは SG グループのビルでホテルが併設されているよ。それとも HD 所有のホテル？」

「グランドスイートはどっちが広い？広くて便利な方をお願いします。」

HD グループ SUHO 代表の依頼

「LEE さん、お久しぶりです。HD の SUHO です。相変わらず業績好調で何よりです。」

「SUHO さんからわたしにとは意外です。DEE や RYU ならわかるけど驚きです。」

「他言無用でお願いがあります。うちにとっては致命的であり絶対に漏れることは許されないので。秘密厳守でお願いできますか？」

「依頼内容によりますが・・・。わかりました。どうぞ。」

「そちらに伺います。30 分後に。」

「秘書に案内させますので、正面入り口で。」

SUHO 代表からの依頼は秘密厳守かあ・・・それも俺になって、なんか大変そうだな。

HD 代表のお出迎えは、本社のキム秘書に頼まないと、失礼があったら大変だ。

HD グループは、SG と並ぶ財閥の企業グループだ。DEE 氏同様、長男の SUHO 氏が代表で、次男の MINU 氏は医薬開発のスーパー研究者。医者でもあり医薬品や医療機器の分野でトップシェアの HD を支えている。

3 男の SION 氏は NEXT DOOR の代表。コスダック上場で 2 兆ウオン、個人資産 8000 億ウオン、IT 業界の寵児、若者に絶大の人気を誇るカリスマ経営者でありプログラマーだ。DR.MINU は表に出ないが、SION は芸能人をはじめスキャンダルが絶えないファッションista であり問題児でもある。

海運・運輸業と倉庫、ホテル経営から、病院経営を含む医療分野が主たる業務だ。最新のインフラ設備は世界を網羅する SION のプログラムに支えられている。

「お忙しいのに申し訳ない。」

「どうぞ。さっそく本題に。どうも至急のようだ。」

「ではさっそく。次男の MINU は対人恐怖症で人前に出られない。理由は何を着ていいかわからないし、白衣以外は自信がないと。HD の根幹である医療分野のトップがそれでは困ります。どうか自信を持って人前に出られるよう、まずはファッションからはいるのはどうかと。もう一つは SION です。自信過剰で他人に興味がない傍若無人の問題児とご存知ですね。それでも圧倒的なカリスマ性で事業は成功しているから困ったものです。彼のプレゼンテーション能力は素晴らしいのに人前に出る礼儀がまるでない。破れたデニムにパーカー&T シャツ、スニーカーです。注意してもヴィンテージとか言って聞き入れない。天才的な頭脳に語学や容姿は問題ない、ただファッションに社会性がない。そのうえ傍若無人で性格がサイテーです。彼のファッションをどうにかして欲しい。」

LEE さんはクリエイティブに精通し、グローバルな人材をキャスティングすることで有名です。そのうえ財閥の御曹司でもあるので秘密厳守は日常だ。噂で聞いたことがあるメディアや企業プロモーションとは異なるクローズドされたパーソナルな専門家をお願いできますか？」

「パーソナルだけに表面には出てこないし、伝手による紹介のみと聞いていますが、世界中の VIP から依頼がある女性がいいます。スケジュールはもちろん、仕事を選ぶので確約はできませんがアプローチしてみます。ターゲットの詳細な資料をお願いします。」

「ありがとうございます。もう LEE さんが最後の砦です。兄弟でありながらまったく無策で情けない。ビジネスの方が余程ラクです。」

HD の代表がここまで頭を下げるとは、やれることはすべてやり尽しても解決できないミッションってことだ。以前莉子から聞いていた横浜の彼女しかいないな。
どのルートで行くか。

「RON さんですか？ソウルの SG グループ LEE です。ワシントンからのルートで連絡しました。いま日本に帰国していると聞いています。単刀直入に、KIKI に仕事を依頼したい。彼女は中東の仕事を終えて日本で休暇中と聞いています。連絡をもらえるように伝言していただけますか？」
「どうやってこの番号を？それにスケジュールまで。さすが韓国の財閥はグローバルだ。確かに KIKI は昨日帰国しました。さて、彼女がわたしの話を聞くかどうかわかりませんが、お話は伝えます。連絡先を教えてください。」

KIKI@SOUL

2週間後、稀子こと KIKI は仁川空港に到着。SNS で確認した顔があった。LEE だ。

とびっきりいいオトコのお迎えはうれしい。

RON で慣れてはいるが、遠目からも携帯のシャッターがわかる。

ここは SNS 大国の韓国だと実感した。

そんなことお構いなしの LEE は KIKI に駆け寄りハグ！

「LEE、写真撮られたくないんだけど・・・」

「女優のヤンミーにそれだけ似ていれば十分目立っているよ。KIKI、ソウルによろこそ。」

上海と北京での仕事では、確かに女優のヤンミーに間違われることが多かった。

ARAN や JIN にも言われる。まあ美人に似ているなら悪い気はしない。

中国×日本×アメリカの雑種だから、珍しい容姿かもね。ボディは西洋式だけど。

LEE はディープブルーのマセラッティクーペに KIKI を乗せ走り出した。

「仕事の詳細はわたしのオフィスで。夕食のご希望は？」

「美味しい参鶏湯とチヂミ。打合せはこのままやろう。荷物は別便で滞在先に。」

「ホテルは HD グループのホテルがすでに押さえられていた。SUHO 氏が一足早かった。広さはほぼ同じだから。」

「了解。そうそう専用車はいらない。RON に頼んだから。打合せが終わったらプラダとグッチにつきあって欲しい。コール？」

「コール！」

ガラス張りで、アルフレックスの赤が効いているオフィスで LEE の話を聞く。

「要するに、対人恐怖症といわれる次男と、性格の悪いカジュアルファッションの三男を人前に出せるようにしろってことね。ついでに代表のクローゼットをシーズン毎に見繕って欲しい件を追加ね。対面してみないと期間はわからないな。どれほどのレベルか想像つかない。とりあえず資料を見る限り、受けてもいいよ。明日 SUHO 氏にアポ取ってね。」

それからプレスルーム代わりに大きな部屋、一面鏡張りを代表に用意するように言ってね。撮影機材一式と舞台もあればいいかな。仕立て職人を呼ぶのでそのときはビジネスクラスのチケットと部屋をお願いします。」

「了解。その都度指示をお願いします。」

KIKI はそのあと LEE の案内で滞在中の洋服を買いにプラダに向かった。

KIKI はほぼブラウスとくるぶし丈のパンツ、サンダルかライダーブーツだ。

プラダのブラウスはストレッチが効いてプラダカラーの紺×赤がお気に入りだ。

デザイン違いのストレッチブラウス黒、紺、白、赤を 20 枚。黒、紺、白、柄のボトムを 12 本。新作のデイ

バッグ赤と白。ハイカットブーツを3足。サンダル3足をホテルに届けてもらう。

グッチでは花柄モチーフのブラウス2枚、セットアップ2着。パーティ用のワンピース2着とハイヒールを3足ゲット。これもホテルへ届けてもらう。

両店舗とも紹介状を出して、会計はサインのみ。LEEはKIKIのルールがまだわからないでいた。

「SUHO代表から必要経費としてすべて支払うと言われているけど。」

「オフィシャルなパーティ用のドレスとかジュエリーが必要であればお願いします。これは私服だから。常に滞在先で揃えることにしているんだ。気分が変わるでしょ。」

KIKIはLEEの話聞き、ソウル滞在が長期なると覚悟して、それなりのアイテム数を揃えることにした。

LEEは無駄なく店員に指示するKIKIに見惚れていた。ダイヤのピアス、テニスブレスレット、時計はカルティエのパシャ。プラダの赤のブラウスに、紺のドット柄のパンツ、赤のミュール、シャネルのリュックで颯爽と店内を歩く。

肩までのウェーブヘアはライトブラウン、爪は短くフレンチネイルだ。170cmはあるすらっとしたカーブリーなボディライン。2万ドルを超える買い物を1時間程ですませるゴージャスで謎多き女性だ。

「凄い経費だね。」

「前は中東でファッションプアだったから、ソウルでやっとストレス解消！結局は仕事服みたいなもんだけどね。日本からはライダースーツとブーツ、下着とコスメを持ってあとは現地調達です。」

「日本のクローゼットは凄いことになっているね。」

「消耗度も激しいけど、かなり広いドレスルームだからご心配なく。日本に来たら横浜チャイナタウンにご招待します。宿泊も是非うちでね。」

祖父の代から中華街を取り仕切る家系で、中国×日本×アメリカの血が流れる富豪を実家に持つと言われていた。2人の兄は実業家として、3番目の兄はエリート官僚。面白くなりそう。彼女の仕事の詳細は知らされていないが、世界中の顧客からのオファーが絶えない実力者と言われている。LEEはこれから何が起こるかワクワクしている。

KIKI×HD 代表 SUHO 氏

入国した翌日、大使館から運ばれた KATANA1000CC がホテルのエントランスに到着。最新のナビ装着のシルバーボディは美しい。希望通り外事ナンバー（大使館仕様）だから他国の交通ルールに拘束されない。謝謝、RON！

KIKI は HD 本社ビルのアドレスを入力して 10 時の約束に向かう。渋滞を気にせず道路も広いので快適だ。信号待ちを入れても 5 分で到着した。KATANA は走り慣れているので快適なソウルワークになりそうだ。オフィス正面入口に停まる大型バイクに警備が走り寄る。ヘルメットとグローブを取った KIKI は「SUHO 代表と 10 時に約束をしている KIKI です。バイクはここに停めてもいいかしら？」と英語で尋ねると、警備員はどこかに連絡、するとスーツ姿の秘書らしき男性が走ってきた。「お待ちしております。代表室までご案内します。バイクはこのままで結構です。」

KIKI はリュックからサンダルを出してブーツから履き替えた。

プラダのブラウスにパンツ。サングラス姿でヘルメットを抱えて、注目されながらエレベーターに。35 階で降りた。女性が大型バイクで面会に来ることなんてあり得ないのだろう。好奇の目にさらされるのは慣れている。

大きな両扉を開けるとガラス張りの部屋に

ダンヒルのスーツを着たすらっとした男性が笑顔で迎えてくれた。182 cm 程、かなり鍛えられ削ぎ落されたスリムボディに、韓流スター並みの美しさ。

ブラウスとネクタイとスーツに靴それぞれが mismatch。販売員の感性がいまいちという感じだな。

「ようこそソウルへ。仕事を引き受けてくださって感激です。クルマを迎えにいかせたはずですが、断られたと連絡がありました。ヘルメットをお持ちということは、まさかバイクで？」

「はい。お気遣いありがとうございます。大体の国ではバイク移動です。大使館に外事ナンバーを用意してもらいました。」

「え、大使館にですか？」

「はい。クルマが必要な時は遠慮なく言いますので、そのときはよろしくお願いします。」

外事ナンバーを用意させるとは・・・。どういった人脈なのか。今まで出会ったことのない女性だ。どんな仕事をするか楽しみだ。

「では、資料はご覧になりましたか？」

「はい。大体はわかりました。早速ですがまず SUHO 代表のクローゼットプランに入ります。取り急ぎすぐに用意できるものから。仕事服であるスーツ、ジャケット&スラックス、ゴルフウエア、スポーツウエア、プライベートのカジュアルウエア。もちろんファッション小物に靴も刷新します。ご自宅のドレスルームにご案内ください。警備に連絡していただければ一人で大丈夫です。お仕事の時間を邪魔しませんから。取り寄せるアイテムもあるので 2、3 週間ですべて刷新。これからの記者会見や理事会、新規事業のイベント、メディア取材のスケジュールなどに合わせてスタイリングをしますので、当面はおつきあいください。ドレスルームが刷新されても着こなせなければ意味がありませんから。資料を読んでソウル滞在は予想より長期になると覚悟しました。よろしいですか？」

「もちろんです。手のかかる難題ばかりをお願いするのですから。まずはわたしからですね。よろしく願います。」

「わたしの仕事を試すのにはいいですよ。同時進行で MINU 氏との面談をお願いします。会ってみたいことには・・・。対人恐怖症とありますが少しずつ慣れてもらうつもりです。こちらもお任せください。そして SION 氏は最後に。特に社会生活には問題ないようなので。ヴィンテージファッションから対外的ファッションに刷新の件は、新規事業や新製品の記者発表、海外でのプレゼンテーション、政府事業への進出にはまだ日数があるので、手遅れになることはありません。

それに SION 氏にわたしも似ているのでわかることが多いです。人に興味がなければファッションも気遣えないですからそこからですね。」

淡々と進行を話す KIKI に、SUHO 氏は新しい刺激を受けた。こんな女性にいまだかつて会ったことがない。世界規模というか、働くフィールドを選ばない柔軟さと、自信に溢れた話し方。すべてが魅力的だ。ムスク系の香りにうっとりさせられる。

「エントランスまで送ります。」

SUHO 氏は秘書に自宅の警備に連絡するように指示し、KIKI とエントランスに向かった。確かに入口正面にはシルバーに輝く大型バイクが停まっていた。KIKI はまたがると自宅住所を入力。颯爽と走り去っていった。警備のチーフが思わず

「かっこいい女性ですね。代表のお客様ですか？外事ナンバーの大型バイクをはじめて見ました。」

と見送った。SUHO 氏にとっても衝撃的な出会いだった。

10分程で目的地に到着。大きな扉が自動に開く。広い車寄せの先にエントランスが。広大な敷地に機能的な建築の邸宅、アプローチの先には噴水と緑の多い庭がある。

チャイナタウンの公園みみたいだ。

秘書の案内で、エントランスから一面ガラスの通路をひたすら進み、プライベートスペースに。寝室の手前にまるでルイヴィトンのブティックのようなスペースが・・・

ドレスルームだ。

各アイテムに分けられ、ネクタイやチーフ、靴下、ハンカチ類はガラスケースに、ワイシャツ、ブラウスも全てかけられ、ブティック専用の照明に鏡張りだ。シューズも種類ごとに並べられて、銀座や青山にあるハイブランドのブティックのようだ。

さすがの KIKI も思わずため息・・・。

スーツ、ジャケット、パンツ、コートはカテゴリー分けされている。導線に沿って選び着用すれば最終的に靴まで全身揃ってその日のスタイルが決まるようになっている。

これは一流店舗を手掛ける建築家の発想だ。

さてパーソナルで美しい SUHO ブティックを創りますかね。機能的より創造的でありたいよね。ファッションはその人を映す鏡というでしょ。インテリアや建築とは異なって呼吸や体温が感じられないと意味ないんだな。

KIKI 韓流をインプット

まずは韓流式をインプットする。

「LEE、韓流スターの人気ドラマをすべてダウンロードして欲しい。ラブコメディ、サスペンスなど。ファッションの特徴をつかみたいの。よろしくね。韓流スターよりカッコ良くて、ファッションセンス抜群なLEEのチョイスを信用している。それとラップトップ、国内専用の携帯をお願いします。必要な連絡先の登録も・・・。」

「お安い御用です。2時間以内にわたしのオフィスにタブレットと大型モニターを用意するよ。SUHO氏はどうだった？」

「SG御曹司4人ほどではないけど、代表はこれから相当素敵になる。メディア取材をお願いね。近日には経済界のファッションリーダーにするから。顔、スタイル、品格は揃っているけど、ファッションがねえ。お金はかかっているけどいまひとつだからやりがい満点よ、任せて。ランチしよー。エントランスに5分後ね。」

爆音とともに大型バイクが入ってきた。外事ナンバーか、珍しい。あれ？もしかしてあれはKIKIか？

「LEE、お待たせ。バイクは渋滞がないから速いね。ビビンバがいいかなあ。」

「どうしたの、このバイク。KIKI専用？」

「RONに頼んだんだ。大体どの国でもバイクは用意してもらう、専用に。外事ナンバーは便利だし。ヘルメットとグローブはここで預かってね。」

KIKIは警備スタッフにヘルメットとグローブを渡した。

KIKIはかなり問題のあるSIONより役者が上だな。

面白くなりそう。SIONの愛車は日本製の大型バイクと、クルマはLOTUS Exige 350だ。好みも似てそう。

KIKI WIN WIN SUHO 氏改造計画

KIKI は人気ドラマを片っ端から観賞する。SUHO 代表の雰囲気にはぴったりはまる俳優やスタイリングを探るためだ。

いたいた。ボディや顔の作りがそっくり。財閥の御曹司で実業家のキャラクターだ。それにしても韓流のスタイリストはハイセンスだ。スーツはシングル、ダブル、6つボタンにサイドベンツ。パンツは短めのスリム。靴は足に馴染むやわらかいシルエット、素足感覚で履く。なぜかベストがお約束だ。

弁護士や政治家はシングルボタンが多いが、企業の顔である代表ともなると、華やかさやカリスマ性にリーダーとしての品格がスタイリングに求められるようだ。メインブランドは決まった。

「KIKI です。トップ顧客を紹介するのでアイテムを揃えてください。」

「KIKI 様、タキシードのオーダーの件はありがとうございました。おかげさまでドバイに出店することに。なんでもお申し付けください。どちらからですか？」

「ソウルからです。多分トムフォード初のトップ顧客間違いなしです。財閥の代表なので相当のアイテムが必要です。体型にぴったり合わせたセミオーダーで。スーツ、カジュアル、小物のサンプルと資料持参で香港ランチからこっちに来てくれます？本人の資料はいまから送ります。採寸はしっかりとお願いしたいので。絶対にブランドイメージにプラスになるから。期待は裏切らないよ、毎回のように。」

「はい、存じております。ソウルのランチも可能ですね。」

「ホテルや商業施設をいくつも持っているのでフロアは選び放題よ。ついでにわたしのサイズで白のブラウス数枚作ってね。スケジュール調整したら連絡ください。

じゃあよろしく。」

やっぱり SUHO 代表はトムフォードがいいな。

KIKI は香港のトムフォードに連絡したのだ。ジェームズボンド役のダニエル・グレイグの衣装で憧れのブランドだ。

タキシードをはじめドレスリーな正装は黒が美しいセリーヌで。

さっそくパリに連絡だ。

靴は、ジョン・ロブとフェラガモ、トッズに連絡をして、商品を持ってきてもらうつもりだ。小物はそれぞれのブランドに一任してみよう。

スポーツカジュアルはフェンディだな。こちらは近場でシンガポールにお願いするか。

LEE に宿泊、送迎手配と SUHO 氏のスケジュール調整をお願いする。

SUHO 氏のファッションを取材とともに記事と動画で発信すれば、ファッションリーダーとして企業のイメージアップ、そしてハイブランドは出店が可能に。

知名度と売上が十分見込める。WIN WIN だ。一流を創るには一流ブランドだ。

数日後いくつものハンガーラックを積んだ大型トラックが、HD 本社ビル専用車両口に付けられた。1 ラックに 10 着ずつ、15 台ほどの洋服が香港から運ばれた。

用意されたプレスルームのような部屋には、まるでコレクションのバックヤードのように洋服がずらっと並

べられている。壮観だ。

「これ全部入るドレスルームって、どれだけ広いんだ？」

LEE でさえ驚きだ。

13時にSUHO氏が入る。それぞれのブランドから選び抜かれた職人3名が採寸と最終チェック。同時に3台のミシンやアイロン台、プレス機など運び込まれ作業ルームになる。

数日後には最高の着心地を体感できるはずだ。

2時間程で採寸を終えた。

「どうですか？気にしていただけましたか？当面は間に合うと思います。」

「初めてのデザインで戸惑いますが、わたしに似合いますか？ダンヒルとはだいぶ違う気がします。」

「このブランドの生地は最高です。SUHO代表の鍛え上げながら絞り込まれたボディにフィットします。スーツは戦闘服というより事業家としての個性を引き立てます。プライベートアイテムは、その人の喜怒哀楽を魅力的に表現するための服です。新しい代表が楽しみです。」

「LEE、自分が最大限生かされる気がする。まるで魔法のようだ。誰もこんな偉業はできない。KIKIさんは凄い、わたしを変えてしまうんだから……。どう見えますか？」

「カッコ良過ぎて悔しいくらいです。わたしでもこんな代表を引き出すことはできない。噂通り、いやそれ以上の人です、KIKIは。」

「気にしていただけで何よりです。ここでの作業が終わり次第自宅に運び入れます。ネクタイなどの小物はわたしのチョイスでいいですね。靴の採寸に入ります。」

すべての採寸が終わった。SUHO氏は楽しくて仕方ない。浮いた話がほとんどないSUHO氏が、外国から来たKIKIに見惚れている。

「KIKIさん、夕食はいかがですか？ぜひLEEさんとご一緒に。迎えるクルマを用意しますので19時にエントランスで。」

SUHO氏はだいぶKIKIを気にいったようだ。HDの代表なら相手としては十分だけど、KIKIはどうか。仕事と割り切っているようだし、そう簡単に心を開きそうもない。あまりにも謎が多い女性なのは確かだ。

「LEE、約束通りに誌面と動画でSUHO代表のインタビューをお願いします。カメラマンはそちらでお願いします。わたしは衣装と見せ方にこだわりながら新しい代表を引き出します。」

2週間後、ソウルで未開拓のトムフォードをしなやかに着こなして取材を受けるSUHO氏は、あっという間に話題となり、経済界のファッションリーダーとしてあらゆる取材が殺到した。

「ファッションはその人を映し出す。カラダに馴染むスタイルは、新しい自分を見つけてくれる。」

SUHO代表のこのフレーズが彼の声で、活字で、そして最高のビジュアルで発信されている。

それこそ女性誌から経済紙、男性ファッション誌と表紙を飾り、特集が組まれ、動画は再生回数がトップに。HDのイメージ動画として所有の屋外大型スクリーンで流される。

有能な若き事業家第1位、結婚したい男性ナンバー1に選ばれ話題に。

そして自社の株価もアップ。まさにKIKI効果だ。代表はファッションによる相乗効果の大きさにKIKIの凄

さを感じていた。

「LEE、何とお礼を言ったらいいのか・・・ありがとうございます。自分自身驚いています。」

「いえ、これからが本番ですよ。DR MINU と SION 氏が・・・」

「KIKI さんは独身ですか？どういったルートでお知り合いなんですか？」

「わたしもわからないのです。本人にお聞きください。KIKI からトムフォードがこちらに開店したいので相談によってあげて欲しいとのこと。わたしもぜひ試してみたいブランドです。よろしくお願いします。」

約束通り SUHO 氏のドレスルームは刷新され、取材や撮影、記者会見は KIKI のスタイリングによって着こなしが話題に。SNS で SUHO 氏は検索ワードトップだ。KIKI がスケジュールを把握して、毎回コーディネートを用意してくれるのはありがたかった。

身に着ける服装によって自信とパワーが生まれ、ビジネスや付き合いもグレードアップしていく。ファッション、いや彼女こそが重要だと実感する毎日だ。

KIKI と DR MINU

「わたしは本日お約束の KIKI です。入ります。」

扉の奥から返事はなかったが在室とのことだ。真っ白な壁にボタニカルアートが飾られ、室内庭園のある明るい研究室だった。インテリアは緑、黄のイノベーターで機能的だ。サンルームに出るとフードをかぶった男性がキーボードを叩いていた。

「はじめまして。KIKI です。SUHO 代表より依頼があってソウルに来ました。英語をお願いします。どうかわたしに最高の仕事をさせてください。」

MINU 氏は立上がりこちらを見る。

身長 185 cm はありそう。SUHO 氏より筋肉質かな。長い手脚、端正な顔立ちは資料にあった写真から韓流スターの Y UJIN タイプ。実物はかなりのイケメンだ。

「あまり近づかないでください。それ以上距離が縮まると話せなくなる。」

KIKI は 3 歩近づき、彼の前の椅子に座った。

「単刀直入に申し上げます。逃げないでください。博士お願いします。素晴らしい研究者であり医学博士でもあると伺っています。プレゼンテーションはリアルでなくバーチャルでも可能です。資料や画像を取り入れながら博士も映像でプレゼンすればいいんです。精度は SION 氏のソフトと技術者、ストーリー性によって世界トップクラスのバーチャルプレゼンテーションができるはずですよ。わたしの魅せるテクニックは一流です。株主、投資家へ向けた発表会まで 45 日、やりましょう。」

「人前に出る自信がありませんが・・・。」

「まずは一番心地よいスタイルを決めましょう。プレゼンテーションの動画は白衣ではなく白いブラウスで。博士のトレードマークにしましょう。デザインは考えます。プライベートでは顔を覆うフードはかぶらず、サングラス程度にしましょう。お任せください。世界一素敵で知的な博士にしますから。ドレスルームに案内してください。こちらも刷新します、いいですね。」

MINU は KIKI の低いトーンの手ススキーボイスが心地良かった。日本人と聞いていたが、ボーダレスな魅力がある。まっすぐこちらを見つめる瞳は力強い。SUHO にはストライクゾーンだ。年齢も SUHO と同じくらいか。

「プライベートエリアはあっちです。ドレスルームは寝室の手前右側です。」

プライベート空間もイメージカラーは白と緑。広い寝室の隣には SUHO 氏ほどではないが、それでもかなり広い空間のドレスルーム。ほぼモノクロのアイテムだった。

あんなに素敵なんだからファッションを愉しんでほしい。確かに白は彼が格別に似合う色だ。スタンドカラーの白いブラウスをトレードマークにしよう。

パンツや小物、シューズは色彩豊かに。バッグはボッテガヴェネタのリュックが素敵だ。

ベルルッティもいい。

ジャケットもスタンドカラーやノーカラーで。スーツ、ネクタイはエッジが効いたグッチから入るつもりだ。タキシードはブラウスともにオーダーで。

スニーカーはバレンシアガやトッズのハイブランド。靴はスリッポンで揃えよう。

「では数日後に採寸しますので、詳細は連絡します。博士の携帯番号を教えてください。
これはわたしのソウル専用番号です。宿泊先は御社のホテルです。いつでも連絡ください。それでは失礼します。中国茶がお好きと聞いています。数日後、実家から逸品が茶器とともに届きますのでお持ちします。是非ティータイムをご一緒しましょう。」

やわらかいムスクの香りを残して KIKI は去った。MINU は KIKI が鮮明に記憶された。いままで会ったことのない魅力的な女性だ。あの声をずっと聞いていたい。さっそく彼女の番号を登録した。

KIKI のバイクが SG ビルに到着。LEE のオフィスに向かう。

「KIKI お疲れさま。ドクターはどうだった？」

「いやいやカッコ良くてビックリよ。素敵で知的な博士になること間違いないです。みんながハッピーになれるかもよ。」

「それは何より。ファッションはどうするの？」

「博士はオーダーにするから香港から仕立て職人と生地のパイヤーにソウル入りしてもらおう予定。これから手配します。」

「KIKI, 夕食は何がいい？」

「美味しいイタリアンがいいかな。」

「了解。」

KIKI は香港にさっそく連絡。2日後にマエストロが生地のパイヤーとともにソウルに入る。即採寸だ。

「博士、KIKI です。先ほどはありがとうございました。2日後の14時、採寸に伺いたいのでお時間をください。」

「はい、14時に。」

SUHO 氏の膨大な洋服にコーディネート、撮影、記者会見のスタイリングが超多忙で、ソウル入りして3週間経過。予定より1週間延びている。

やっと博士の改造計画に入る。

バーチャルプレゼンテーションについては SION 氏の力が必須だ。数日中にアポを取る。

相変わらず KIKI はソウルでゲットしたプラダコーデだ。

ソウルのイタリアンは素材がいいのか美味しい。KIKI のワイン好きは JIN の影響だ。東欧にはまっている。今日はイタリアンなのでシチリアのサッシカイヤで。辛口ですっきりしていて香りが鼻腔に残る大好きなワインだ。

それにしても LEE と一緒にいるとシャッターが凄い。あまり顔出ししたくないけど、ソウルなら大丈夫か……。

「明日の SNS にまたアップされるかしらね。」

「俺は日常だから新鮮さはないかもね。ここ毎日 KIKI とのツーショットばかりだしね。いまの彼女って感じかな。それよりここのイタリアンは美味しいでしょ。」

「うん、かなりのレベルでいて手頃なプライス。それにイタリアにいるみたい。」

「KIKI はイタリア語も話すんだね。」

「イタリア語は覚えやすいしね。この仕事していると日本語を忘れそう。」

「3日後の大使館主催のパーティに招待されたから予定しておいてね。」

「当日は美容院とネイルサロンの予約をよろしくお願いします。」

SGのクルマでホテルに……。部屋は長期滞在に快適な広さだ。SUHO代表はLEEに聞いたのかペリエとブラッドオレンジジュース、キウイとスパークリングワインが冷蔵庫にいっぱい、真っ白なカサブランカが生けられている。うれしい心遣いに感謝……。

ここソウルは情報がグループ間のつながりで共有されるらしい。ある意味ダダ漏れってことだ。

明日は博士だ。

「KIKIさんですか？SUHOです。3日後の大使館主催のパーティ、エスコートさせてください。明日10時にお迎えに行きますので、お付き合いください。」

「パーティ仕様は用意してこなかったの。」

「明日、用意しましょう。タキシードがセリーヌなのでぜひ一緒に。」

「では、明日ロビーのカフェで。」

KIKIはせっかくの行為が無駄にならないように、すぐにセリーヌのソウルランチに連絡を入れた。

朝9時半、カフェでゆっくりコーヒータイム。ホテルのエントランスに紺のメルセデスが停まると、スタッフが後部ドアを開ける。SUHO代表だ。

トムフォードの薄紫のスーツに紺のシャツ、ドットのネクタイ。KIKIのコーデそのままだ。かっこいい。

KIKIはエルメスオレンジのコットンツイルのブラウスにグッチの白のストレートパンツ、ミュール。バッグはエルメスのミニケリー白だ。そして香りはムスク系で。この香水は中東の王族御用達の調香師によるKIKIスペシャルだ。

「KIKIさん、おはようございます。わたしにも濃い目のケニアを。」

「おはようございます。トムフォードが馴染んで素敵です。あらゆるメディアで話題の人物ですね。」

「企業のイメージアップが何よりです。KIKIさんのおかげです。是非パーティの衣装をプレゼントさせてください。」

「あら、相当の出費になりますよ。」

「どうぞお好きに……。わたしが驚くことはありませんから。さあ、行きましょう。」

さすが財閥グループの代表、余裕だね。わたしも最近の中東で慣れているから、思い切り楽しめそう。

クルマはセリーヌのエントランスに。ドアマンによって後部座席のドアが開けられる。

スタッフのお出迎えだ。さすが一流ブランド。ソウルランチの店長は見覚えがある。

「いらっしやませ。代表、先日はありがとうございました。KIKIさんお久しぶりです。代表の件で香港の帰りにソウルに入りました。再会できて光栄です。」

「パリから香港に来てそしてソウルで会うとは縁があること。あなたなら心強い。パーティ仕様をよろしく

お願いします。最終的には代表に選んでいただくので。」

「素敵ですね。最高のカップルに見えるようにお手伝いさせていただきます。大使館主催ですね。」

店内奥の顧客エリアに通される。真っ白い皮張りのソファはセリーヌらしい。

「代表には光沢のあるブラックのタキシードにタックの入ったブラウス。カマーベルト、タイ、チーフはシルバーで。さっそくサイズ調整します。」

SUHO 氏のフォーマルは普段から着慣れていることもあるが、ダンヒルのような強さがなく、セリーヌの光沢のあるやわらかさが美しいボディを引き立てる。スタッフもため息だ。

「SUHO さん、とても素敵です。ご一緒するのが恥ずかしいです。」

「明日どちらにお届けいたしますか？」

「オフィスをお願いします。」

「KIKI 様、3点ご用意しました。」

すべて深いVカット7分袖。シャンパンゴールドはフロントスリットにくるぶし丈、ピンクゴールドは落ち感の美しい素材でバックスリット、パールホワイトはひざ丈のミニドレスだ。すべて共布のパンプスとクラッチバッグが用意されている。

KIKI はシャンパンゴールドが気に入ったので試着してみる。フィッティングルームの扉が開かれ SUHO 氏の前に立つ。彼は無言で固まった。

「似合いませんか？わたしはいいと思いますが、どうですか？」

「KIKI 様、このストレートラインはボディにフィットしてセクシーです。まさにオトナの女性の着こなしですね。シャンパンゴールドはいつ見てもお似合いです。代表はいかがですか？」

「すみません、見惚れてしまいました。ドレス姿は想像できなくて。素敵です。こんなにゴージャスな女性をエスコートできるか不安になってきた。わたしなんかかすんでしまいますね。」

「ではこれをお願いします。明日ホテルの部屋に届けてください。」

こんなに動揺したのは生まれて初めてかもしれない。年齢は同じくらいだとは思うがとにかくゴージャスな女性だ。

「KIKI さん、カフリンクスを買うのでお付き合いください。」

韓国の男性はカフリンクスやカラーピンが好きなのか、とてもうまくファッションに取り入れている。

「1 ブロックなので歩いていきませんか？」

「はい、もちろん。」

いまや SUHO 氏はジャストタイムな人物だ。店を出ると彼に気づいた通行人が一斉にシャッターを切る。彼は慣れているけれどこっちは非常事態だ。

「注目人物は凄いですね。さすが SNS 大国・・・撮られるのは慣れていなくて。」

何とか早足で振り切り宝飾店に入る。

「いらっしゃいませ。SUHO 代表。お待ちしております。」

「カフリンクスとお揃いでこちらの女性にピアス、ブレスレット、ネックレスを。」

「是非ペアで、日本産のゴールドパールをご用意しております。形、てり、巻きも最高級の逸品です。」

支配人は大粒のゴールドパール2セットとパールのネックレス、ブレスレットを並べた。

「KIKI さん、真珠はいかがですか？これなら先程のドレスにぴったりだと思います。」

「ありがとうございます。ピアスはスイングタイプをお願いします。」

KIKI は迷うことなく決める。

「明後日の夜ですから至急でよろしくお願いします。」

「かしこまりました。」

宝飾店から出てきた2人はまた被写体に。

「宝飾店から出たところを写されたら恋人同士ってことになりそうですね。大丈夫ですか？御曹司なんですから。」

「わたしは KIKI さんとなら光栄です。噂から現実になって欲しいくらいです。」

「あらまたご冗談を・・・。」

「ランチはいかがですか？」

「いえ、博士との約束がありますのでまた日を改めて。今日はありがとうございました。」

セリーヌでも宝飾店でも堂々としている彼女は最高に魅力的だ。育った環境の成せる業なのか、カッコいいの一言だ。

「LEE、クルマ貸して欲しい。博士の採寸に香港からのスタッフと行くから。」

「いいよ。レバンテ、ゲレンデ、レクサスが駐車場に停まっているよ。」

「レクサスで。」

「HD のホテル前に停めておくように言っておく。キーはフロントでもらってね。ボディは黒だよ。」

「ありがとう。パーティは SUHO さんがエスコートしてくれるって。ドレスと真珠をいただきました。」

「株価も上がっているし、KIKI 効果抜群なんだから遠慮せずにね。」

14時に香港からの仕立て職人と生地の特門家を乗せて、MINU 氏の自宅へ。

研究所の別棟が自宅だ。HD 経営の病院も近くにある。

エントランスにレクサスを停めて、秘書の案内でプライベートエリアに。

「博士、KIKI です。」

両扉が開いて博士が立っていた。相変わらずうつむき加減ではあるが、出迎えてくれるだけ進歩だ。

前もって運び入れた全身を映す3面鏡の前に博士を立たせて、採寸をしていく。

生地バイヤーは KIKI にサンプルを見せて説明をする。

少しずつデザインを替えて1素材20枚、コットンツイル、シルク混と着やすく贅沢な生地を選び、ストレッチ素材を多く作るつもりだ。取り急ぎで30枚、2週間で合計60枚、

季節ごとにさらに増やしていく。それとヨットパーカーは、軽く速乾性があるポリエステルで。寒いソウルの冬にはカンミヤ素材で後日に。

スポーツウエアはエンポリオアルマーニでオトナセクシーに決めた。

「とてもスタイルがいいですね。筋肉質でブラウスがお似合いになります。鍛えられたボディは魅せるべきです。」

「博士がプレゼンテーションすればすべて成功するでしょう。見た目は何より重要ですから。知的でセクシー、パーフェクトです。少し恥ずかしがり屋ってところもかわいい。」

「KIKI 様がべた褒めなんて珍しい。もしかして恋人ですか？」

「博士に迷惑ですよ。残念ながら違います。パンツはストレートのシルエットで韓流式くるぶし丈をお願いします。」

MINU氏は言われるがままに全身採寸だ。

「お疲れになったら言ってください。」

「いえ、初めての経験ですがワクワクします。ファッションって楽しいですね。」

「KIKI様とだからですよ。あの方はファッションを心から楽しむことを教えてくれるんです。ぜひ博士も楽しんでください。」

「一人では難しそうです。彼女がいないと。」

「そのときはお声をかければ来てくれますよ、きっと。」

博士は鏡越しにKIKIに見つめられてドキドキする。KIKIと視線が合うのがうれしい。

不思議な感覚だった。

2時間ほどで全身の採寸が終わり、KIKIによって全アイテムの生地、デザインのオーダーが済んだ。

「博士はまだこちらにいらっしゃいますか？彼らをホテルに送って戻ってきたいのですが。」

お約束のお茶が届いたので茶器と一緒に持ちします。美味しいお茶をご一緒したくて。」

「お待ちしています。あの夕食をご一緒しませんか？うちで韓国料理はいかがですか？無理なら断ってください。いきなりすみません。」

「何かわたしが用意するものはありますか？」

「いえ、ワインもシャンパンも食材も料理人も全て用意します。18時にホテルへ迎えのクルマを行かせますので。」

「はい。ありがとうございます。」

博士は対人恐怖症って聞いたけど、これっておうちデートのお誘いかしら。お迎えまで寄越すなんて気が利くし、紳士だよね。

「LEE、無事に採寸終了。夕食に誘われた。」

「誰に？まさか博士じゃないよね。」

「博士よ。自宅に呼ばれたから実家から届いたお茶持って行ってきます。」

KIKIって変人にモテるのか・・・っていうか、博士ってもしかして怖いもの知らずなのか。KIKIを誘うなんていい度胸だよな。

KIKIはなんかドキドキしている自分がおかしかった。夕食やデートの誘いなんていつものことなのに、ボソッと話す照れ屋のMINU氏だからか。鏡越しに採寸している彼から目が離せなかった。不思議だな。あんな口数の少ない彼と何を話していいのか不安だ。

ホテルに戻って日程の段取りをしてから、ゆっくりシャワーを浴びる。ヘア&メイクをしてからドレスルームに。

セリーヌのイエローのブラウスに白のクロップドパンツ、ミニトートとサンダルはオレンジ。ピアスは大粒ホワイトパール。香りはいつものKIKIスペシャルで。

KIKIの装いはいつも上質でシンプルだ。鏡を見ながら、やっぱり女優のヤンミーにちょっと似ている気がした。MINU氏はかなり正統派の美男子だったな。

ホテルのエントランスに濃紺のマセラッティセダンが停まっている。KIKI に気づいたのか、ドライバーが後部座席のドアを開けた。車内は真っ白のレザーだ。長兄の ARAN はマセラッティラバーだがスポーツタイプ、この贅沢セダンは初乗り。後部座席は最高だ。

SUHO 代表が迎えのクルマに乗ろうと正面入口に向かうと KIKI が見えた。

あれは KIKI さん？乗り込んだクルマはたしか MINU の専用車だ。もしかしてデートか？まさか MINU が KIKI さんを誘うとは思えないが・・・。

マセラッティは15分ほど走って MINU 氏の自宅へ。先ほどとは違うプライベートエリアだ。ガラスがふんだんに使われ、照明が活かされた邸宅は、郊外にある撮影用の別荘の雰囲気だ。入口で博士が出迎えてくれる。

「KIKI さん、お待ちしていました。どうぞ。」

少し慣れてきたのか、はっきりとした話し方だ。サンプルの白いシャツがベストマッチ。

「お招きありがとうございます。これがお約束の中国茶と茶器のセットです。兄のチョイスなので確かな品だと思います。」

広いダイニングに通された。さすが御曹司の邸宅だけあって、来客用とプライベート用4人掛けのセットがある。実家のダイニングはチャイニーズ式で相当広いので慣れてはいるが・・・。

テーブルには韓国家庭料理が並ぶ。韓国ドラマや映画を観ると必ず食事シーンがある。

イタリアや中国、日本と同じだ。ハリウッドもピザやホットドッグではなく、見習うべきだが独自の料理文化がないので気の毒だ。

サムギョプサル、参鶏湯、豆腐チゲ、トッポッキ、チヂミなど色彩豊かな皿が数多く並ぶ。実家の食卓のようだ。

「LEE さんとサッシカイヤをオーダーしたと聞いています。わたしはいまアルゼンチンのワインの気分です。いかがですか？」

「南米のワインは、はっきりした韓国料理に負けない力強さとキレがあるのでわたし好みです。」

「さすが実家が一流料理店だけあって詳しいですね。」

「兄たちの影響です。」

「有名な3兄弟と聞いています。ぜひお会いしたいです。」

「3男の RON は世界中回っているのでそのうちご紹介します。2人の兄も是非紹介しますので横浜にいらしてください。宿泊も食事もうちで。美味しいのはもちろん、賑やかで最高ですよ。」

「是非。日本に行く機会があります。ではアルゼンチン、メンドーサで造られた辛口の赤から。コチュジャンに合います。」

アルゼンチンのワインは恐ろしく安価で飲みやすい。ブランド志向の SUHO は口にしないでしょ。KIKI さんもブランド志向ですか？」

「いえ、自分の好きが最優先です。当然味覚は優れているほうだと思っています。ありがたい環境のおかげで味わう愉しみを存分に体験しています。」

KIKI はスムーズに会話している MINU 氏に驚いた。声や仕草に癒される。もしかして琴線に触れている？まさかね。

KIKI さんとは自然に会話ができる。本当に楽しい。ずっと話していたい。

新薬開発の話、薬品市場が活況で株は買っておいた方がいいなど、知らない世界を教えてくれる。

KIKI は世界各国の面白い話が盛り沢山だ。久しぶりによく笑った。博士の笑顔は素敵だ。このまま切り撮って持ち帰りたいほどだ。

「本場中国人が選ぶお茶はいかがですか？コーヒーと同じで淹れ方が重要なんですよ。

博士は研究者だから教えたなら凝りそうですね。よく見ていてくださいね。」

KIKI は祖父、父から習った淹れ方で最高級のプーアール茶を博士に差し出した。茶器は中国の陶芸家に作らせた白磁が美しい逸品だ。

琥珀色が映える。

「素晴らしい香りです。これははまりそう。」

「でしょう。また茶葉をお持ちしますね。わたしはコーヒー好きなんですけど。」

「では、今度はわたしがハワイコナの逸品を淹れますね。」

ガラス張りの造りなのでリビングやダイニングから庭の照明が美しい。

ガーデンパーティもいいだろう。

リビングのソファに並んで、外を眺めながらゆっくりコーヒーを飲む。

「取り急ぎ 10 アイテム第 1 弾が 4 日後に入りますのでこちらに伺います。お仕事の邪魔はしません、警備に連絡しておいてくださればドレスルームに並べておきます。

3 週間後にはオールシーズン仕様で 100 セット程揃います。コーディネート順にセッティングしておきます。詳細はご連絡します。今日はありがとうございました。美味しい時間をご馳走様でした。」

「こちらこそありがとうございました。またお誘いしてもいいですか？」

「はい、よろこんで。」

エントランスには先ほどのマセラッティが待機。

「では失礼します。」

「ホテルまで一緒します。」

なんと MINU 氏が後部座席に並んだのでびっくり。ドライバーも哑然としている。

「お忙しいのにありがとうございました。」

ホテルまでの 15 分程、博士は無言だった。それでもやさしい空気が感じられ KIKI は心地よかった。

「おやすみなさい。」

「またご連絡します。」

明日はいよいよ SION 氏と顔合わせだ。

SION カリスマ経営者

朝 10 時のアポイントメント、SION 氏のオフィスビルだ。プラダの紺のブラウスに白のパンツ、サンダルをリュックに入れてブーツに。サングラスにヘルメットを片手にバイクにまたがる。NEXT DOOR 自社ビルのアドレスをナビに入力し出発だ。

バイク用のナビにスピーカーフォンとすべて NEXT DOOR の開発だ。素晴らしく使いやすい、多分世界一だ。5 分ほどでエントランスに到着。社員や訪問者の出入りが多い中バイクを横付けする。当然 KIKI に注目だ。

10 時の約束にギリギリだ。SUHO と MINU から失礼のないように、きちんとした格好で行けとそれぞれ電話でうるさく言うし、遅れるのは兄貴たちのせいだ。

SION は真っ赤な愛車 KATANA 1000CC を走らせる。何とか 10 分前に到着すると目の前に同車種、女性だ。外事ナンバーなんて誰が目当てなのか、大使館の仕事はしていないよな。急いでセキュリティを潜り抜け、33 階の自室に向かう。

「10 時に SION 代表と約束をしている KIKI です。」

受付の女性はヘルメットを抱えた背の高い外国人女性に驚く。

「はい、エレベーターで 33 階に。フロアに案内があります。」

「ありがとうございます。」

本日の訪問者についての情報がない。KIKI という名前と日本国籍らしいということだけで検索にもかかってこない。会話は英語だ。

「代表、お客様です。ミーティングエリアにご案内しました。」

エレベーターが開くとまるで NASA のようにいくつもの画面が並び、中央に大型スクリーンがゲームのような動画を流している。仕切りがなく広いフロアにスタッフそれぞれのスペースがあり、開発したキャラクターやフィギュアが置かれている。

服装も自由で年齢はかなり若い。代表は確か 32 歳くらい。スタッフはほぼ 20 歳代か・・・。

奥の全面ガラスのエリアに案内される。

吹き抜けの階段を降りてきたのが SION 代表のようだ。

身長 180 cm ほどで体重は 73 kg 程度、広い肩幅、厚い胸板、手脚が長い。LEE の情報通り、顔は彫りが深く韓流アイドルそのものだ。ともかくカリスマ経営者として人気があるのがよくわかる、かっこいいのだ。

コムデギャルソンオムのパーカーに T シャツ、クラッシュデニム、足元は限定のコンバース。一流のカジュアルとっていい。若者の憧れるファッションだ。(お兄さんから見れば汚らしい格好らしい。)

「お待たせしました。SION です。」

「はじめまして。KIKI です。SUHO 代表、DR MINU とはすでに仕事をしています。今日から SION さんとの仕事です。」

「SUHO は凄いね、堅物がファッションリーダーってあなたの仕事だったんだ。俺はファッション改革しなくていいよ、これが好きだから変えるつもりはない。」

「ギャルソンがよく似合うし、変える必要ないですね、かつこいいから。オフィシャルなプレゼンテーションやパーティ、記者会見で着用するファッションは用意します。いいですね。」

「必要ないよ、いかないし、やらないから。」

「あなたは世界屈指のプログラマーです。わたしのバイク用ナビもスピーカーフォンも世界一使いやすい。世界中の製品を使っていますが NEXT DOOR が最高です。だからあなた自身は世界仕様のファッションが必要です。わかりますか？」

「正面にあるシルバーの KATANA はあなたの？外事ナンバーだけど。」

「そうです。一番確実に連れて行ってくれるから世界各国砂漠と湿地を除いて大型バイクです。」

「センスいいね。俺もお揃いだよ。」

「ツーリングコースを教えてください。帰国する前に走ってみるつもりです。」

オフィシャルなファッションはわたしに一任してください。一流に仕上げますから。そして世界一流の頭脳を持つ SION さんにお願ひがあります。」

「なに？ファッションの他にあるの？」

KIKI は本来の目的である開発案件の話に入る。

音声翻訳トランスレーションだ。世界会議に使われているものをさらに精度アップさせ、イヤフォンとアバターによる画像解説と字幕でプレゼンテーションできるシステム。

端末はタブレット、スマートフォンで手軽にどこでも同時通訳、翻訳でプレゼンテーションやミーティングができるシステムが欲しい。

「デジタルセクレタリー（電子秘書）を開発中と聞いています。音声に反応して 3G のアバターがデータ入力したスケジュールを伝えるというものだとか。いわば NEXT DOOR のミニファイルデータと音声で連動、保存された情報を利用して質問や指示に応じてくれる。」

そこでさらに絞り込んだ機能として、デジタルクローゼット、あるいはスタイリストはできないか。その日の気候やスケジュール、TPO に合わせて洋服をコーディネートしてくれる。もちろんアイテムの入力や、ナンバリングなど初期の入力作業には人力が必要だ。

「わたし程度の頭脳ではうまく説明できませんが、そこは世界トップの頭脳で理解してください。可能でしょうか？デジタルクローゼットは SUHO 氏、特に MINU 氏、そして SION 代表に必要です。人工知能搭載となれば世界の VIP が欲しがらるでしょう。市場は十分に見込めます。いかがですか？」

NEXT DOOR のミニファイルがさらに進化したデジタルセクレタリーの情報を知ったうえで、それを応用したピンポイントのプログラムが欲しいという。音声データを瞬時に翻訳するトランスファープログラムも開発に着手したいと考えていた矢先だ。それを知り合ったばかりの外国人女性に指摘されるとは・・・。

「ずいぶんと早い情報ですね。どこから漏れたのかな。」

「ミニファイルはある程度認知されています。次のフェーズはピンポイントに売りを作ることかなと。わたしならそうするし、実際に使いたいので提案してみました。無理ですか？」

俺に無理とか言ってる???不可能なんてないさ。見くびられているのか・・・。

「最初にデータを蓄積するのは人間の感性なので大変だけど、そのデータを最大限使いやすくすることはできる。」

「デジタルクローゼットに関してはわたしが3兄弟のスタイリングを入力します。写真撮影して、クローゼットの場所とアイテムが共通ナンバーで保存されたいかがですか？」

「方法は考えてみるよ。データ蓄積は大変だけどやるの？」

「その部分がわたしのオリジナルであり、売りですから。」

「ふーん、そうなんだ。同時通訳、翻訳とデジタルセクレタリーはあと少しで完成する予定。まだ少し不安定だけど調整すれば問題ないと考えている。クローゼットについてはもう一歩追求しないと。手伝ってもらうよ。いいね。」

「ご自宅のドレスルームをいじらせてください。きっと私の選択眼に惚れますよ。SIONさんはオシャレですから、さらにグレードアップさせていただきます。いまから自宅に何うので警備に連絡を。代表はお仕事を続けてください。今日は見せていただくだけですから。」

「いいよ。」

MINU 博士や SUHO 代表の自宅からほど近い SION 氏の自宅はコンクリートのモダン建築で、大きなガラスがはめ込まれ、まるでミニルーブル美術館のような邸宅だ。LOTUS にメルセデスのゲレンデがガレージに。センスがいい。テニスコートにプールもある。

秘書らしき男性の案内で、ガラス張りの明るい通路を歩く。右側に広いリビング、ダイニング、調理場、大きな暖炉、ビリヤード台があり、仕切る扉のない横長の建物のよう。ミニシアターに、ボーリングのレーンと、まるでゲームセンターのように試作のゲームが並んでいる。ちょっとしたアミューズメントパークだ。

奥に広がるプライベートエリアはダイニングキッチン、リビング、ベッドルーム、書斎、ドレスルーム、シャワールームがあるようだ。

パーティ会場としても十分な広さで、兄弟3人3様ながら、共通点はただひたすら広いことだ。

KIKI 目的のドレスルームはセレクトショップのように、ブランド別に相当数、ポールに下がっている。コーナーごとに大きなミラーがあり、ガラス張りのディスプレイ台に小物類が、壁一面を飾るシューズラックがある。

SION 氏はアイテム別ではなくブランドごとに分けているようだ。それにしてもセンスがいい。KIKI は彼のファッションが好きだ。ここにスーツ、タキシード、ジャケット、スラックス、ブラウス、ネクタイ、チーフ、シューズ、靴下など新たなエレガントコーナーを増設する。ブランドに分けることを尊重するつもりだ。

ジャケット&スラックスはイッセイミヤケにドリスヴァンノッテン、ヨージヤマモト、エトロ。

スーツはプラダ、グッチ、ブルックスブラザーズ。タキシードはアルマーニだ。

カジュアルブランドに、アレキサンダーマックイーン、KIKI のお気に入りのルイヴィトン、バレンシアガを投入しよう。

「SION さん、至急ドレスルームの増設をしますので許可をください。設計担当はお任せします。ハイレベルなセンスですね。アイテムではなくブランドで分けるので、各メゾンに採寸を依頼します。HD 本社にス

タイリングルームを作りましたのでそちらにお越しくください。日時は SION さんの都合で決めてください。」
ブランド別ってきちんとわかってくれたんだな。仕事ができで速いのはプロだから当たり前だ。あとは感性が俺と合うか知りたい。

「明日のパーティに行きたいからタキシードを速攻で。あとは明後日をお願いします。」

「明日のパーティに出席するんですね。了解です。ではアルマーニのサロンに 18 時はいかがですか？」

「KIKI さんが、夕食につきあってくれるならいいよ。」

「はい。ではアフターデートで。」

やった！思い切って誘ってラッキー。スパニッシュに行こう。あそこは財閥系、外資系のエグゼクティブ、韓流スターやマスコミ関係が多く、記者も群がっている。KIKI さんと記事になって、既成事実になるのも悪くない。明日のパーティでさらにヒートアップするかもしれない。ひと目惚れって、こんな感覚なのか・・・KIKI が頭から離れない。

SION はゴシップの常連で、女優やモデルとデートするたびに記者が狙っていることを利用するつもりだ。

KIKI はホテルに戻って各メゾンに連絡を取り採寸を依頼する。ソウルにランチがあるメゾンから、一通り出店している香港、シンガポールから数日後に入国する手配をした。

各メゾンも、KIKI の依頼ということはもちろん、財閥でしかも世界的に有名な NEXT DOOR 代表の SION 氏となると、メディアの露出も多く影響力が大きい。彼そのものが宣伝になるので、新作アイテムを相当数手持ちで、即ソウル入りするはずだ。

さて本日のディナーは何を着ようか。黒地に白い花のプリントのセットアップに白のミュール、ミニバッグはバンブーの白と全てグッチ。ピアスとリングは大粒の真珠で。

17 時 45 分にフロントから迎いのクルマが到着したと連絡。真っ白なベントレーの後部座席から SION 氏が降りてきた。行き交う人の視線が彼に注がれ、シャッター音が一斉に。

さすが有名人！

パッションオレンジのジャケット、レモンイエローのブラウス、ホワイトデニムはすべてエトロ。フェラガモのスリッポンはマリンブルーだ。華やかでいてエキゾチック。

被写体になるのが納得のカリスマ性だ。

あれは SION だ！

KIKI はハングルがわからないがあちらこちらで「SION」と聞こえる。まいったな。

「KIKI さん、行きましょう。」

「お迎えありがとうございます。SION 代表のファッションはどストライクです。」

「いつものスタイルでは KIKI さんをエスコートできませんので。」

瑞々しくクールなイッセイミヤケの香りが鼻腔に流れ込む。

モダンなガラス張りのジョルジョ・アルマーニの正面にベントレーが到着。ドアマンの案内で入店。ベントレーと SION 氏はさすがに目立つのでここでも被写体だ。

「いらっしやませ。KIKI 様、お久しぶりでございます。本日は有名な SION 代表をお連れいただきありがとうございます。」

「明日のパーティ用に至急タキシードをオーダーしたいとことです。さっそくフィッティングを。代表はクリエイティブな方なので、他とは一線を画した装いをお願いします。アルマーニらしさというより、代表らしさが表現したいので例のデザインをお願いします。」

KIKI さんは世界中のメゾンと関わっているらしいと聞いていたけど本物だ。俺らしさなんて嬉しいけどアルマーニにあるのかな。

支配人によって運ばれたボディには、ストレッチを効かせた白い生地、ボディにフィットするシルエット、細身のパンツにくるぶし丈。ブラウスは光沢のある白、カマーベルトとタイはブラック。カッコいい。

「ベネチアを舞台にした映画で主演のジョニー・デップが着用したタキシードがモデルです。アクションシーンがあるのでストレッチの効いた生地を特別に誂えました。袖と裾にスリットが入り動きやすいです。わたしたち誰もがすべて衣装デザインをしました。このタキシードは是非代表にと KIKI 様のご指定です。」

SION はここでまさかジョニー・デップ仕様のアルマーニを着るとは思ってもいなかった。

「支配人、肩幅と胸幅、上腕にもう少しゆとりを。代表は筋肉質で理想的なボディです。袖を2センチほど伸ばしてね。あと肩から胸にかけてのシワは絶対に NG よ。」

「はい、数ミリの狂いもなく修正させていただきます。KIKI 様の要求は最上級ですから心得ております。SION 代表、着心地はいかがですか？とてもお似合いです。」

「カラダに馴染むし気持ちいい。彼女のセンスがいいのか、こんなタキシード初めて。俺にぴったりだ。」

「では明日のパーティに間に合わせてね。SION 代表のオフィスに昼までによろしく。カフリンクスはどうしますか？ダミアニは男性用のアクセサリが充実していますので、明日 13 時に靴とともにお持ちします。選んでくださいね。」

「KIKI さんもいるよね。」

「はい、きちんと全身正装を完成させます。」

アルマーニは代表のセクシー&エレガンスを見事に表現できるブランドです。是非これからも愛用してくださいね。さすがにお腹が空きました。今日はシャンパンの気分です。」

2人を乗せたベントレーは、大きな門扉をくぐり邸宅のエントランスに。ドアマンによって大きな扉が開かれると、室内庭園のあるサロンにスーツ姿のパワーピープルやファッショナブルな芸能人、周りには美しい女性がシャンパングラス片手に談笑している。

SION 氏が KIKI の手を握り歩き出すと全員が注目。

「代表、お久しぶりです。」

「こちらで一緒にしませんか？」

と声をかけられるなか、フロアマネージャーらしき制服姿の男性が

「いらっしゃいませ。奥のお席をお取りしています。こちらへどうぞ。」

とって奥に案内してくれた。手前のフロアはバーで、その奥がレストランのようだ。

スペイン語で

「KIKI、久しぶり。ソウルで会うなんて。」

「ええ？あらアントン？どうしてここに？」

「大使館の仕事で、スペイン大使とここで待ち合わせ。KIKIは？」

「仕事で滞在している。」

SION氏が

「わたしの連れのお知り合いでしたか？初めまして、NEXT DOORのSIONです。」

「失礼しました。わたしはスペインの外務省書記官アントニオです。SION代表には明日お会いできると思っていましたが、今日会えるなんて幸運です。」

「いつでもご連絡ください。大使館へ伺います。」

そこに聞き慣れた声が・・・

「KIKI、ここで会うなんて。」

「RON！どうしてソウルに？」

とKIKIは背の高いアジア系の男性に駆け寄り抱きついた。周囲が国際的ハグを呆然と見つめるなかSION氏は固まった。KIKIが抱きついた男性は、背が高く容姿端麗、ソウルでは見かけないアジア系の超イケメンだ。相当目立っている。

「KIKI見られているぞ。」

「だって久しぶりなんだもん。」

2人の会話は日本語らしい。SION氏に気づいた男性が近寄ってきた。

「初めまして、SION代表。お会いしたくてこちらに来ました。KIKIの兄RONです。」

「SIONです。お兄さんでしたか・・・ディナーにKIKIさんを独占してもいいですね。」

「もちろんです。食事のあとバーで少しお話をさせていただきますか？フェレル大使をご紹介したいので。」

KIKIはスペインの仕事で会っているはずだよ。」

「あの時は大臣だったよね。いまは大使なんだ。お腹空いているから後でね。SIONさん行きましょう。」

それにしてもKIKIさんはどれだけ顔が広いのか。俺の知り合いとはレベルが違う。今日は大使に、韓流スター越えの超イケメン兄貴にどうなんだ。

「メニューはお任せでいいですか？シャンパンはモエのピンクで・・・。」

「SIONさんにお任せします。」

これだけの人が集うだけあって料理は見事だった。

アヒージョ、イベリコ豚、パエリア、オムレツ、ムール貝のワイン蒸し、大使館が鼻屑にするだけあってさすがだ。シャンパンの後はバローロの赤をグラスで、最後はグラッパだ。

KIKIさんとは会話が途切れることがない。俺の開発製品を熟知して、これからどう進化すべきかを彼女の視点で話してくれる。世界中どこでも誰もが使いやすいデジタルセクレタリーや翻訳機能と、ピンポイントの限られた市場、世界の富裕層を狙ったデジタルクローゼットやスタイリストは面白い。ソフト重視で価格競争にさらされることもない。何が必要かはKIKIさんが熟知している。

さすがが世界一流のプログラマーだ。自信過剰で、失礼の度が過ぎると言われながら、素晴らしく優秀なことも事実だ。そして独創的で感性が研ぎ澄まされているところがKIKI好みだ。ファッション感覚も似ている。

RONはSIONの素晴らしさはもちろん、KIKIは気づいていないだろうが、SIONとKIKIは恐ろしく波長が合うことを直感した。2人を包む空気がそうさせている。SION氏とKIKIの共通点は、育った環境のせいで卑しいところがなく優雅、末っ子で家族にとっても愛されていることだ。かなり問題児と聞いているが、KIKIなら彼の魅力や能力を最大限に引き出せる気がする。

「SION代表、スペイン大使を紹介しますので、こちらの席にいかがですか？」

「KIKIさん、行きましょう。スペイン語は問題ありませんのでお気遣いなく。」

「大使、こちらの方がHDグループの御曹司であり、NEXT DOORの代表、世界的なプログラマーのSION氏です。」

「スペイン大使のフェレールです。RONさんとは外相の時からの付き合いです。あなたのプログラムする製品に興味があります。一度プレゼンテーションをお願いしたくて、RON氏にセッティングをお願いしました。」

「是非。興味のある分野を教えていただければすぐに大使館に伺います。ご連絡をお待ちしています。」

「SION代表、欧州各国があなたのプログラムする製品に興味があります。近日、申請している世界基準の認可を、すぐにジュネーブで発行してもらえるように手配しますので、出国の準備をお願いします。この認証は世界規模のNEXT DOORには至急必要です。」

「なかなか認可が下りるには時間がかかると聞いていましたが・・・。」

「RONならすぐに手配できます。これから益々引き合いがありますね。まずはわたしどもからお願いしますよ。今日はSION代表に会えてよかったです。」

KIKIは相変わらず世界中で活躍していますね。ドバイからソウルとは。」

「RONほどではありませんが、マイルが貯まることは確かです。」

「ではSION代表、明日のパーティで。失礼します。KIKI、明日のパートナーは？」

「ご心配なく。HDの代表です。」

「SIONさん、美しいスパニッシュですね。」

「世界は英語・スペイン語・中国語の人口比率が多いので必然的に話すようになりました。MINUが先生です。KIKIさんは？」

「わたしも同じです。スペイン語を公用語にする国は多いですから。それにリーガの大ファン。まだスペインで観戦していなくて、是非大使にお願いするつもりです。」

「そのときはわたしも誘ってください。」

SUHOがKIKIさんをエスコートするのか。そういえばタクシーを新調するって言ってたな。出会って先に会ったほうが絶対に有利に運ぶ。

KIKIはベントレーでホテルに送ってもらい、明日の13時にNEXT DOORに行くことを確認した。

「では明日13時に伺います。今日のご馳走様でした。」

SIONはKIKIとの食事が本当に楽しかった。先日MINUの家で食事したらしいし、明日のエスコートはSUHOだ。タイミングが悪いのは俺だけか。

女性とのデートなんて日常なのになんでこんなに気になるのか。KISSもしないで別れるなんてあり得ない。

翌日、セリーヌから届いたドレスを着てみる。さすがKIKIを知っているだけあってベストマッチだ。RONもびっくりだな。美容院では華やかにセットしてもらおう。ネイルはシャンパンゴールドに決めた。

KIKIはレクサスでNEXT DOORに。受付もスルーで33階の代表室に。不思議と誰にも会わなかった。確か代表室の奥がプライベートエリアだったはず。扉の前には女性のヒールとバッグが転がっている。パーカーにTシャツが脱ぎ捨てられている。

「SION代表、KIKIです。約束のお時間です。」

センサーなのか扉が自動に開くと、今度はランジェリーが点々と・・・。

これは完全お楽しみ時間ね。さらに奥の扉が開いて、上半身裸のSION氏と女性が抱き合っただけの熱いキスを交わすシーンが・・・。

「あら、失礼しました。」

SION氏は慌てて

「あ、時間でしたね。すぐに行きますのでお待ちください。」

女性は

「まだいいじゃない、待たせておけば。ねえやめないで。」

と甘えた声でSION氏のカラダにすがる。

「ごゆっくり。靴とカフリンクスはお好きなものをお選びください。これで失礼します。」

KIKIは足早に去っていった。そういえば代表はゴシップの常連で、モデル、女優との噂が絶えない人だ。それにしても生々しい場面だった。気分悪い！さっさと美容サロンに行こう。途中、SION代表からのコールが何十回も入るが無視だ。ダミアーニとベルルッティの担当に連絡をしておいたし問題はない。あの様子では、あと1時間は女性が解放してくれないだろう。まあ御曹司にはよくあることだ。

KIKIはホテルに戻ってパーティ用一式持ってタクシーに乗る。SUHO氏から連絡が入る。

「KIKIさん、サロンに18時にお迎えにあがります。楽しみにしています。」

「はい。お待ちしております。」

トラブルのおかげで時間がたっぷりある。フェイシャルコース、手足のネイル、メイクアップ、ヘアセットをオーダー。LEEが英語の話せるスタッフを指名してくれたので気楽だ。少し眠りたい。

17時半、KIKIがフィッティングルームから出ると、そのゴージャスさにスタッフが注目。海外での仕事が多いので着慣れ、場慣れしているKIKIは堂々としている。

10分前、サロンの入口にベントレーが停まった。後部座席からSUHO代表が降りる。

サロンに入ると

「KIKIさん、なんて素敵なんだ。エスコートできるなんて本当に幸せだ。」

KIKIに駆け寄り抱きしめた。周囲はファッションリーダーのSUHO氏に見惚れ、シャッターを切る。そして熱くゴージャスな抱擁シーン。ソウルとは思えない光景だ。

「代表、タキシード姿が素敵です。わたしこそたくさんの女性に恨まれそうですね。このドレスはいかがですか？見てください。」

「すべてが輝いています。パールも華やかですが、KIKIさんのゴージャスさにはかなわない。皆さんもそう思うでしょ？彼女はわたしのパートナーです。」

と興奮気味に周囲のスタッフに話している。

パートナーって？勘違いされそう。まあいいか。昨晩はSION氏とSNSにアップされているだろうし、今日はSUHO氏だな。まあ見ないからいい。ハングルはわからないし。

SUHO氏に手を取られサロンを出る。一斉に携帯のシャッターが光る。

ベントレーの後部座席に滑り込んだ。

「昨晩はSIONとのデートがだいぶアップされていましたね。あと謎の男性とのハグも。」

「タキシードを選んだ帰りに夕食をご一緒しました。レストランでスペイン大使と一緒に来ていた兄のRONに会って。謎の男性はRONです。SION代表をスペイン大使に紹介していました。」

「そうでしたか。SIONとは意外です。珍しく今日のパーティは参加するらしく驚きました。」

「彼のタキシードはSUHO代表に負けずかなり素敵ですよ。」

スペイン大使館に到着。ここは庭園が素晴らしいと聞いている。ドアマンがベントレーのドアを開けるとそこには真っ赤な絨毯が……。レッドカーペット???左右にはカメラのフラッシュと記者が鈴なりだ。

SUHO代表は有名人だから当然被写体だ。

KIKIは眩しいフラッシュを浴びながらSUHO氏と腕を組み堂々と歩く。

SUHO氏は誇らしげだ。扉の奥からRONが歩いてくるとさらにシャッターが切られる。被写体としてはかなりハイレベルなRON、カメラマンは見逃さない。

「はじめまして、RONです。SUHO代表にお会いできて光栄です。」

「すでに昨夜のSNSでお顔は拝見しました。KIKIさんのお兄様とか。ソウル中で話題になるだけの容姿ですね、カッコいい。」

「いえいえ、ファッションリーダーであり、結婚したい男性ナンバー1のSUHO代表に褒められて恥ずかしい限りです。KIKIがお世話になっているようでありがとうございます。」

「こちらこそ、ファッションリーダーにしてもらってうれしいです。」

今日はスペイン大使館主催のビジネスパーティ、いわば事業家や投資家が顔を合わせる場でもあり、女性にとってはパートナー探しのチャンスでもある。

韓国の女性は美肌で美人揃いだ。ピンクのドレスがよく似合う。

そこにSION氏が先程までセクシーな逢瀬を愉しんでいた女性と到着だ。白のタキシードがひと際目立っている。連れの女性は若く美しく白のドレスが映える。女優さんらしい。

「KIKIはSION氏といい雰囲気だと思ったけど。」

「RON、数時間前に一緒に女性と裸で抱き合っていたのを見ちゃった。それも事務所で。13時のアポだったのに、しっかり熱烈にお楽しみ中でした。ゴシップの常連だからアリかも。それに若い美人が好みのようなから、RONの勘違いよ。」

「それは災難だったな。」

SION 氏の靴もダミアーニのカフリンクスもタキシードにマッチしていて KIKI はひと安心だ。さすがに今晚は顔を合わせたくないの SUHO 氏のリードで投資家の輪に。あらゆる言語で会話をする KIKI は当然輪の中心だ。SUHO 氏は彼女から離れなかった。だれが見ても 2 人は恋人同士だ。しばらくすると KIKI はビュッフェに。ここソウルのパーティは食事が美味しく多種多様で有名だ。チヂミにサムギョプサル、韓国風海苔巻き（キンパ）を皿に盛って、シャンパングラスを片手に隅の席に移動すると、書記官のアントンがやってきた。

「KIKI、SION 氏のタキシードカッコいいね。君の見立て？」

「仕事だからね。SUHO 氏もよ。」

「わたしは彼の頭脳と能力が魅力だね。RON が認める逸材だから。」

「ただのオンナ好きみたいだけど・・・。RON はいつまでこちらに？」

「数日後にワシントンとか。」

「あとで連絡する。」

KIKI はお腹もいっぱいになって一通りの挨拶も終えたので、SUHO 氏に先に帰ることを告げた。

SUHO 氏のベントレーを車寄せで待っていると、SION 氏が駆け寄ってきた。

「KIKI さん、さっきは失礼しました。言い訳はしないけど・・・。」

「いえ、気にしていません。今日は一段と素敵でしたよ。明日採寸に HD の本社に来ていただけますか？時間はかからないように配慮します。2 時間程かな。」

「では 16 時、仕事を片付けてから行きます。お詫びに夕食はいかがですか？」

「謝っていただくことはありませんので気にしないでください。それに仕事がありますから。それでは失礼します。」

KIKI は SUHO 氏のベントレーに乗り込んだ。

裸で抱き合うシーンを思い出すだけで気分が悪い。悔しいくらいセクシーだった。SION 氏の顔を見ると悪夢が甦る。会いたくないけれど仕事だから仕方ない。

見事に KIKI に振り切られた SION。タイミングが悪過ぎる。ついつい誘惑に負けてあんなことに・・・。隙があった自分が悪い。気になって仕方がないのにうまく気持ちが伝えられない。女性は勝手に近づいてくると思っていた。気持ちと反対の行動に出る自分の幼稚さに腹が立つ。こうなって初めて自分の気持ちを知るなんて・・・。情けなく悔しい。

ホテルに戻った KIKI はバーに向かう。切り替えたかった。ここのバーはこじんまりして居心地がいいと LEE のお薦めだ。ドレス姿の KIKI は注目度満点。

カウンターの端に座りバーボンダブルロックをオーダー。

ソウルの仕事は早々に片づけよう、長居は禁物だ。

一風変わった弟キャラに惑わされそうになったけど、真剣にお付き合いするなら父のように誠実で包容力のある男性がいい。どう考えても、オンナがまとわりついてくる 32 歳の彼とは友達以上恋人未満にしかならない。ときめきは錯覚だな。

恋愛細胞がここんところ無沙汰で退化しているのか、ラブ感が鈍化しているようだ。情けない・・・。

明日は朝から博士の自宅に衣装が届く日だ。

DR.MINU と SION 代表

レクサスで博士宅に、9時に搬送トラックが待機。トラック 10 台ほどを KIKI の指示で運び込む。ドレスルームでブラウス、パンツ、ジャケット、スーツ、タキシードなどそれぞれコーディネートして写真撮影。博士が迷うことなく導線に従ってアイテムをピックアップすることで、その日の基本コーディネートが出来上がるように並べられる。

シーズンや気候、気温によってジャケットやコート、小物をプラスしたコーディネートの写真もあるので、LEE とアシスタント 6 名、カメラマン 4 名で取り掛かる。5 時間ほどの作業だ。

KIKI はリビングで博士と打合せ。

「おはようございます。朝からバタバタ人の出入りがありすみません。15 時までに快適なドレスルームに仕上げます。使い方はわたしが説明しますので 1 時間ほどお付き合いください。あと中庭にケイタリングトラックが入ります。スタッフのドリンクやランチを用意しますので、博士はもちろん、研究室のスタッフもぜひ一緒に。」

スタッフ用にケイタリングトラックとは、おしゃれでカッコいい。

業種が違くと仕事の進め方がまるで違う。

ケイタリングトラックを入れるとはさすが KIKI だ。うちのスタッフも大喜び。ちょっとしたガーデンランチだな。博士も人馴れするだろう。

どんな仕事も思い切り楽しむ姿勢は、また一緒に仕事をしたくなる KIKI の魅力だ。

LEE は益々 KIKI が気に入った。

コーディネートの写真はデータとして、デジタルクローゼットのプログラムに入力される。どのコーディネートも素晴らしくカッコいい。LEE は DR.MINU としっかり顔を合わせて話したことがなかったので、彼のカッコ良さ、セクシーさを今日改めて知った。

白いブラウスを着たらソウルで一番カッコいいかもしれない。

KIKI のスタイリングは彼の魅力を最大限に引き出す。

やはり博士も誌面に登場してもらおうことにしよう。

ランチは多種多様の韓国家庭料理が並び、ビッフェスタイルなので好きなものを好きなだけ食べることができる。テーブルとチェアも用意されガーデンパーティのようだ。

「LEE さん、改めてご挨拶させてください。HD の MINU です。KIKI さんへのオファーに感謝します。彼女に依頼するのは大変だと聞きましたが、噂通りのワールドワイドな仕事ぶりに驚いています。」

「わたしも仕事を組むのは今回が初めてです。型破りな豪快さがかっこいいですね。」

「今日の予定はどうなっていますか？」

「このあと 16 時から HD に用意したフィッティングルームで SION 氏の採寸があります。2 時間ほどで終わるでしょう。アフターはわかりません。」

「SION ですか……。KIKI さんに聞いてみます。」

博士は KIKI を夕食に誘うつもりかな。SION 氏の方が積極的みたいだけど・・・。

200 コーデの写真撮影を終えて 14 時半に。データを整理してもらうようにデジタルスタッフに依頼。博士にドレスルームの説明をする。

「入口から順番に導線に従ってアイテムを揃えると、簡単にその日のコーディネートができます。ナンバリングしてあるので、アイテムごと同じナンバーで揃えればいいんです。

秘書の方にもきちんと伝えてありますから。これに SION さんのミニファイルデータをプラスすれば、気温やその日のスケジュールによってコーディネートを教えてくれるようになります。今日の撮影データはそのためでもあります。」

「慣れないのでしばらく KIKI さんには来てもらえませんか？」

「もちろんそのつもりですからご安心を。それにプレゼンテーションの準備もありますからしばらくはご一緒させていただきます。仕事の邪魔をしないように気をつけますので。

これからは SION 氏と打合せをしながら、完璧なプレゼンテーション動画、使いやすいドレスルームを仕上げますのでご期待ください。」

「はい。あの、18 時に HD のフィッティングルームに迎えに行きます。いいですか？お食事にお誘いしたいので。」

「はい。着替える時間がないのでカジュアルな雰囲気のお店でお願いできれば。」

LEE とクルマに乗り込みホテルに戻る。

「博士に誘われなかった？KIKI のスケジュールを気にしていたから。」

「うん、18 時にフィッティングルームに迎えに来るって。」

「KIKI はどんな感じなの？」

「うーん、温かさややさしさは兄たちと同じかもしれない。癒されるかな。まだ何もわからないけどね、会話が少ないから。2 日後に RON と会う予定だから、データをよろしくお願いします。」

「うちのデジタルチームはハイレベルだよ、任せて。」

KIKI は部屋に戻りシャワーを浴びる。

毎日 SUHO 代表のおかげでカサブランカが香しい。

何を着ようかな。グッチのセットアップにしよう。ネイビーで袖と裾と衿にブルーが入ったストレートシルエット。バンブーのトートにフェラガモのネイビーのポンプスで決める。ビジュはシャネルで華やかに。SION 氏の採寸立会いは、ローヒールとノーアクセサリーで、出掛けにデート仕様に仕上げよう。

16 時にフィッティングルームで各メゾンの採寸チームと打合せ。

すでに準備はできている。

16 時過ぎに SION 代表が到着。さっそく採寸に入る。

タキシード、ジャケット、スーツ、パンツ、コート、靴。

「ヌードサイズがスキャンでデータ化されるってのはどう？KIKI さん。」

「ぜひお願いします。ただしジャケットやスーツに関しては、ヒトの手による採寸が必要です。そこは代表

にご理解いただきたいですね。」

イッセイミヤケ、ヨージヤマモト、ドリスヴァンノッテン、エトロ、アレキサンダーマックイーン、プラダ、ルイヴィトン、バレンシアガとフォーマルからビジネス、カジュアルまで各メゾンのプロフェッショナルが手際よく採寸する。見事な光景だ。

KIKI は鏡越しに見ながら指示をする。袖の長さ、裾、肩から胸にかけてのライン、細かいしわまでチェックする。

LEE はプロ相手に細部にわたりチェックを入れる KIKI のこだわり、プロからも絶賛される一流を見た。

SION は、KIKI のファッションに対する揺ぎ無い自信とプライドに感激した。

なかなか周囲にはいない絶対的な何かがある人だ。仕事の話で盛り上げられるのも彼女だけだ。愛され愛するパートナーでいたい。どうしたらいいのか・・・

実際は空回りばかりしている、そのうえ失態まで・・・。サイテーだな、俺は。

「SION 代表、疲れませんか？今日 DR. MINU のコーディネートの撮影をしました。200 パターンあります。近日ご相談させてください。確かジュネーブに入ると聞きましたので、出張用にスーツ 10 着は間に合わせます。安心してください。」

「出張は 1 週間。荷造りを手伝ってくれますか？」

「はい、ご要望であればスーツができ次第お伺いします。」

「今日、この後ご予定は？」

「はい、先約があります。」

「また今日のスタイルも KIKI さんは決まっているもんね。デートかな。」

「はい、そんなところです。」

そろそろ採寸が終わる頃、フィッティングルームに DR. MINU が入ってきた。

「もうそんな時間ですか？あと少しで終わりますのでお待ちいただけますか？」

「早めに到着したので、待っていますので、わたしに構わず仕事してください。」

「どうして MINU がここに？」

「SION、また数段カッコよくなりそうだね。これから KIKI さんと約束があるんだ。」

DR. MINU は光沢の美しい真っ白なコットンツイルのブラウスにオレンジ色のパンツ、紺のスリッポン。まるで韓流スター並みのカッコ良さに SION もびっくり。

「なんか MINU がカッコいい。話し方も態度も堂々としているし、どうしたの？」

LEE が SION に話しかける。

「SION 代表、KIKI マジックですよ。彼女のコーディネートは自信が湧くんです。」

「SION 代表、長い時間の採寸、お疲れ様でした。皆さんも大変お疲れ様でした。ありがとうございます。では SION 代表のファッションはでき次第納品日の調整に入ります。詳細はまた連絡しますので。

博士、ここでお待ちください。すぐに仕度をしてきます。LEE、SION 代表をエントランスまで送ってくださいね。」

KIKI は至急レストルームに駆け込み、メイクを直してヘアスプレー。ビジュウを纏って、ハイヒールに替

える。仕上げに香水をシュッとひと吹き。完璧だ。荷物を置いて戻る。

「お待たせしました。行きましょう。」

MINU はまっすぐ KIKI を見つめる。もううつむくのはやめて彼女をずっと見ていたい。

ホテルのエントランスに停めた SION の LOTUS の隣に、ポルシェ 9 1 1 GT3 のシャークブルーが、MINU の愛車だ。

このクルマでデートなんて MINU の積極性はいったい何なんだ。女性なんて乗せたことないはず。驚きと悔しさいっぱいだ。

LEE はこのポルシェは誰のかドアマンに聞いて、博士とわかりびっくりだ。

MINU 氏の積極的な行動は KIKI への想いなのか。彼女は本当に不思議な女性だ。

HD の 3 兄弟が彼女に気があるとは・・・。

ドアマンによってクルマが回されると、KIKI はびっくり。RON と同じ車種に色だ。

「兄のクルマとまるっきり同じです。博士もポルシェラヴァーとは驚きました。」

博士は助手席のドアを開け KIKI を乗せた。

「今日はドライブを楽しんだ後に食事に行きましょう。」

DR.MINU との初デート

2時間ほどクルマを走らせて海辺のリゾートホテルへ。広いエントランスにクルマを停めてキーをドアマンに渡す。

「MINU 博士、いらっしゃいませ。お待ちしております。」

支配人他スタッフ一同お出迎えだ。

「ここは HD のリゾートホテルです。1泊して明日朝にソウルに戻りませんか？宿泊に必要なものはすべて揃えましたのでご安心を。クリーニングは朝一番で仕上がります。」

「えええ！もちろん素敵なりゾートホテルですが、お泊りですか？」

「同じ部屋ですが、寝室もバスルームも全て別です、ご安心を。」

「博士とは一晩中話していたいので楽しみです。お腹が空きました。」

「一大決心をしてお誘いして良かった。断られるかと内心びくびくしていました。フレンチ、イタリアン、コリア、和食がありますがご希望は？」

「博士のお薦めで。」

スイートルームはファミリータイプで2部屋分の広さだ。

中央に広いリビング、ダイニング、キッチンがあり、広いテラスから海面を照らす美しい月が一望できる。

2人はテラスで海を眺めながら冷えたシャンパンを満喫。

ゆっくりと穏やかな時間だ。彼といるからなのか、波の音や雰囲気そうさせるのか、来てよかった。博士は長兄の ARAN に似ているかも。もちろん KIKI より少し年下だ。

部屋にはランコムの化粧品、ラ・ペルラの下着、着替えなどが揃っていた。寝る前にクリーニングに出そう。

夕食は博士の希望で地元の魚介を使った庭園 BBQ。サムギョプサルも絶品だ。

「ドクターは焼き方にこだわりますのでお任せするといいですよ。」

「シャンパンはモエのピンクをご用意しました。生ビールも冷えています。」

「タレは4種をご用意していますのでお好みでお召し上がりください。」

調理スタッフのサービスが素晴らしい。

「今度は博士のガーデンでぜひ。」

「では近いうちにご招待します。」

「家庭菜園もいいですね。実家の庭園は野菜からハーブといろいろです。畑作業は好きなんです、仕事で離れることが多くて、スタッフに任せっきりです。」

波の音とパチパチ薪の燃える音、お肉を焼く音、それらの香りに満たされながら最高のガーデンディナーだ。

SION は KIKI と MINU のデートが気になって仕方ない。

憂き晴らしにパーティに出かけるが集中できない。相変わらずモデルに囲まれ華やかな SION だが、まるでうわの空だった。

「会社に戻る。迎えのクルマを呼んで。」

SION は迎えのクルマでオフィスに。MINU のナビを追跡すると、HD のリゾートホテルに停まっている。まさか MINU が？ありえない。ドライブしながら食事ってとこだな。いきなり恋人ってことはないだろうし・・・。

早くソウルに戻ってこい。こんな時は仕事するに限るな。

SION はコンピュータに向かってキーボードを叩き始めた。

ゆったりとした穏やかな時間は多忙な KIKI を十分に癒してくれた。

「KIKI さん、夜風が冷たくなってきました。部屋に戻りましょう。美味しいコーヒーを淹れますよ。」

「はい。スタッフの皆さん、ご馳走様でした。大変美味しくいただきました。」

MINU 氏と KIKI は最上階の部屋に戻る。

コーヒーを淹れる大きな背中、ペーパーに滲んで落ちる音、濃い目の香りが心地よい。

「博士はわたしの兄に見た目も仕草も声も似ています。末っ子のわたしを一番可愛がってくれます。」

「家業を継いでいると聞いています。」

「はい。長男は事業全般を、2番目の兄は父と同じで料理人です。3番目は防衛省勤務といろいろです。」

「うちも SUHO が事業を継いでいます。彼のおかげでわたしと SION は自由に好きなことができます。」

「長男はどこも大変ですね。わたしなんて自遊人そのもの、兄たちはいろいろと助けてくれています。」

「今日はお疲れのところ、いきなり連れ出してすみません。」

「いえ、サプライズで楽しかったです。」

「ソウル滞在はいつまでの予定ですか？」

「SION 氏の新製品発表会、投資家向けのプレゼンテーション、記者会見、メディア取材と、博士の新薬のプレゼンテーションの動画制作、学会、記者会見、メディア取材、ドレスルールの完成とまだまだかかりそうです。もともと4カ月の予定でしたが少し延びそうです。大体いつも3～4カ月程度です。」

「そのあとは？」

「日本で1か月ほど休暇、いや今度はずっとゆっくりするつもりです。さすがソウルを代表する3兄弟のミッションはきついです、個性的過ぎるから。」

「あと3か月はソウルですね。KIKI さんとはスムーズに話せるので楽しいです。わたしは人が苦手なんですけど、KIKI さんとは会話が続きます。」

「恐怖症ではなく人見知り程度だと思いますよ。こんなに素敵なんだからもっと自信を持ってください。もう少しで博士もメディアで騒がれますよ、SUHO 代表のように。わたしがついていきますから大丈夫です。」

MINU はどうしても KIKI を独占したかった。一緒に過ごしたい。彼女が仕事で海外に行っても、自分のもとに帰ってきてくれる。不可能だろうか・・・。彼女の周囲には素晴らしいオトコばかりでわたしは欠陥品だ。医学の他は何も知らないし出来ない。こういうのを高嶺の花、届かぬ想いというのか・・・。SUHO や LEE 氏がうらやましい。

不思議と博士との空気感が心地よく、幸せな気分になる。

世界のVIPは傍若無人でわがまま、喜怒哀楽が激しい。そんなクライアントを相手にしているので、KIKI の消耗度とストレスはそれなりだ。もちろんうまく回避する術も心得ているし、絶妙なタイミングで無視をす

ることもある。まして恋愛対象なんてほぼ皆無。

今回のソウルの仕事は、人間性、環境すべてが恵まれているので楽しい。

これからは動画の件で MINU 氏、SION 氏と頻繁に会うことになる。SION 氏とはちょっと気まずいけど・・・。

夜更けまでお互いのことを話し込んだせいか、距離が近くなった気がした。日付も変わり、2人はそれぞれの部屋に入った。

「恋はするものではなく、落ちるものだ。」

と聞いたことがあるが、MINU はまさにそれだと実感した。

翌朝、部屋で朝食を摂って海辺を散歩。

「KIKI さん、クルーザーは？」

「次男の JIN が得意で、釣りが趣味です。わたしを含めて兄妹全員、船舶免許を持っていますよ。」

「では近日中にクルージングに行きましょう。濟州島の別荘にご招待します。」

「水上スキーやダイビングもありですか？」

「もちろんです。元海軍のスタッフがクルーです。」

「はあ、さすがスケールが違う。ネイビーがクルーとは・・・」

ホテルのスタッフには、恋人同士に映る長身の2人が目の保養だ。

「まるで大人のドラマだよね。かっこいいし、サイコー。MINU 様の笑顔が素敵、初めて見るよね。」

KIKI と博士は自然に手をつなぎ、海辺を歩いていた。まるで恋人のように・・・。

ソウルに戻る車内では会話が弾む。

濟州島のクルージングプランで盛り上がり、アフリカのサファリで気球に乗る約束もした。

MINU 氏の同期がアフリカの動物保護に従事しているらしいので一流のガイド付きだ。

うつむいて小さな声で話す最初の出会いからは想像もつかない、素敵な笑顔だ。

白いブラウスとポルシェがよく似合う。

「KIKI さん、SION です。デジタルセクレタリーのサンプルができたのでこちらにいらしてください。ジュネーブ出張の準備もお願いできますか？ところで今どちらに？」

「はい、14時に会社に伺います。サンプルを楽しみにしています。では後程。」

何も今どこにいるかなんて聞かなくてもいいのに・・・。

「SION ですね。気になるんでしょう、きっと。彼は才能、感性、カリスマ性、能力すべて持っています。相当の努力家でもあります、見せないけど。弟ながら尊敬します。SION は KIKI さんが気になるようですね。手強いライバルです。」

「いえ、それはないです。女優さんとの裸のキスシーンを見てしまいましたから。それも約束の時間にですよ。失礼ですし、わたしはそういうのが苦手ですから。」

「節操のない弟です。ゴシップの常連だけある。それは信用喪失ですね。」

「人間性の問題ですから。」

「KIKI さん、SUHO です。米国の経済紙の取材が入りました。5日後 10 時に弊社で。スタイリングの方をお願いできますか？」

「SUHO 代表、おはようございます。かしこまりました。SION 代表との打合せが終わりましたらご連絡します。」

「近日中に自宅の方をお願いします。夕食をご一緒しましょう。」

「では調整してご自宅に伺います。」

「今度は SUHO ですね。KIKI さんは人気者だ。」

「KIKI、LEE だけど SION 氏と打合せ前にこっちに寄れる？」

「12 時前には入ります。」

「今度は LEE さんか。ソウルではなかなか時間が取れませんね。思い切って済州島に避難するしかないですね。」

ソウルまでの 2 時間程、博士との車中は楽しかった。

共通のマリンスポーツの話題満載でリフレッシュできた。

ソウルの高層ビル群が迫る。さて着替えて仕事だ。

KIKI さんという今まで人が苦手だった自分が嘘みたいだ。今日は SION、明日は SUHO に譲るしかない。済州島の別荘に連絡してクルーザーや水上バイクなど整備点検を指示しないと。

もっともっと KIKI さんのことが知りたい。

KIKI と KITTY

KIKI はワークウェアのプラダで出勤。

「KIKI、おはよう！博士とどこに行ってたの？」

SUHO 代表のメディア取材の他に、来週投資家向けのプレゼンテーションが入るらしい。さすがHD3兄弟、企業のイメージアップに投資家向けのプレゼンテーション、記者会見と3人それぞれあるから KIKI のカラダは空かないね。

SION 氏とのミーティング、RON 氏が参加したいと言ってきたので、SION 氏の了解は取ったよ。」

「ありがとう、RON の出国前に会いたかったから良かった。明日は RON と打合せしないと。HD の予定は終日入れないでください。」

「了解。」

LEE のデスクにある KIKI のスケジュールボードは真っ黒だ・・・。

日本に帰りたいな。ウチ飯が食べたいよー。ダディ、ママ、ARAN と JIN に会いたい。

13時半に RON が大使館の BMW で迎えに来た。

KIKI は LEE と乗り込んで NEXT DOOR に向かう。

33階、エレベーターの扉が開くと NASA のように画面が並ぶ。

「さすが世界一級 NEXT DOOR の心臓部だ。ワクワクする。」

「RON さんが驚くなんて最新なんですね、ここは。」

3人は広いデスクのあるミーティングルームに通された。

「改めまして、NEXT DOOR 代表の SION です。こちらは技術スタッフの RIKU、CHANCE です。」

「こちらこそ、先日は失礼しました。ワシントンに出向している RON です。KIKI の兄でもあります。」

「ではさっそく始めます。」

テーブルにスマートフォンを置いた。

「Hi KITTY」

SION 氏が呼び掛けると画面から、女性の 3D 画像が浮かびお辞儀をする。

(SION 様、KITTY です。こんにちは。何なりとご用命ください。)

「デジタルセクレタリー、電子秘書です。音声で保存された情報を活用して質問や指示に応じます。」

「KITTY、天気は？」

(現在の気温は 20 度、湿度 45%、降水確率 10%、ブラウスで十分です。)

「KITTY、ミュージック。テンションのあがるダンスミュージックで。」

(BTS のダイナマイトです。)

ダンスポップな BTS のダイナマイトが流れる。

「KITTY、今日のスケジュールは？」

するとスケジュール表の画像が現れ、

(本日 14 時から KIKI 様とデジタルセクレタリーのサンプルでプレゼンテーション。

16 時から新規プロジェクトの会議、18 時からフリーです。)

出席者一同、3D 画像の KITTY に釘付けだ。

「人物やスタイル、言語や話し方は自由に設定できます。音声認識も可能です。セキュリティを強化して個人にも対応するつもりで、ISO 認証申請中です。国家レベルで活用できます。」

「KITTY って KIKI に酷似していますね。」

「そうですか？ 俺の理想の彼女です。」

「わたしには似ていません、代表の理想にはオーバーエイジですから。」

「次は同時通訳プログラムです。KITTY、英語と韓国語の通訳を。

RON さんは英語で、LEE さんは韓国語をお願いします。」

RON が英語で

「LEE さん、新規プロジェクトの打合せの日程を教えてください。」

すると KITTY が韓国語で話す。

LEE が韓国語で

「16 日午後 2 時から、大使と書記官、SUHO 代表と SION 氏が参加します。」

KITTY が英語に翻訳して RON に話しかける。

タイムロスもほとんどない。

「イヤフォン装着で、数台のスマートフォンが必要です。KITTY によって画像も表示できます。まだまだこちらは改良が必要で開発途中です。近日 MINU のプレゼンテーションで活用するつもりです。

同様にデジタルスタイリストも可能です。気候と仕事内容に合わせてコーディネートを提案します。データ入力は人間によって蓄積するしかありませんが、個人のドレスルームと連動します。これは KIKI さんの要望です。まずは MINU でトライするつもりです。いかがでしょうか？」

やはり本物の天才だ。世界を飛び回っている RON もまだ数名しか会ったことがない最高レベルの天才が、アジアの小国でしかも分断国家のここ韓国に存在する。傍若無人であっても許されるレベルだ。

「SION 代表、申請中の案件はジュネーブですぐに認可されます。EU 市場に入りましょう。帰国次第、まずはスペイン大使にお会いください。EU への近道になるでしょう。根回しはお任せください。」

「では MINU のプレゼンテーションから。是非聴講してください。新しい技術です。」

「博士の新薬発表は、かなりの話題ですから各国から聴講に来韓します。まさに絶好の機会ですね。これからの進行をご相談させてください。」

「よろしくお願いします。KIKI さん、いまからジュネーブ用のコーディネートを手伝ってください。自宅に行きましょう。10 分後にエントランスで。」

「はい。」

SION と KIKI

エントランスにはイエローの LOTUS Exige 350 が。

SION 氏が助手席のドアを開けて待っていた。

クルマにバイク、ファッション、そして彼の仕事の流儀が KIKI にはベストマッチだ。

裸のキスシーンさえなければかなり揺れたかもね。

「ジュネーブはいつからですか？」

「明後日の便です。行ったからって RON さんの言う通り認証されるのか疑問です。」

「RON が言うなら間違いなく認証されるでしょう。証書を持ってソウルに戻ってきます。素晴らしい NEXT DOOR 製品が EU の標準になるのも近いですね。さすが SION 代表です。」

「俺たちって似た者同士って感じない？」

「さあ、わたしは人前で刺激的なラブシーンはしませんから。」

「あれか……………」

「スーツ 5 着は明日午前中にパッキングします。スーツケースはリモアのラージで。カジュアルとジャケットスタイル一式はすでにパッキングしました。どうか気をつけて行ってきてくださいね。」

「ありがとう。夕食は？」

「一度戻ります。」

「今日は断らないで欲しい。」

「ソウルはお寿司が美味しいと聞いています。海外ではなかなか食べることがありませんのでお薦めのお店があるようでしたらおつきあいします。」

「日本人経営の鮨屋が行きつけです。18時半にホテルに迎えに行きます。送ります。」

よかった、断られなくて。彼女の周りはいいいオトコ揃いだし、年下の自分は分が悪い。そしてあの濃厚キスシーン事件だ。相手にされなくて当然だけど、諦めきれないし一か八か誘ってみて正解だった。

デジタルセクレタリー、スタイリストと新製品が生まれそうでぞくぞくしている。これについてはもっと話が聞きたいし、お寿司も食べたい。ビジネスの相手としては最高だよ。恋人としては絶対にパスだけど……。

16時にホテルに戻る。SION 氏との夕食は何を着ようか。飛び切りオシャレな人なのでビタミンカラーで行こう。

バレンシアガのパッションオレンジのブラウス、黒のタンクトップ、ホワイトの7分丈のパンツにミニバッグ。トリーバーチのオレンジのミュール。

カルティエのピアス、ブレスレットを仕上げに。

18時20分、SION 氏がベントレーの後部座席から降りてきた。ここソウルのビジネスマンは時間に正確だ。

コムデギャルソンの真っ赤なブラウスはスタンドカラー。真っ白なスリムパンツはサイドスリットが浅く入っている。グッチのスリッポンは限定色レッド。香るのは涼やかなエンヴィか……。ファッションニスタとして特集記事が組まれるのも納得だ。

ベントレーは和風の佇まいの門扉を通り抜けて、日本庭園が美しいエントランスに停まる。和服女性の案内で店内へ。川が流れ美しい魚が泳ぐ。カウンターには3名の板前が見事な包丁さばきを見せる。

「いらっしゃいませ。こちらどうぞ。」

威勢のいい声で一斉に挨拶されるとまるで日本にいるようだ。

ガラスケースには旬のネタが並ぶ。

「稀子さま、大変お久しぶりでございます。香港をはじめアジアでの出店には、ご家族にご尽力いただきありがとうございます。」

「あら、香港からこちらに？懐かしい。」

「ソウルを任されています。昨日 RON 様がお見えになりました。」

「ここであなたの美しい料理をいただけるなんて幸運です。今日は SION 代表に連れてきていただきました。」

KIKI は SION がいるので英語で会話している。

「SION 代表にはご贔屓にさせていただいております。おかげさまで稀子さまにお会いできました。ありがとうございます。」

「KIKI さんは稀子さんというんですね。それにしてもソウルとは縁がある人ですね。」

「稀子と呼ぶのは父母、子供の頃からの知り合いだけで少数です。兄たちも含めほぼ KIKI です。」

ガラスケースには、見慣れたネタが美しく並んでいる。

「こちらは白身、イカ、タコが絶品です。代表、お任せでよろしいですか？」

「KIKI さんは？」

「代表と同じで。」

「では、大将にお任せします。お薦めのお酒はありますか？」

「浦霞の吟醸はいかがでしょう？本日のネタにふさわしいかと思います。」

「ドライなのどごしに、すっきりとした味わいがわたしの好みです。」

「では KIKI さんのお好きな浦霞の吟醸で。」

バカラのスリムなクリスタルグラスに注がれた透明な浦霞はよく冷えていた。

SION は KIKI の美しい食べ方に感嘆した。所作が美しい。箸の上げ下げからグラスの持ち方、美味しそうに頬張る横顔。初めて女性の表情に見惚れた。

「KIKI さん、KITTY はいかがでしたか？」

「素晴らしいです。わたしは先端技術こそ生活を豊かにし、人に寄り添うことが重要だと信じています。会えない愛する人と、音声と映像、そして文章でつながっていたい。情報量、通信速度を競う時代は過去です。」

SION 代表には人にやさしい技術を開発して欲しいです。」

「愛に距離は関係ない……。ですね。いまの KIKI さんの言葉はプレゼンテーションのキャッチフレーズに使

「いたい。許諾いただけますか？」

「もちろんです。と言っても私見で恥ずかしいです。そうあって欲しいと願っています。」

KIKIさんは本当に素晴らしい女性だ。俺を成長させてくれる。彼女とまずはビジネスから関係を構築するしかないかも。

「KIKIさん、先日の俺の失態、軽蔑していますよね。」

「いえ、それだけの才能と魅力、財力があれば当然だと思います。容姿端麗な女性が群がるでしょう。初めから自分が圏外ということは承知していますので気にもなりません。久しぶりの生ラブシーンだったのでキドキしましたが・・・。」

「KIKIさんは圏外なんかではありません。いま俺がいちばん一緒に過ごしたい女性です。どうか可能性を残しておいて欲しい。SUHOやMINUとばかりで悔しい。」

「あなたの素晴らしい才能と感性に刺激されます。わたしと酷似している点が多いことも認めます。それがすぐ恋愛につながるかはわかりません。ただ仕事を一緒に創り上げていくパートナーでありたいと思い始めています。SIONさんもそう感じませんか？」

「いや、恋人としてあなたを独占したいという気持ちは変わりません。きっかけが仕事であるのは仕方ありませんが、俺は何事もやり遂げるオトコです。覚悟してください。」

「周囲の女性が許さないと思いますよ。わたしは白旗を上げます。ジュネーブにはお一人ですか？」

「はい、そのつもりです。」

「素敵なスーツをご用意しましたので。」

なんか久しぶりの告白だったな。女性としてはうれしい。相手は超有名なSION氏、優越感が湧いてくる。美味しいお鮨もいただいたし、明日RONに報告だ。

さすがオトナの女性には敵わない。告白してもなかなか通用しない。100回は悩んで決断したけど、見事に空振りだ。まだスタート地点、仕事でつながっていれば俺の気持ちが通じるかもしれない。あと4か月はソウルにいる予定と聞いている。俺にとってKITTYはKIKIさんだ。32歳で強烈な片思いか・・・。

いきなり一緒に過ごしたい女性かあ・・・。自信に満ちあふれている人は凄い、さすがのオトコマエ。注目を集めるSIONさんはハードルが高過ぎるし、気苦勞も多く疲れそう。正直言うとわたしはジェラシーフル坦克のタイプ。39歳としては穏やかな恋が理想かな。

スーツ持参でSION氏宅に。最後のパッキングはエトロのガーメントケースに。

シューズケースも忘れずに。

改装されたドレスルームに整然と各アイテムが並んでいる。SUHO氏がルイヴィトンのようななら、こちらは青山にある前衛的なプラダブティックに似ている。

16時頃にRONがKIKIの部屋を訪ねてきた。

「さすがHDの代表だ。広い部屋が用意されているな。住み心地はどうだ？」

「快適だよ。この広さなら打合せもできるし、ベッドルームやバスルームも相当広いし眺望抜群。ところで

RONはSION代表のミニファイルデータとデジタルセクレタリーを活用してビッグファイルプログラムを狙っているでしょう。それとMINU博士のアルツハイマーの治療薬開発かな。投資家向けの会見にはARANも来るんじゃない？」

「相変わらず勘が冴えている。HDのMINU博士とSION代表は逸材だ。事業家として3代目が優れているSGやHDグループは順調な経営だ。そこに革新的な技術や頭脳が生かされているHDは面白い。あの2人を自由にさせている代表の経営手腕も見事だ。投資すべき相手だよ。」

「プレゼンテーションのスタイリングや、博士の動画制作は重要ってことだね。任せてください。政治関係でないし、民間レベルは自由だから面白い。

3か月以上もソウルにいるとさすがにうちに帰りたくなった。

そうそう、SION代表と一緒にいたいと告白されました。」

「へえ、思い切ったね。なんて答えたの？」

「仕事をきちんと知ることから始めましょうって。さすがに恋愛対象ではありませんとは言えなかった。」

「裸のラブシーンでトラウマが蘇ったとか。」

「はは、それはもう忘れたから関係ないよ。」

「2日後ジュネーブに入る。多分SION氏と同じ飛行機だな。ファーストクラスだから旅友になりそうだ。そしてまたソウル。しばらくは日本に帰れないかも。ARANに欲しいものは頼んでおけよ。持ってきてくれるから。」

「高山烏龍茶特級と茶器を頼む。あとダディの梅干しね。」

「自分で連絡しろよ、ARANが喜ぶから。あとどのくらいで仕事は片付くの？」

「早くて3か月、予定より長期滞在になってきた。早く横浜に帰りたい。」

「父さんが心配だから声を聞かせて欲しいって。こっちも頼んだぞ。」

「了解。」

「明日の夜、外資の事業家や大使館関係者が集まるパーティがあるから同伴しよう。フォーマルではないけど、エレガンスで決めて欲しいかな。支払いはこちらでします。」

「じゃあアルマーニかな。」

「サロンに迎えに来てね。RONのエスコートは北京以来、久しぶりだ。目立っていいかも。」

「はい、KIKI様。明日18時半にサロンにお迎えにあがります。ではアルマーニに寄ってから夕食に行こう。何がご希望ですか？」

「日本の懐石料理の美味しい店があるって聞いたからそこがいい。」

アルマーニでは、まさに長身ビジュアル系のRONとKIKIの来店に店内が湧く。外国人モデルか俳優のカップルと勘違いされているようで、携帯カメラのシャッター音が気になる。

すでに連絡をしてあるので、何着かセレクトしてあった。RONはシルバークレーのマオカラスーツ、襟なし、光沢のあるコットンツイルの紺のシャツ。

KIKIは白のドレープの美しいパンツスーツ。インナーはゴールドのボディースーツタイプで、同色のサンダルで抜け感を出す。今日はカップルバランス重視で決めた。当然スタッフはもちろん、周囲から注目を浴びる。

KIKIは携帯カメラでRONとのツーショットを撮影、横浜の家族に一斉送信する。

「これで元気な証拠写真を送信したから大丈夫だね。」

「ちゃんと声を聞かせないとダメだぞ。」

「ダディ、稀子です。梅干しと高山烏龍茶を ARAN に持たせてください。あと贈答用に最上級の茶器もね。さすがに日本に帰りたい。」

「やっと声が聞けた。こっちは心配しているんだから電話しなさい。大変ならもう帰っておいで、ソウルは稀子に合わないだろう。」

「今回のミッションは幸運にも楽しい。それに RON にも会えるし、一流メゾンとの仕事は相変わらず順調だし。あと3カ月はかかるけど一度そっちに帰るつもりです。」

「ARAN に高山烏龍茶、梅干しと梅漬けも持たせるから。あと常備薬も。カードは持って行ったか？」

「うん、ありがとう。カードはしっかり持ってきているよ、クルマは買わないけどね。バイクは RON の伝手で借りたから。じゃあまた連絡します。」

ARAN は伝言メッセージだ。

「ソウルに入るときに連絡ください。お土産待ってるからね。さっきダディと話したから、忘れないでね。」

RON と SION

SION は仁川空港のVIP ラウンジへ。いよいよジュネーブだ。コムデギャルソンのネイビーのジャケット & パンツ、白いスタンドカラーのブラウスにグッチのモカシン。ポッテガヴェネタのリュック、すべて KIKI のスタイリング。

長身の SION 氏はワイルドに着こなす。

「おはようございます。先日はお世話になりました。今日はジュネーブまで一緒させていただきます。」

「RON さんもジュネーブに？連れができて楽しみです。」

ファーストクラスは3割の座席が埋まる程度だった。

RON はアルマーニのシルバークレーのジャケット & パンツ、ネイビーのTシャツにスリッポン。こちらもリュックでベルルッティだ。

どちらも俳優と見違えるほどカッコよくオーラが凄い。CA の視線集中の2人だった。

「昨日のパーティでの写真、話題ですね。誰も兄妹とは思ってないですよ。」

「さすが SNS 大国、毎日話題が更新されますね。KIKI も LEE さんをはじめ、SION 代表や SUHO 代表との2ショットに慣れてきたようです。顔出しは極力避けるのにソウルでは諦めたと言ってます。ソウル市民全員がパパラッチ並みらしい。」

「すぐにアップして、即次に変わる素早さがいいのかも。もう慣れるしかありません。」

「KIKI さんについて聞いてもいいですか？」

「わたしのわかる範囲でしたら・・・。」

「なかなかアプローチしても空振り。彼女は決してぶれない、振り切る強さがあります。やはりワールドワイドな仕事だからか、あるいは育った環境なのか、性別を超えて、いままでに会ったことのない人です。相手を知らなければ戦略も立てられません。完敗です。」

「たった一人の妹で末っ子です。とてもかわいがられて育ちました。ファッションが好きで家族のスタイリストであり、家業のユニフォームのデザイン、室内装飾と美しいモノやコトが大好き。そして並外れた感性の持ち主でもあります。ここまでパーソナルな仕事ではなくもっとメジャーであってくれたら悩むこともないのですが・・・。」

「なぜ、ここまでクローズドされた世界に身を置くことになったのですか？それも世界規模で・・・。欧州で十分な気がします。」

「クローズドされたパーソナルな仕事・・・。それは世界の裏側かもしれません。機内の話としてはかなりのボリュームになりますが、聞く覚悟ありますか？SION 代表。」

「もちろんです。KIKI さんをもっと知りたい。」

「では・・・。」

KIKI は兄たちの紹介でVIP クラスのスタイリングをしていた。もちろん KIKI が選んだ顧客のみで、モナ

コ、フランス、スイス、イタリア、スペインなどヨーロッパの主要国を中心に飛び回っていた。クライアントは撮影される機会が多い俳優や実業家など若い世代の富裕層がメイン。一流メゾンや新進デザイナーとの仕事も多く、顧客のイメージを創り上げる、イメージメーカーだ。

10年前、北京から横浜の KIKI の父親に連絡があった。

是非、お嬢さんに仕事を依頼したいので北京に来て欲しい。と中国人である父に、北京の要人である亡き祖父の友人から連絡があった。

「義父は他界しており、娘はいま海外です。わたしでは何とも御返事できかねます。」

「明後日中国大使館で会いましょう。迎えるクルマが10時に行きますので、お待ちしています。」

と一方的に通話は終わった。父は長兄の ARAN を呼んで、とにかく話を聞こうと、中国大使館に行くことにした。

約束の日、10時に黒塗りのメルセデスベンツが翠麗館本店前に到着し、1時間程して中国大使館に到着。電話の主 SON 氏が正面玄関で父と ARAN を出迎えた。

「SION 代表、ここからの話は内密にさせていただきますか？過去のこととはいえ込み入っていますので・・・。」

「もちろんです。」

すでにジュネーブ行きの飛行機は仁川空港を飛び立った。

KIKI への依頼とは、ある国のトップからイメージアップの要望だった。

中国とは国交があるが日本とはない国がどうして KIKI を知っているのか？

それはスイスの仕事がきっかけらしいとのこと。

ARAN の友人でスイスの銀行家関連の仕事を KIKI に依頼、3年ほど継続している。

中国大使館での依頼内容に父と兄は驚愕した。

「日本から近くて遠い分断国家の書記長からの依頼です。KIKI さんの仕事場は北京になりますのでご安心ください。」

「娘が危険にさらされることになります。到底引き受けることはできません。」

「わたしどもが責任を持つのでお引き受けいただけませんか？お願いします。断られると大変なのです。」

「どうかご容赦ください。」

「断ることで、そちらの日本での仕事に相当の影響が出ると考えてください。もちろん引き受けていただければかなりの見返りがあります。」

「中国サイドは絶対断れない条件を出してきたんですね。」

「はい、この場でその内容はお話ししたくありません。究極の選択以上に卑劣だったとしか言えません。それだけではなく、大使館はその日のうちにアテネにいる KIKI に連絡したのです。彼女は1週間後に返事をすると答え、2日後に帰国しました。」

空港に迎えに来た ARAN に

(中国からの仕事は受けることにする。ちょっと怖いけど北京には ARAN もいっしょだよ。それを条件にするから。断れば家族が大変なことになるから、わたしは大丈夫。乗り切るしかないでしょ。ちょっと人気者

過ぎたかな。)

そう話したそうです。

わたしたち家族は脅迫にも近いこの仕事は相当の恐怖でした。母は泣き続け、父は中国人であることを悔やみました。わたしたちは一番末っ子の妹に重荷を背負わせることに苦しみました。彼女は淡々と語学を習得すべく特訓し、1か月後の出国までツーリングや家族旅行を楽しみました。北京へは長兄の ARAN 同伴が条件、せめてもの救いでした。」

「彼女の強さはそこが原点とすれば底知れないものがありますね。」

「わたし以上であることは間違いないです。」

北京の空港から迎賓館までは迎いのリムジンで移動。車窓からはスモッグで曇っている北京の空があった。

ニュースで見るレッドゲートをくぐり、エントランスにクルマが停まった。後部座席から ARAN と KIKI が降りる。祖父の友人という SON 氏に迎えられ奥へと案内された。通路の左右には鋭い視線の警護が無言で並んでいる。これだけでも相当怖い。そして両扉の前で ARAN は止められ、手荷物検査とボディチェックをされた KIKI のみが入っていった。ARAN は控室で待機だ。1時間程して KIKI が解放され、ARAN とともに別室に通された。

中国の外務省にあたる要人から今後の進行について説明され、入館から2時間後にはホテルに。まるで会話までも監視されているかのように終始無言だった。

KIKI はホテル内のビジネスセンターで、国際電話やデータ送信に2時間ほど費やした。

「ARAN、明日朝一番で上海に入って美味しい食事と買物三昧したい。2泊ほどおつきあいください。北京でのミッションはいま手配したから。ダディへの連絡をお願いします。夕食は JIN お薦めの北京料理がいい。」

そして手書きのメモを渡した。

(詳細は帰国してから話します。どこで聞かれているかわからないので。このメモは処分してね。)

上海から帰国して5日程で出国。パリ、ミラノ、ロンドンを2週間で回り帰国。日頃から懇意にしているメゾンを訪ね、北京から持ち帰った仕事をヨーロッパで仕上げた。

「メディアでたびたび観る書記長は、ここ数年人民服のようできて洗練されたデザインが多い。夏は白い七分丈のオーバーブラウスです。同じようできて衿、袖、ポケットのデザイン、ボタンなどのディテール、そして生地が変化します。

1年ごとに一流のメゾンがオーダーで作ります。ストレッチ素材で動きやすく、最上級の生地を使い、本人が飽きることはないようデザインや色味も変化します。パンツのシルエットやカットもそれぞれメゾンの個性が感じられます。そしてスーツやコート、ブルゾンも全て一流メゾンのオーダーです。同伴しメディアの露出も多くなった夫人をはじめ一族の装いも刷新されています。ブランドロゴが写らないように細心の注意がされながらしっかりと特徴が出ています。エルメス、ヴァレンティノ、アルマーニ、ディオール、ダンヒル、シャネル、セリーヌでしょうか。

北京では先方の要望を聞きながら、採寸したのでしょう。それから各メゾンを説得して、サンプル制作。そして2か月後にまた北京に入り3日間で調整をして、2か月後に第1弾が納められたのです。かなり気に入られて現在もオファーがあるようです。

KIKI いわく、世間では韓流スターが発祥と思われているツーブロックのヘアスタイルは、現書記長が原点だそうです。

いかがです？本当にあってもおかしくない話でしょう、SION 代表。」

SION は黙っているしかなかった。ワールドワイドに仕事をしてきた彼女が、一流がゆえに無理難題なオファーを脅迫に近い形で受けざるおえない状況に……。それを表面上整然とこなしながらどんなに怖かっただろうか。実際に採寸したわけだから、厳重な警備の中で本人とも会っただろう。そしてヨーロッパに出向き各メゾン説得して完璧に仕上げる。どれほどのプレッシャーだっただろうか。気に入られなければ恐ろしい結末だって考えられる。しかもたった一人で……。家族は悲痛な思いでいたに違いない。表舞台からは想像できない、まさに裏の世界は想像を超える恐ろしさだ。

「KIKI の仕事への情熱とスキルは、世界に認められつつあります。それもかなりピンポイントで。この件から中東や、東ヨーロッパ、ロシアからの依頼がきました。書記長からの推薦かもしれませんね、国交がありますから。

何度か霞が関絡みの依頼もありましたが、すべてファミリー一丸となってシャットアウトしています。

KIKI は強靱であるというより、恐怖やプレッシャーを呑み込む力があるということです。

でもそれは消化されて消えるものではありません。奥深くしまい込んでいます。ひとりで震えて泣くこともあると思いますが決して見せません。そしていつでもこの仕事の幕引きを覚悟しているように思います。

わたしは彼女を妹としてではなくヒトとして尊敬しています。

せめて仕事ではないプライベートや恋愛は、穏やかに癒される環境であって欲しいですね。大抵の男性は彼女を受け止めるのは難しいでしょう。」

「KIKI さんを知りたいなんて、軽はずみなお願いだったと反省しています。わたしの知る KIKI さんからは想像できない。彼女と恋愛出来るオトコってどんな人物か……。自分の未熟さを痛感します。」

「そんなつもりでお話したわけではありません。SION 代表の魅惑的なラブシーンの話は聞きましたよ。余程刺激的だったのか、ドキドキしたと……。」

「あれは失態でした。」

「わたしも KIKI から恋人の話は聞いたことがありません。友達が多いのですが……。」

「お兄さんたちが並みはずれた一級品だからだと思います。」

「そうでしょうか……。そろそろ時差に備えて仮眠を取りましょう。赤ワインをグラスでふたつ……。」
数時間後にはジュネーヴだ。

プロジェクト初体験 DR.MINU

MINU氏はインターネットのゴシップなどは一切見ないし検索をしない。興味がない。
今朝、研究室のスタッフが、先日撮影で来た女性がニュースになっていると教えてくれた。

「先生、先日撮影に来ていた長身の女性がSNSの検索トップです。見てください。」

「長身って KIKI さんのことかな？SUHO か SION との写真じゃない？打合せでよく食事に行くから。」

「いえ、HD 御曹司もかなわなくらいのビジュアル男子です。」

MINU は差し出された携帯画面を見て固まった。俳優やモデル超えのビジュアルカップルが、パーティ仕様で写っていた。しかもグッドルッキングな装いで、SNS 上では謎のベストカップルと書き込まれている。確かに美しい。

MINU は無性に腹が立った。

「最高のカップルですね。女性は先日会ったときに素敵だなと感心しましたが、男性はハンパないカッコ良さです。いったい何モノ？？先生はご存知ですか？」

「いや、何も知らない。」

MINU は自室に戻り、検索した。そこには好きでたまらない KIKI が、真っ白なスーツを着て男性と腕を組んで歩く姿があった。輝くほどの美しさだ。

電話をして相手が誰なのか聞いてみようか。いや、惨めになるのは自分だ。

MINU は仕事が手につかない。どうしても KIKI に会いたい。

「KIKI さん、MINU です。今日のスケジュールはいかがですか？」

「博士、先日は楽しいドライブでした。今日ですか？SUHO 代表の取材、撮影の準備で自宅に伺います。そして夕食を誘われていますが何かわからないことでもありますか？」

「いえ。明日はお時間ありますか？」

「明日は NEXT DOOR の技術スタッフと博士のプレゼンテーション動画の打合せがあります。それが終わりましたらお時間いただけますか？打合せがしたいです。」

「はい。18時半にホテルのロビーで・・・夕食をご一緒しましょう。」

「では、明日。」

いつもの KIKI さんだ。ゴシップはハングルだし見ることもないのかもしれない。

今日は SUHO だって？

順番はなかなか回ってこないのか？

HD の仕事とはいえ超多忙過ぎないか？

これで SION が帰国したら、さらに KIKI さんが忙しくならないか？

そしてその合間にパーティにエスコートされるなんて。どうすればもっと一緒にいられるのか・・・。

同伴した男性はいったいどこの誰なのか？

東洋系ではあるが韓国人でないことは一目瞭然だ。

そんな考えがぐるぐる頭を回る。どうかしている。明日プレゼン動画の打合せとのこと。こちらも準備しておかなければ。

夕食はどこに行こうか・・・。LEE 氏に相談しよう。わたしはほんと何も知らなくて情けない。片思い？嫉

妬？何もかもが初めてでコントロールできない。

SUHO IS FASHIONISTA

今日は自宅で取材のスタイリングをお願いする。刷新されたドレスルームは使いやすく快適だ。なんとなく輝けず地味な評価だった自分から、一歩抜け出たように装うことが楽しい。以前からなにかと SG グループの DEE 代表と比較されていたが、現在は実績はもちろん、ファッションセンスも両翼として注目されている。KIKI さんのおかげだ。

自宅のエントランスに大型バイクが入ってきた。KIKI さんだ。相変わらずカッコいい。白い皮のジャケット、真っ赤なブラウス、ライダーブーツにリュック。玄関でサンダルに履き替えるだろう。

「こんにちは、代表。今回の取材意図はもちろん、購読者の傾向を踏まえて、あえて最新のトムフォードで行きます。事業家と言ってもまだ若いし、威厳をアピールする必要なんてありません。最高にカッコいいスタイルで臨みましょう。」

「KIKI さんにお任せします。」

KIKI はドレスルームから迷いなく旬を選ぶ。ネイビーのスーツ、真っ白なワイシャツ、ブルーのレジメンタルタイ。韓流式カラーピン。ブライトニングの時計、カフリンクスはサファイアと先端まで抜かりない。靴はジョン・ロヴの紺、ローファーだ。

SUHO はさっそく試着。カラダにフィットするトムフォードは着心地抜群だ。それに細部にわたるディテールがクール。

「いかがですか？代表しか着こなせません、このスタイリングは……。ヘアメイクは当日はいます。本当に素敵です。」

「KIKI さん、当日の撮影はご一緒願います。」

「もちろんです。ご安心ください。当日トムフォードのスタッフも来ますので。」

「記者会見も同じファッションに。プロモーションと思ってください。イメージを統一したいので……。」

「確かにイメージの統一は重要ですね。取材の後もよろしく願いいたします。本日夕食のご希望はありますか？」

「代表にお任せします。それでは何着かチョイスしてスタジオに運びますので当日はラクな格好でお越しください。」

KIKI はクルマで同行しているスタッフに、KIKI が選んだ数セットのコーディネート撮影スタジオまで持っていくように指示をする。

「コーヒーをいかがですか？」

「ハワイコナのアイスをいただきます。」

SUHO 代表のラフスタイルが素敵だ。LEE を参考に選んだイッセイミヤケのオーバーブラウスに、ストライプのパンツ。SUHO 氏の引き締まったボディラインを覆うようなエアリー感がセクシーだ。注ぐ陽射しにブラウスに覆われた彫刻のようなボディが透けて映し出される。独り占めするのはもったいない。次回の誌面撮影は、透けるボディに決まり！ライティングを考えたショットだ。LEE と相談しよう。

相変わらず魅力的。独特の雰囲気が刺激的だ。SION ほどではないが、いろいろな国の女優やモデルと交際してきた。確かに彼女たちは美しい容姿、連れて歩くには最高のビジュアルでオトコとしての優越感を満

たしてくれた。しかし KIKI さんはただの美しいとは違う。強くしなやかでかっこいい。性別を超えて憧れ、尊敬、まさにリスペクトすべき存在だ。

そしてわたしを成長させてくれる包容力がある。

KIKI は濃い目のハワイコナが大好きだ。韓流のイケメンはコーヒーにこだわりがあるらしい。

「このコーヒーを豆から部屋で淹れてみたいです。どこで揃いますか？さっそく買います。教えてください。」

「一式ホテルで用意します。戻る頃には部屋にセットしておきます。淹れ方のメモも。」

「ありがとうございます。この豆の正式名を教えてください。」

「ハワイコナ・エクストラファンシーです。」

帰国する際にはお土産にお持ちください。」

「うれしいです。これでわたしは代表とコナ友です。」

「コナ友ですか、いいですね。それでは責任を持って常に切らさぬように心掛けます。」

「このあとは LEE と特集記事の打合せですね。ファッションistaとして。」

「からかわないでください。18時半にお迎えにあがります。」

「はい。それでは後程。失礼します。」

KIKI はサングラスとヘルメットを装着、ブーツに履き替えて爆音とともに去っていった。

KIKI の去りゆく姿を、SUHO は消えるまで追いかける。

SUHO と LEE OFFER FROM BEIJING

16時半に LEE が HD 本社代表室に。エントランスに紺のマセラッティクーペが停まる。

警備にキーを預けホールに入る。

一斉に女性の視線と嬌声、シャッター音が……。SG の御曹司、被写体人気ナンバー 1 のファッションリーダー LEE の来社だ。

長身に抜群のスタイル。ドルチェ&ガッバーナの紺地に柄のジャケット、紺のストレートパンツ、レモンイエローのシャツ。グッチのサングラス、イエローのビットモカシン。本人の登場に視線独占だ。

エレベーターで 35 階に降りると、女性秘書は茫然と立ったままだ。……男性秘書が代表室へと案内してくれる。

「こんにちは。SUHO 代表。お土産に話題の店のマカロンを持参したので皆さんで召し上がってください。」

「わざわざありがとうございます。お店ごと買い切った感じの量ですね。社内は LEE さんの登場で大騒ぎです。わたしから見ても惚れ惚れするカッコ良さです。」

「今や、旬は SUHO 代表です。早速ですがラフデザインとインタビュー内容をまとめましたのでご覧ください。先ほど KIKI から代表のやわらかい雰囲気を出したいとオーダーがありましたので見開きページを追加予定です。なんでも代表のブラウス姿にグラッときたとか……。ライティングまで注文がありました。楽しみです。」

「特別な格好はしていませんが、わたしも楽しみです。」

「KIKI のビジュアル感覚は秀逸ですから……。」

「KIKI さんのおかげで毎日が充実しています。ファッションでこんなに変わるなんて不思議です。自信が湧くというか……。LEE さんのように身につけている人はそれが自然なんだろうけど、わたしみたいな人にはまるで世界が変わったようです。」

「だから彼女は多種多様な国や人物からオファーが絶えないのです。彼女流にいうと、ファッションはその人の魅力をわかりやすく発信するビジュアルエフェクトです。確かに事業家や富裕層が顧客に多いですね。一部権力者や独裁者も彼女を指名するらしいです。」

「KIKI さんは断らないのですか？」

「独裁国家であればどんな手でも使うという噂です。」

「この時代に考えられない。恐怖政治を外国人の女性までに押し付けるんですか？」

「わたしも KIKI と直接話したことはありませんが、ミラノの一流メゾンから聞いた話です。それで彼女のしなやかでいて強靭な意志、そして仕事に対するプライドに納得しました。」

「是非聞きたいです。」

「あくまでも確認ナシの噂話としてなら。でもかなり重い内容ですから他言無用で。」

「承知しています。」

「KIKI はヨーロッパの若い富裕層のファッションディレクターでした。育った環境からかともかく素晴らしいセンスの持ち主だったそうです。一流メゾンと対等に渡り合えるのは、クライアントが富豪だったことでもあります。一流デザイナーにも引けを取らない美的感性だったようです。」

「どうしてクライアントが富豪だったのですか？きっかけは？」

「家庭が背景にあります。祖父は日本の中華街を発展させ、多くの名誉と資産を残しました。祖母はアメリカと日本の血を継ぐ貿易商の家系です。その娘である KIKI の母親は医者です。祖父と同じ中国人で婿である父親は天性の料理人で翠麗館を一流の料理店にしました。そして多くの資産を長兄の ARAN がさらに広げ、次兄の JIN は料理人として、飲食店経営に。三男の RON は世界を飛び回る役人です。長兄が資産運用でスイスやモナコにパイプがあることが大きく影響しているようです。

また、次兄の料理ファンが富裕層に多く、出張料理人として海外の晩餐会の指揮をとることもあります。これらの信頼関係がきっかけで、彼女の本領が発揮されたのでしょう。」

「大切に育てられ、裕福な家庭環境だと察していましたが、いろいろな DNA が彼女を生成したのですね。どうりで個性的な美しさを持っているんですね。」

「10年近く前のことらしいです。北京に滞在する KIKI からミラノのメゾンに連絡があったそうです。採寸表とデザイン画、顧客の要望が記載されたデータが送られ、すぐに KIKI から電話でこれを参考にサンプルを作って欲しいこと。一度日本に帰国してからミラノに直接出向くこと。生地は最高で最新のストレッチ素材。冬はコート、ジャケットなど最高級の素材とのことでした。

メゾンは KIKI が北京からということ。そしてサイズが特徴的だったことから悪い予感がしたそうです。」

「もしかして北のトップとか・・・」

「そうだったようです。」

「北京で直接会って採寸や要望を聞いたのでしょう。それも政治色の強い場で。想像を絶する恐怖だったと思います。再度サンプルを持って北京に行ったとか・・・。もし気に入られなかったらどうなっていたか・・・。

それ以来各メゾンが1年ごとに交代で全アイテムを専属で制作しているそうです。もちろんブランドロゴなどは見せずに、デザインだけでわかるようにするとか・・・。一族のファッションも担っているので相当の安定した売上になりますが公にはしたくない。KIKI の説得力もたいしたものですよ。」

「しかし断ることもできたのでは？」

「SUHO 代表、北京が仲介に入った案件です。しかも彼女の実家はチャイニーズ系です。相当無理矢理なオファーだと想像できます。ある意味脅迫まがいだったでしょう。それを彼女が一身に背負い、メゾンを説得し、超一流の仕事をしたのです。並大抵の精神力ではありません。」

「ですね・・・わたしには想像できない。」

「これから画面で注意深く彼のファッションをチェックしてください。本当に彼にぴったりで素晴らしい仕上がりです。ずいぶん気に入られているようです。凄いの一言です。一族もだいぶファッションナブルになりセレブ感があります。

両親、兄弟をはじめ家族が KIKI に思い切りの愛情をささげているのがよくわかります。結婚する相手がいるとしたら相当なレベルですねきっと・・・。本人はその気があるのかないかわかりません。

三男曰く、友達はたくさんいるけど、恋人の話はほとんど聞いたことがないそうです。」

「聞いて良かった。やっぱり彼女は凄い人だ。自分の未熟さを晒すところでした。ありがとうございます。」

「いえいえ、わたしも聞いた話です。」

SUHO は KIKI のことを知ることができてうれしかった。そして独占したい気持ちが沸き上がってきた。

でも自分がふさわしいオトコであるか自信は全くない。

ともかく今日は KIKI さんと食事だ。まずは一歩ずつ進展するしかない。

SUHO KIKI への想い

夕食のお相手は、いまや旬のファッションISTA SUHO 代表だ。さて何を着ようかな。それにしても彼のブラウス姿は素敵だったな。もう少し華やかさが加われば JIN に似ているかも……。

KIKI はシャワーを浴びてドレスルームに。久しぶりにセリーヌのレースを使った白いブラウスに、ひざ丈のホットピンクのパンツ、ミュールで。せっかくだからサロンでヘアメイクしてもらおう。

「KIKI です。せっかくのお誘いなのでサロンに行きます。18時半のお迎えはいつものサロンにお願いできますか？」

「わかりました。」

わたしとのデートにサロンまで行ってくれるとうれしい。

タクシーでサロンに。ゴージャスな巻き髪にピンクのソフトメイク。ネイルもホットピンクで仕上げよう。香りはいつものスペシャルで。ソウルのサロンはメイクが上手だ。

美肌の国、美容大国は男女問わず美しい。

「KIKI さんは本当に小顔ですね。中国の女優さんによく似ています。」

「わたしは中国系の血が濃いからかな。あと日本とアメリカの血も……。雑種ってことよね。」

「SNS で話題ですよ、謎の東洋系イケメンと。今日も彼ですか？」

「今日で刷新されるかもね。」

18時20分、真っ白のベントレーがサロン前に停まる。

後部座席からいままさに旬の SUHO 代表が。通行人からシャッターの嵐。構わずサロン内に入る。

最新のフェンディルックだ。真っ白なブラウスはよく見ると F の刺繍が。パンツは FENDI カラーのくるぶし丈。シューズ、サングラスも FENDI。洗練されたスタイルは長身に良く似合う。スタッフは見惚れている。

「KIKI さん、行きましょう。」

偶然にも2人のファッションはベストマッチ。SUHO 氏は KIKI の手を取り後部座席に乗り込む。今日は SNS トップかな。シャッターが車窓に反射する。

ベントレーは大きな門扉を通りエントランスへ。邸宅を改装したレストランのようだ。

「今日はソウルで一番の鉄板焼きにしました。韓国牛は和牛とは異なり、どちらかと言えばアンガス牛に近いかと。大丈夫ですか？」

「潮風にさらされる牧草を食べるアンガス牛はしっかりとした歯応えで甘みもあります。とろけるのが良いとされる和牛よりも断然好きです。」

「海鮮は済州島から取り寄せました。KIKI さんの味覚は有名ですから。」

「楽しみです。ワインはお任せします。」

先日はイタリアンでサッシカイヤだったとソムリエに相談したら、トスカーナのキャンティクラシコの赤を薦められた。

「鉄板焼きになんて合うんだらう。ブラックベリーの実を感じながらハーブの香りもする。お肉にも海鮮にも負けないけど邪魔をしない。やっぱりワインは食とのマリアージュですね。」

「代表のおっしゃる通り味覚の鋭い方ですね。まさにこの果実感とハーブ系の香りが絶妙に舌に絡むワインです。ごゆっくりご堪能ください。」

「KIKIさんの好みに合うようでよかった。」

「はい。美味しいものはボーダレスです。」

「KIKIさん、恋人はいらっしゃいますか？」

「いえ、いません。こう飛び回っていると振られてしまいますね。男性は独占欲が強くジェラシーもね。やはり近くにいてこそ恋人ですから。」

「そうですか。好きな人は？」

「好きになってもなかなか想いが通じないので友達以上恋人未満ですね、いつも。」

「ではわたしが候補に名乗り出てもいいですか？」

「大変光栄です。でもいまはクライアントですから、いずれ仕事を終えてから考えます。」

「そうですね。ではそのときに・・・。」

ソウル滞在中もあと3カ月程と聞いている。それまで待つしかない。時間を合わせてデートに誘いだそう。

ソウルの鉄板焼きは最高に美味しかった。RONにも教えてあげよう。ARANが来たら絶対に来るつもりで名刺をもらった。予約必須の店のようだ。SUHO代表にお願いすれば問題ない。

食後は別フロアのバーで、KIKIはグラッパ、SUHO氏はバーボンのロックで。

ここのバーもいい雰囲気。オトナのカップルが多くみられ、ピアノ演奏が素晴らしかった。このバーもお気に入りリストに加えよう。

日付が変わるギリギリにホテルに到着。さすがHDを率いる代表、ビジネスの話は楽しい。今度はホテル経営について聞いてみよう。

さて明日はいよいよMINU博士の仕事に入る。

KIKIの一番やりたかった仕事だ。

魅力全開のプレゼンテーション

大型バイクがNEXT DOORの本社ビル前に停まる。KIKIだ。33階に上がるとスタッフ2名が出迎えた。SION代表はジュネーブからまだ帰らない。

DR MINUのプレゼン資料は揃っていた。グラフや難解な表やイラスト、写真と相当数が並べられている。博士の作成した原稿をナレーションで解説をする。もちろんバックミュージックも場面ごとに多彩だ。しかもすべて3Gで浮かび上がってくる。同時にイヤフォンで翻訳することもできる。ほぼ英語で問題ないが、投資家向けにスペイン語、フランス語、ドイツ語、中国語、日本語と数か国の機能が用意されている。NEXT DOORのトランスレーション機能を備えた3Dビジュアルによるプレゼンテーションソフトだ。博士のプレゼンテーション内容も医学界では画期的な開発だ。そして同時にNEXT DOORの新製品発表の場でもあるのだ。

HDグループ総力を挙げて取り掛かっている。

ソフトによるプレゼンテーションが終わると、博士のいままでの実績や研究室の様子が写真とナレーションで流れ、最後に質疑応答だ。ここは本人が登壇する。

いままではスタッフによる質疑応答だったが、今回は博士自らの登壇となる。人前に出ることのない世界有数の研究者が登壇するとあって、聴講者数は学会史上最高に。大きなイベント会場を貸し切ることになっている。その分、画像や音響の設定が高度になる。大きなコンサートの映像を制作する規模だ。ここはNEXTDOORの本領発揮。注目度が高い。

KIKIは博士のスタイリングはもちろん、見せ方、話し方を担当する。

世界一魅力的なDR.MINUを創り上げるのだ。ワクワクする。

まずは、HDの舞台を備えたフィッティングルームで見せ方、話し方の特訓だ。

NEXT DOORでの打ち合わせを録画し、ソフトを使ったプレゼンテーションの様子を博士に確認する。

「さすがSIONだ。最新の見せ方でわかりやすい。各自のパソコンに連動しているので、データを持ち帰り検討することも可能だ。ナレーションもわかりやすい。CGも見事だ。」

「大型の会場でも十分対応できるそうです。あとは博士のデビューですね。」

「わたしは人前に出ることができないんです。あがってしまい言葉が出ない。だから質疑応答で登壇するなんて不可能です。」

「大丈夫です。わたしがコーチングします。そして当日も博士の視線の先にいますから、わたしのためにプレゼンしてください。今日から毎日一緒にトレーニングをしましょう。」

「毎日ですか？」

「はい、一日の目標を設定してできるまでお付き合いします。毎日……。当日2日前から会場は押さえているのでリハーサルもじっくりできます。博士とプレゼン当日まで独占契約ですね。あ、SION代表のプレゼンの衣装やらありますけどね。すぐに想定できる質疑応答の原稿をよろしく願いいたします。」

「今晚は何を食べましょうか？」

「博士は？」

「居酒屋に行ってみたいです。」

「さっそく LEE に聞いてみますね。」

「LEE、博士と居酒屋に行こうと思うけど、お薦めのお店はある？」

「マッコリと韓国料理が美味しい居酒屋があるので予約しておくよ。かなり人気のお店だけど博士は大丈夫かな？」

「あら、慣れないとね。」

MINU はスタンドカラーのブラウスにグレーの T シャツ、ネイビーのストレートパンツ。水色のスリッポンだ。ほんとに白のブラウスがカッコいい。

KIKI はエルメスのコットンツイルのシャツにオレンジのドット柄膝丈パンツ。トリーバーチのオレンジのミュールにミニトート。

2人で示し合わせたようなスタイルだ。

いつものマセラッティに乗り込み繁華街にある韓流式居酒屋に。店内は人が多くにぎやかだ。もちろん長身の2人は入店と同時に注目を浴びる。ただし MINU 氏は人目にさらされたことがないので写真を撮られることはない様だ。視線独占のなか奥の個室に通される。メニューは韓国語なので博士にお任せだ。

「楽しいですね。ワイワイガヤガヤの熱気が最高です。」

「はい。人馴れできそうです。なにより KIKI さんといるのがうれしい。」

次々と韓国家庭料理が並ぶ。やっぱりサムギョプサルがうれしい。とろみのあるマッコリはまるやかだ。さすが LEE。

「KIKI さん、わたしは最近スタッフの指摘で SNS の KIKI さんを見ました。相手の東洋系の男性は恋人ですか？」

「え、東洋系？あぁ、兄です、3番目の。いま SION 代表とジュネーブに入っています。そろそろこちらに戻るのでは。SNS にアップされていたんですか……。ハングルがわからないので見たことないけど……。」

「お兄さんでしたか。てっきり恋人かと。コメントではそうあったので。」

「兄もわたしも正体不明なので憶測で書かれるんだと思います。近日ご紹介します。多分博士のプレゼンには長兄も来韓すると思いますから。」

「そうでしたか。ところで KIKI さん、恋人は？」

「いません。こう飛び回っていると無理ですね。恋人ならいつも一緒にいなければと男性は思うようですから。そして何より穏やかで癒される人がいいですね。いろいろな顧客がいますからせめてプライベートは。」

「わたしはどこに行っても、しばらく会えなくても自分のもとに戻ってくれるとわかっているだけで十分です。」

「博士はわたしの彼氏向きですね。冗談ですけど……。」

「わたしもそう思います。KIKI さん、わたしを候補にしてください。と言っても内向的で医学しかないわたしではとても無理だということも承知しています、残念ですが……。」

「……さあ、いただきましょう。」

恋人候補の件はここで終わった。

MINU はこれからしばらく KIKI と一緒なのがうれしい。何としてでも苦手を克服するつもりだ。
明日からお互いのスケジュールを調整し、毎日2時間程度の猛練習が始まる。

舞台のあるフィッティングルームでは連日プレゼンに向けた練習が行われていた。

「博士、視線はこちらに。手を大きく広げて一歩前に踏み出して。姿勢よく、顔はまっすぐ、うつむかない
てください。小節ごとに区切って呼吸してください。ゆっくりはつきりと。」

初日から様子をうかがう LEE は、どうなることかと不安だったが、博士は2日経つと驚くほど上達した。
さすが KIKI、ファッションだけではなく、こうやって魅力を引き出していくとは、博士がまるで別人のよう
だ。KIKI の目指す、世界で一番魅力的なドクターが誕生するかもしれない。さすが世界の VIP を顧客とする
イメージメーカーだけあるな。

MINU は進化する自分に驚く毎日だ。プレゼンする自分の視線の先に KIKI さんがいる。明日は映像とと
もにリハーサルだ。研究室のスタッフや NEXT DOOR の技術スタッフが聴衆だ。緊張しないだろうか？うまく
話せるだろうか？KIKI さんと2人の時とはまるで違う気がする。

ここまで行けば上手くいくはず。常に博士の視線の先にわたしがいればスムーズに話せるはずだ。大きな
会場でわたしがいることを認識できるよう白いブラウスにペンライトが必須だ。KIKI はデビューの準備に余
念がない。

いよいよ聴講者を入れてのリハーサルだ。

HD と研究室、NEXTDOOR のスタッフ 100 名程。

「博士、大丈夫です。質疑応答は予測できない質問も考えられます。そこは博士の知性で乗り越えてくださ
い。慌てなくていいんです。不安になったらわたしを見てください。必ず視線の先にいますから。いいです
ね。」

「はい。」

MINU はトレードマークの真っ白いスタンドカラーのブラウスに、ネイビーのくるぶし丈パンツ、素足にグ
ッチのスリッポンだ。

「博士は魅力的な低音ボイスがセクシーで、わたしはいつもうっとり聞き惚れています。どうか世界に聞か
せてあげてください。」

MINU は KIKI の言葉がうれしかった。まさか自分の声を褒めてくれる人がいるなんて。
それも彼女が聞き惚れる声だったなんて・・・。KIKI さんといると新しい発見の毎日だ。

リハーサルは大成功。研究室の面々は博士の魅力的なプレゼンテーションに拍手すら忘れていた。視線の
先に KIKI がいることは気づいていたがここまで変わるとは。

DR.MINU をよく知らない NEXT DOOR のスタッフは HD 第3の御曹司の存在に驚いた。

あとはもう少しジェスチャーを大きくすること。そうすれば魅力全開だ！

制作スタッフによって、プレゼンテーション内容の微調整はほぼ完了するようだ。

当日は世界から称賛されること間違いない。

KIKIはDR.MINUの魅力を引き出せたことがうれしかった。長兄と酷似しているMINUが気になりだしてから、いまはMINUの魅力に引き寄せられているようだ。

いよいよ明日はHDグループDR.MINUのプレゼンテーションだ。

医学会はもちろん投資家や医薬品企業など、ここ数日で世界からソウルに集結している。

今日は明日に備えた最終リハーサルだ。

ジュネーヴから帰国したSIONは最終リハーサルのチェックに来場した。

「KIKIさん、MINUはどうですか？仕上がりましたか？」

「はい。わたしの目標通り、世界一魅力的なドクターとして称賛されること間違いなしです。」

「楽しみです。」

「長兄のARANを紹介します。今晚SUHO代表主催の夕食会で是非。」

「オフィシャルな晩餐会は明日なので今日は身内ですね。」

「12名程と聞いています。スペイン大使も見えるそうですよ。」

「明日のエスコートは？」

「長兄のARANと。」

SUHOとSIONはMINUのプレゼンテーションに驚いた。人前に出ない、内向的と言われてきたMINUが、堂々と華やかに、プレゼンテーションしているのだ。

白いブラウス姿がカッコいい。LEEの言う通りソウルで一番白いブラウスが似合うかもしれない。

低音ボイスが響く。

KIKIの言う通り、世界一魅力的なドクターがそこにいるのだ。

そして舞台からまっすぐ見つめる先にKIKIがいる。MINUはKIKIの存在によって堂々と舞台に立てるのだ。

SIONはMINUの変貌とそうさせるKIKIの存在が引っ掛かる。

SUHO代表主催の夕食会は、KIKIお気に入りのスペイン大使館御用達のレストランだ。

ARANを迎えにRONとKIKIは仁川空港へ。到着ゲートからイッセイミヤケで決めた長身のARANが出てきた。

「いまさらだけどARANもすごくカッコいいよね。わたしの兄貴全員、本当に騒がれるだけあるよ。」

「KIKI、お迎えありがとう。今晚は食事会と聞いているけど。」

「スペイン大使もプライベートで参加するって。RONがいるから大丈夫だよ。」

「今回は博士自らプレゼンすると聞いている。KIKIの戦略か？」

「世界一魅力的な博士になるよ、きっと。」

「楽しみだ。RON、NEXT DOORの方はどうだ？」

「ジュネーヴで認証されたし、博士のプレゼンソフトも新製品だ。投資するなら今しかない。それにKIKIが

財閥御曹司に大人気だよ。」

「へえ、ソウルでモテるの？じっくり拝見しよう。」

「ARAN、明日のパーティ用にセリーヌでスーツ買ってね。ARANはどうする？」

「KIKI をエスコートするからセリーヌに連絡入れておいて。ジャケット&パンツにドレスシャツを。」

「了解。明日朝一番で予約する。店長はまだパリに戻っていないから会えるよ。彼に何着か用意してもらう。そうだ。ダディからのお土産ちょうだい。」

「SUHO、今晚の夕食会に出席するよ。アドレスを教えて。」

「え？？？MINU が出席？それはうれしい。プレゼンも素晴らしい仕上がりだったし、凄い進化だな。KIKI さん効果？」

「そうだね。」

MINU は 白いブラウスに、グリーンのマオカラーのジャケット、紺のストレートパンツ。チーフはエトロ、靴はエルメスのローファーだ。もちろん KIKI のコーディネート。ファッションによって自信が生まれ、今日のプレゼンで確信した。KIKI さんがいなければだめだ。いくら外見が進化しても、そばに彼女がいなければ何もできない。今晚は KIKI さんの周囲の男性が一堂に集結する。不参加というわけにはいかない。こんなこと考えるなんてやっぱり何かが変わったのか、自分が不思議だ。今日で内向的な自分から卒業だ。

邸宅を改装したレストランのエントランスに次々とクルマが入ってくる。

SUHO 氏、DR.MINU、SION 代表、LEE はそれぞれ社用車で。KIKI と RON、ARAN は大使館のクルマ。それぞれが乗り付けた。

ウェイティングバーを通る彼らはオーラ全開のカッコ良さだ。次々と撮影されている。HD グループの御曹司、SG の LEE とお馴染みの被写体より、ARAN、RON は目立っていた。無数のフラッシュに ARAN はびっくり。

「なんだ、なんなんだ KIKI。」

「ここは SNS 大国ソウル。市民全員がパパラッチで5分もしないうちに記事と写真がアップされるよ。すぐに慣れるって。それにハングルは読めないから気にもならなくなった。」

SUHO 代表によってそれぞれ紹介された。それに明日は博士自らのプレゼンテーションとあって話題だ。今日の主役は DR.MINU。

「KIKI さん、MINU がここにいる、誰とでもにこやかに会話している。初めて見る姿に驚くばかり。そして何よりカッコいい。」

SION 氏はただただ驚いている。

「DR.MINU、兄の ARAN と RON を紹介します。」

「博士、お会いできて光栄です。明日の講演を楽しみにしています。」

「KIKI さんのおかげです。どうかよろしく願いいたします。」
それにしても兄はハリウッド俳優並みのカッコ良さだ。KIKI さんに恋人がいないのもわかる気がする。

舌の肥えている ARAN もここのスペイン料理は気に入ったようだ。
スペイン大使は SION と ARAN と新製品について盛り上がっている。ARAN もスペイン語は問題ない。
RON と SUHO 代表は IR などこれからのスケジュールを。
DR.MINU はやっと KIKI をつかまえた。

「KIKI さん、お兄さんはまるでハリウッドスターのようですね。びっくりしました。」
「博士に声も雰囲気も似ています。ARAN はわたしを本当にかわいがってくれます。明日は成功間違いなしですよ。」

「KIKI さんがいるから安心して話せます。」
「慣れれば大丈夫です。」
「この件が落ち着いたら濟州島に行きませんか？」

MINU は思い切って KIKI を濟州島に誘った。
「いいですね。スケジュール次第ですが。おかげさまで HD の案件で超多忙です。」

「LEE、マジでギャラ 3 倍増しって言ったけど。3 人分なんだから当たり前だよ。安請け合いして後悔しているかも。滞在も長期化だし、1 週間休暇が欲しい。」

「うーん。調整してみる。」
「できるなら ARAN と帰国したい。さすがに 4 か月以上は家族も心配するし・・・。」
「とりあえず、明日のプレゼンと懇親会を終わらせよう。」

KIKI@日本

DR.MINU の新薬におけるプレゼンテーションは、SION 率いる NEXT DOOR の最新画像によって、聴講者は魅せられた。

KITTY によって難解なグラフや写真が、わかりやすいビジュアルで解説される。

翻訳ソフトは簡単で速い。

各国同時配信で世界中がリモートで聴講可能だ。手法も表現も新しい。

質疑応答はいままで決して登壇することのなかった DR.MINU の登場だ。彼の登壇に歓声が沸き起こった。

さすがに緊張は隠せないのか第一声が出ない。すると暗い聴講席の真正面にペンライトが・・・。

「KIKI さんだ。KIKI さんがいてくれる。」

安心したのか、質問に対する的確な応答で次々と質疑をさばく。そこには世界一素敵な医学博士の姿があった。

DR.MINU のプレゼンテーションは、NEXT DOOR のビジュアル技術とともに大成功だった。ここからは SUHO 代表の手腕にかかってくる。

ニュースもトップ記事とあって、投資家や国家機関、医学界から一同が介するパーティは注目される。

KIKI は ARAN のエスコートで被写体だ。

セリーヌを着こなすアジアカップルの正体は！

といった見出しらしい。そろそろ出過ぎたのでいったん避難するのが得策だ。

今日のプレゼンテーションを機に、HD 3 兄弟は 2, 3 週間程忙しい。

KIKI は帰国することにした。滞在中は何一つ不自由なく快適なソウルだが、どこから誰からにも監視されている状況が、ストレスフルなのは確かだ。慣れない SNS 文化にはいまだ適応できないでいる。

博士には 10 日分のコーディネート。SUHO 代表には 10 着分のスーツコーデとパーティ仕様を 5 着ほど用意して、帰国する。

ARAN と、参鶏湯、チヂミ、キムチ、トッポッキ、そして調味料を店でも開くのかという程お買い上げ。空港に運んでもらうように手配をして、トッポッキと参鶏湯でランチ。

ARAN は連日被写体でフラッシュ攻撃、だいぶ慣れたようだ。

「わたしたち似ていないのかな。恋人で認知されている。」

「RON と KIKI は母さんのアメリカ×日本×チャイナ、わたしと JIN は生粋のチャイナだから。」

「あたしはダディ似だから、やっぱり ARAN とは似ている。ARAN は最高にイケメンだから。」

「それは光栄だ。KIKI が美人ってことだな。」

「うーん、欧州や韓国ではどストライクらしい、わたしのアジア系の顔が・・・」

「あの HD 3 兄弟に告白されたとしたら、KIKI はかなりのレベルだって証明されたな。」

「皆さん、ソウル美人にモテるから、たまには違ったのが気になったってことじゃないかな。明日のお迎えは JIN？荷物多いけど・・・」

「それなりのクルマを用意するだろ。」

「だね。ソウルでの準備は完璧だし、明日朝一番だから日本でゆっくりできる。はやくウチ飯食べたいよ。」

ARAN の携帯が鳴ってしばらく話している。投資関係の単語は KIKI には意味不明だ。

「RON も一緒に帰国できるらしい。それとホテルの件で話があるらしい。」

「あー横浜のね。忘れてた。改装するとか。」

10 年ほど前、北京からの無謀な仕事を無事終えた KIKI に、国で所有する住宅用地とホテル、港湾用地の所有権などが報酬として支払われた。自国の通貨が安定しないので日本国内の不動産ということだろう。数年で外国人向けの低層マンションが建てられ、すべての権利が KIKI の名義に。ホテルは改装されてから KIKI に、港の権利は永久だ。

外資からの譲渡だが、そこは巨大社会主義国家、何も問題なく、KIKI に多額の税金負担もなく、膨大な資産がスライドした。多分第 3 国の資産も入っているだろう。実に KIKI はファミリーで一番の資産家だ。そして ARAN が管理している。

今回、ホテルは外国人向けに全室滞在型ヴィラに、マンションは最新設備にリフォーム、その打合せがある。この特殊な報酬のせいでいまも北京と仕事が継続しているのだ。

仁川空港国際線 VIP ルームには帰国便を待つ 3 兄妹が・・・。

クルー専用口から入りやっと落ち着いた。空港スタッフは、話題のアジアンハンサム 2 人に釘付けだ。

そこに DR.MINU が見送りにやってきた。

「皆さんお揃いでの帰国と聞いて見送りにきました。このたびはいろいろとありがとうございました。わたしたちからのお土産は飛行機に積みましたので。」

「恐縮です。素晴らしいプレゼンテーションでした。これからのご活躍に期待しています。できる限り応援致します。」

「さっそく年内に RON さんのご紹介で、ジュネーヴを皮切りにヨーロッパに向かいます。」

「それは順調ですね。是非日本にもお越しくください。セッティングはお任せください。」

「それでは KIKI さん、ソウルに入るときはお迎えにあがります。」

「ひとりで大丈夫ですから。それでは来週にお会いしましょう。」

ファーストクラスは 4 組程度、昨晚のパーティで見かけた顔ぶれだ。

「ARAN のセリーヌはどうしたの？」

「何着かまとめ買いしたのは後日送られてくる。明細に KIKI のも紛れ込んでいたな。」

「ブラウスとパンツ 3 セットにスーツ 2 着入れてもらった。ありがとう！」

「他にもレディースがあったぞ。」

「マミーとお嫁ちゃん 2 人に頼まれた。どうせ ARAN は忘れるから。JIN にはトムフォードでジャケット、ブラウス、パンツ 2 着ずつ。ダディにはエルメスのブラウス 3 着。支払いは ARAN で。」

「どうみても KIKI の方が資産家だけだな。」

昼前に羽田に到着。JIN がいる。久しぶりの JIN はまたとびっきりのいいオトコだ。

「まさか JIN の jaguar じゃないよね。スーツケース 4 つにいっぱいのお土産が入らないよ。」

「エスカレード買いました。ご安心を。」

「へえ。どこでも行けるね。」

「こう頻繁に送迎があると大きい方がいいかなと。KIKI、父さんに電話しろよ。」

「ダディ、ただいま。ウチ飯お願い。JIN の運転だけどバス並みのクルマだから1時間位かな。お腹ペコペコ。」

「1時間か……。かかるな。KIKI の好物を揃えたから、早く帰っておいで。」

首都高速横羽線の渋滞もあり、1時間半で自宅に到着。荷物はスタッフに頼んでダイニングに直行だ。

「手を洗って着替えてきなさい。」

マミーの声！無視！おしぼりあるし……。

スタッフによって食卓には、美しい器に盛られた料理が次から次へ並ぶ。とっておきの紹興酒も。

「どうせソウルではワインだ、マッコリだろうから今日は紹興酒だ。」

父のかけ声で午後の華やか宴が始まった。

「ARAN、ソウルの仕事が終わったらジュネーヴに入って建築家、インテリアデザイナーと細かい打合せをしてくる。それまでは基礎工事とか進めて欲しい。」

「了解。それで進めておく。」

「あとガーデナーは友人に一任するから。基礎工事の日程を教えて。現場で打合せをしてもらうから。」

帰国したその夜から翌日の夕方まで KIKI は眠りっ放しで起きてこなかった。16時過ぎに母の紗稀が様子をうかがうと、かなりの高熱でぐったりした KIKI が……。すぐに点滴。ARAN、RON が交代で付き添った。

「平気な顔して相当疲労が溜まっていたんだな。いくら慣れているとはいえ財閥3兄弟相手に毎日写真を撮られて、かなりハードだったらしい。これで HD は KIKI に頭が上がらないな。株価も好調だし、まさに KIKI 効果だと SG の LEE がうらやましがっていたよ。」

「おかげでこちらも相当の投資効果が見込める。KIKI はそんなつもりはまるでなくても、すべてがいい方向に回るから凄い。妹ながら尊敬する。」

「まったくだ。」

「相当のプレッシャーだろうな。想像もつかない。10年前、北京からの仕事をたった一人で成功させたメンタルの強さは誰も敵わない。」

「家族も助けられた。そろそろ素敵な相手を見つけて幸せになって欲しいな。」

「それはどんな仕事より難しそうだな。」

KIKI は帰国して3日後には、熱が下がり快復した。

「もう、ソウルの仕事はいい加減にして帰国しなさい。」

「母さんの言う通りだ。なんならわたしから LEE 氏に連絡するから。」

「RON、大丈夫だって。こっちで体力回復したから。ソウルはあと1カ月もしないで終わるし、2週間程度ジュネーヴで打合せして帰国するから。」

「もう、ずっと日本で仕事すればいいのに。それに改装や建て替えてしばらくは日本ね。」

「KIKI、どう？久しぶりの里帰りは・・・。」

「LEE、しっかり充電中。」

「こっちにはいつ？」

「5日後に入るつもりだけど。」

「了解。エアが決まったら連絡ください。迎えに行くから。アメリカの有名誌から、表紙のモデルをDR.MINUに依頼したいとオファーがある。」

「撮影はいつ？」

「KIKIがソウルに入ってからになる。」

「了解。博士は承諾した？」

「KIKIがいるのが条件。」

「じゃあ、OKってことで。」

「韓国料理のお土産は喜ばれた？」

「キムチ専用の冷蔵庫が今日設置される。」

「韓国食専用だね。」

さすがに大量の韓国食材なので、KIKIの実家は業務用の専用冷蔵庫を設置。KIKIが買い込んだ相当量の食材や調味料に加え、MINUからも大量の冷凍参鶏湯や真空パックの韓国牛と、すぐにも韓国料理店が開けそうだとJINもびっくり。キムチは専用の梱包で匂わなかったが、調理場で開封してスタッフは大慌て。至急冷蔵庫を手配したらしい。

ツーリング禁止令が出たので、KIKIは遠出ができず自宅の畑作業だ。青唐辛子、しそ、にんにくを植える。庭師と一緒にバラの手入れに植栽。そして中華街の食べ歩きに、洋服の買い出しはストレス解消。それにスポンサーを兼ねてJINがつきあってくれる。

今日のランチはグランドホテルの洋食だ。

「洋食は日本が一番。ソウルにはなかったし、欧米もなかなかないから食べたくなる。」

「たくさん食べて。またしばらく日本から離れるから。もう日本で仕事すればいいよ。」

「うーん。ダディも言うけどわたしには日本は向かない気がする。この仕事は日本向きじゃないし、海外の方が需要があるんだもん。いまオファーがあるのはオーストリア、モナコ、中東はパスだけどね。日本には貴族や財閥がないし、プレタポルテの文化もないし、わたしの活躍する環境がないから。」

「うちの仕事は？ホテルやマンションの他に土地もあるし。スタジオだって店だってできるよ。」

「面倒くさいよ、経営なんて。ARANがいるからいい。」

「結婚は？恋人はいないの？好きな人は？今回も財閥の御曹司に惚れられたと聞いたけど。それも3兄弟とか。」

「みんなしてそればかり聞くんだから。告白されるのは毎回のことですよ。」

「ふーん」

「ARANに声とか雰囲気似ている人がいて、すごく自然で癒される。仕事で飛び回っていてもその人のもとに帰りたいて思える。」

「KIKI の理想は子供のころから ARAN だね。」

「一番上のお兄ちゃんだからね。RON は友達感覚で、JIN はボーイフレンドって感じ。ARAN は恋人というより結婚相手かな。素敵な兄貴に恵まれているよね。それも結婚しない原因だからね。癒し系彼の写真見る？」

「確かに雰囲気は ARAN だ。何やってるの？」

「ドクターで博士、そして御曹司。3歳位年下かな。」

「イケメンだね。さすが KIKI。つきあってみれば？」

「どうかなあ。わたしが世界中どこで仕事をしていても、自分のもとに戻ってきてくればいんだって。」

「理想的だね。でも韓国の財閥ってどうなの？面倒くさいかもね。」

「結婚はしない。面倒だから。」

「それならいいんじゃない？結婚は契約だから国籍や慣習が違くと難しいし、財閥となるとなおさらだよ。」

「まだ、つきあってもいないしね。」

MINU は毎日 KIKI からの連絡を待っていて落ち着かない。こちらから連絡しようと思うけど、何を話したらいいのか……。そうだ、雑誌の表紙の件で連絡してみようか……。

「KIKI さん、わたしです。日本はいかがですか？充電できましたか？」

「博士、なんか久しぶりに声を聴きました。お忙しいのでは？」

「原稿をまとめたり、海外からのメールに返信したり、地味な作業に追われています。いつこちらへ？」

「博士の表紙撮影までにはソウルに入りますのでご安心を。3日後の昼便です。」

「ソウルからすぐに済州島に入りませんか？2泊ほど……。」

「スケジュールの調整ができるかなあ。LEE には入国すればすぐにわかっちゃうし……。この件はもう少しお待ちください。」

「無理なくていいです。ただ SUHO も SION もいまは超多忙なので、2、3日なら KIKI さんを独占できるかなと思って。」

「済州島は魅力です。では連絡します。」

思い切って誘ってみたけど……。どうか上手くスケジュール調整ができますように。

いきなり博士から、2泊3日のバカンス提案なんてビックリ！ダイビングに水上スキー、行きたい！LEE にはきちんと話して了解もらえばいいよね。ウエットスーツ持っていこう。

「LEE、明日ソウルに入るけどすぐに済州島に行く。3日ほどバカンスでもいい？」

「博士の撮影に間に合えばかまわないけど。うちの別荘に泊まれば？友達と？」

「博士に誘われた。別荘はあるみたいよ。」

「HD の別荘もなかなかいいよ。博士どうしたの？KIKI を誘うなんて大胆過ぎる。」

「クルージングの約束しているんだ。」

「了解！済州島からソウルに入る日時を教えてね。」

HD の御曹司、それも世間に知られなかった次男が、外国人である KIKI に惚れた？それにかなり積極的なア

プローチを仕掛けているな。

KIKI のタイプには見えないけど・・・。

「KIKI です。仁川空港にお迎えをお願いします。濟州島バカンスに連れて行ってください。」

「はい。お待ちしております。」

やったーOK だ。すぐに別荘のクルーに連絡しよう。いままでの自分では信じられない行動だ！何かが変わっていく。

恋って素晴らしい！

好きな人には素直になれる。

少しのことでも嫉妬もする。

そして独占したくなる。

彼女の一語一句に一喜一憂する。

彼女といる自分が誇らしい。

恋すると欲が深くなる。

こんな気持ちは初めてだ。

KIKI と MINU @ 濟州島

「RON はいつ出発？わたしは今日の昼便。」

「1 週間後、ジュネーブに入る。博士の件があるから。」

「羽田まで送ってね。ソウルから直接濟州島に入る。博士に誘われた。」

「え？？DR.MINU？」

「うん。別荘があるらしい。LEE には伝えた。びっくりしてたけど、RON もだね。」

「SUHO 代表か SION 代表ならわかるけど、意外だ。よく KIKI が OK したと思って。」

「博士って ARAN に似てるでしょ。だから何となく安心するし癒される。プライベートは家族のようにほっとできる人がいい。」

「付き合ってみたら？というか KIKI にそんな暇あるかな？年に3分の1程しか一緒にいられないだろう？」

「そうだね。わたしには恋愛は無理だね。2人の時間を共有できないから。」

「KIKI らしい恋愛の形を作ればいいし、無理だったら別れればいいさ。」

「まだそこまで悩む段階ではありません。1時間後に出発するから。」

「荷物はポルシェに入る分にしろよ。」

「それは無理。ダディのでっかいメルセデスでよろしく。」

羽田からのソウル便は人気路線だ。ビジネスクラスは7割程度。いまお気に入りの韓流グループを聴きながら寝落ち。目が覚めたら着陸態勢だ。

「KIKI です。いま到着しました。」

「そのまま出てきてください。」

真っ白なブラウスにスカイブルーのパンツ。長身の MINU 氏はまさに韓流スターのようだ。SION 氏や SUHO 氏のように露出していないので、被写体にはならないが、カッコ良さに女性の注目度が高い。

「KIKI さん、お疲れ様。さあ急ぎましょう。」

KIKI の手を握りながら早足で歩く。正面にマセラッティと運転手が。2人は後部座席に乗り込んだ。金浦空港に向かう。

1時間程で濟州島に到着。空港にはメルセデスのゲレンデが。MINU は助手席の扉を開けて KIKI を乗せてから運転席へ。

「ゲレンデは外観ほど広くはないけど、余計な装飾がない車内は好みです。」

「そうですね。装甲車のようなボディが好きです。」

「マセラッティとは真逆ですね。」

「ソウルでの生活とは切り離したくて。別荘には大型バイクもあります。ツーリングに行きましょう。」

「やったー日本ではツーリング禁止令が出たので。体調を崩すと母がうるさくて。」

「わたしも同業者として禁止令は賛成です。」

40分程走ると森の中へ……。坂を上った先には大きな門があり、その先にクルマを停める。20名程

のスタッフ一同がお出迎えだ。

「おかえりなさいませ。ごゆっくりお過ごしくださいませ。」

「博士、すごい。室内庭園が美しい。」

「部屋に案内してあげてください。」

案内された部屋は吹き抜けの中2階の南東だ。一面ガラスでバルコニーが広く、グランドスイート程の大きさだ。KIKIの好きなカサブランカが部屋を飾る。

「離れにはスパと温水プール、テニスコート、音楽ホールが。目の前はプライベートビーチ、ヨットやクルーザーが停泊しています。バルコニーでMINU様の部屋とつながっています。一応お好みのドリンクとフルーツは冷蔵庫に用意しました。」

「ありがとうございます。」

KIKIはMINU氏に電話をかける。

「夕日を眺めにツーリングに行きませんか？」

エントランスにはKATANA1000赤と黒が並ぶ。KIKIはクリーニングから戻った真っ赤なライダースーツ。博士は真っ黒だ。そこへ大型バイク2台が。どうやら案内を兼ねた警備スタッフのようだ。NEXT DOOR製のイヤフォンを装備して出発。

久しぶりのバイクは気持ちいい。島はカーブも多く走り応え満点だ。

夕陽スポットでバイクを降りる

「海面に映える夕陽は格別ですね。博士が大型に乗るなんて知りませんでした。」

「ガレージにありましたよ。よくSIONともツーリングに行きました。夕食は市場に行きましょう。」

濟州島の夕陽を堪能してから、シャワーを浴びて街へ出発だ。

「今日は濟州島の海産物にしましょう。魚介スープは絶品ですよ。」

高身長でファッションナブルな2人は注目だ。

KIKIはシースルーのブラックシャツにゴールドのタンクトップ、真っ白なサブリーナパンツ、ゴールドのミュールとサングラス全てフェンディだ。

MINUはドルチェ&ガッバーナの花柄シャツ、真っ白なパンツ、サンダル、レイバンのサングラスで決まってる。そんな2人が手をつないで市場を歩くので、周囲は俳優か、モデルか？と言いながらシャッターを切る。被写体には最高だ。

「ここの魚介料理は最高です。さあ入りましょう。」

予約をした個室に通される。

「韓国で一番人気の焼酎が飲みたいです。父曰く世界で一番喉ごしすっきりな焼酎だとか。是非！」

「かなり庶民的レベルですが・・・。」

「魚介にはぴったりと聞きました。」

「確かに。ではそれで。あとは自慢の品を並べてください。」

「本日はタコ、あわび、エビ、白身魚が獲れたてです。是非お召し上がりください。」

KIKIは、韓国はたれが何種類もあり、いろいろな味を楽しめるから気に入っている。

どうしても魚介は淡泊になりがちだが、ここでは魚介本来の食感や香りに、甘みや辛みが加わり五感を刺激

してくれる。

「本当にこれらのタレは最高です。どうにかして持ち帰りたい。携帯すべきマイラヴァーです。」

「では料理長に頼んでおきましょう。作る人それぞれの味があるので面白いですよ。」

博士とは自然と会話が弾む。仕事の話でなくても盛り上がるのだ。KIKIにとって男性と食事をしながら仕事以外の話は新鮮だ。

「そろそろ戻りましょう。食後酒は静かに別荘で。」

迎えるクルマで別荘に戻る。サンルームにはバーボンと赤ワイン、バローロ。いちじくとブルーチーズもある。まさに KIKI の定番だ。

「なんでわたしの定番をご存知なんですか？」

「わたしは研究熱心ですから、ホテルのバーを取材しました。」

「スタッフは不思議に思ったのでは？」

「とても詳しく教えてくれました。」

誰も存在しないかのように静寂に包まれている。しばらく沈黙が続いた・・・。

MINU の視線が KIKI を捉えた。

「KIKI さん、わたしは恋愛経験がありません。SUHO や SION がうらやましかった。でも KIKI さんと出会って人を愛することを知りました。」

会いたくてたまらない。

会えば胸が高鳴り熱くなる。

そして独占したくなるし、嫉妬もする。

「KIKI さんへの想いをどう伝えればいいかわからない。」

「言ってみてください。MINU さんの言葉で。想いを聞いてからでないと答えることもできません。」

しばらく沈黙が続く。グラスの氷が重なり合う音だけが響いている。

この静寂って嫌いじゃない、落ち着く。

「KIKI さん、わたしの恋人になってください。わたしだけを見て欲しい。離れていてもわたしだけを想って欲しい・・・です。」

KIKI は MINU をじっと見つめて口を開いた。

「恋愛って2人の時間と記憶を共有するものだと思います。1年12カ月のうち4カ月程しか一緒にいられないわたしでいいんですか？もちろん、この先仕事のスタイルは変えるつもりですが、ここ2年はスケジュールが入ってほぼ海外です。それで博士は幸せでしょうか？せつかくの想いも消えていく気がします。」

MINU は KIKI の手を握りしめた。

「わたしとでは嫌ですか？」

「いえ、すごく気になります。だからこそ消滅するのが怖い。始める勇気がありません。」

「わたしはいま、一生分の勇気を振り絞りました。絶対に消滅なんてしない、もっともっと KIKI さんを愛します。だから2人で始めましょう。無謀でしょうか？」

KIKI は握られた手をそっと外し、MINU の頬を掌で包み込んだ。そして唇を重ねた。

数秒後、KIKI はそっと唇を離した。

「ごめんなさい。うまく言葉にできなかったから・・・。」

MINU は KIKI の離れた顔を引き寄せキス。やさしく、甘くそして深いキスだった。

胸の鼓動が聞こえるようだ。

「ありがとうございます。わたしにとって KIKI さんとの出逢いは天からの贈り物です。」

こんなにも甘くやさしいキスは初めてだった。いつもは激しく熱い……。このとろけそうな感触をいつも感じていたい。

「では、恋人同士スタートですね。よろしくお願ひします。お互い気持ちが離れたら、この恋は速やかに終わりにしましょう。」

「わたしは KIKI さんと離れませんから覚悟してください。」

MINU は思い切って告白して満足だった。到着したその晩に告白して断られていたらと思うと、いまさらながら自分の無謀さに呆れる。

KIKI はフワフワした気持ちだった。思わずキスしたのは、MINU が好きだと確信したからだ。久しぶりの恋愛を存分に愉しもう。

早朝からクルーザーに乗り込む。クルーはネイビー出身の強者揃い。水上バイク4台が追走する。KIKI は水上スキー、ダイビング、博士はフィッシング。ランチはハンバーガーと魚介のパスタ、冷えたビールだ。

「今日の夕食はクルーを交えて濟州島式 BBQ です。」

「濟州島式??? 魚介がてんこ盛りなんですね。楽しみです。ハングルはわからないな。」

「英語で問題ありません。全員が話しますから気にしないでください。」

韓国はどこでも誰でも気軽に英語を話す。仕事も旅行も困ったことがない。英語とハングルは発音と文法が酷似しているせいか、すぐに話せるようだ。

KIKI は仕事柄、英語、中国語、スペイン語、イタリア語、フランス語、ドイツ語を話すがハングルは話せない、読めない。博士は英語でいいよね。

KIKI の水上スキーはプロ並みだ。クルーも水上で回転する KIKI のパフォーマンスに舌を巻く。博士は茫然と見つめるだけ・・・。

「水上バイクで走るより、牽引されて海面を滑るほうがスリリングよ。」

KIKI のマリンスポーツ好きは兄たちの影響だ。

14時に帰港し、KIKI と MINU はスパへ。クルーは BBQ の準備に取り掛かる。

「KIKI さんには驚かされる。最初は外観の華やかさ。そして仕事。イメージを創り上げる仕事は実に興味深い。大型バイクを乗り回し、水上スキーも一流。人を夢中にさせる話術に翻弄され、兄たちのカッコ良さに驚愕。KIKI さんは非日常、非凡さで溢れている。誰もが夢中になるのも納得です。」

「そうですか? 財閥御曹司の才能溢れる3兄弟、女性の憧れでしかもゴシップの常連、独身貴族。常に被写体として注目される。まさにそちらが非日常で非凡だと思います。」

「MINUさま。近くに滞在しているSH製薬の代表が訪ねてられています。いかがですか？」

「サロンでお待ちいただいて。すぐに仕度を整えて行きます。」

「来客ですか？」

「急な訪問です。HDの取引先でもあるので顔を出してきます。KIKIさんは夕方までゆっくりしててください。」

「SHって？財閥？」

KIKIはスタッフに尋ねる

「そうです。SHグループにとって博士は絶対に必要だと言われています。一人娘のYUMIさんとの縁談が一時浮上しましたが、噂止まりです。かなり派手な女性らしくゴシップの常連なので、結婚となると財閥の令嬢とはいえ、御曹司はみんな引くそうです。」

「そうなんだ。博士とね。財閥って面倒ね。」

「いまはそんなことはありません。特にLEEさんのいるSGは、HDと両翼のグループですが恋愛や結婚は自由です。制約を嫌う女性は事実婚で、財閥のグループに属しません。わたしが知る限りでは、お相手の女性は著名なドクターや、メディアプロデューサーで外国人です。HDもSGの代表同様の考えです。」

「そう。」

「はい。事業のために閨閥を重んじる慣習は古いようです。グループもグローバル化しているので必要ないでしょう。相続に興味もなく相手の女性も一流の仕事、地位、名声を手に入れているということです。恋愛を始める前に終わる可能性もあるわけだ。まだまだ「漢江の奇跡」ってことね。」

「急用でこちらに？博士がこちらに来ていると聞きまして伺いました。先日のプレゼンテーションは素晴らしい、大評判です。」

「ありがとうございます。初めての登壇なので至らないことばかりでお恥ずかしいです。」

この人は本当にMINU博士なのか？うつむき加減でボソッと話す姿から、180度ひとが変わったみたいに自信で溢れている。

「是非うちを最優先にお願いしたい。」

「わたしはただの医者です。その件はSUHOに相談してください。」

「では、滞っているわたしの娘との縁談を進めさせてください。」

「わたしは、結婚するつもりはありません。代表から強制されることもありません。この時代に政略結婚などあり得ないと思います。」

「是非一度会ってみてください。」

「……。YUMIさんでしたっけ？彼女も自由恋愛タイプと聞いています。お互い不幸になると思います。それに恋人もいますので。」

「恋愛と結婚はまるで別です。一応進めるつもりですので、後日ご連絡させていただきます。事業の方は代表とお話しさせていただきます。こちらへはお一人で？」

「いえ、恋人同伴です。」

恋人って、博士は対人恐怖症じゃないのか？どこのオンナか調べないと。財閥の令嬢ならすぐにわかるのに博士の相手は聞いたことがない。

夕日が沈む頃、濟州島 BBQ の準備が整った。

「KIKI さん、行きましょう。仕度はできましたか？」

応答がない

「開けますよ。」

ソファに支度を終えた KIKI が眠っていた。ソウルからその足で濟州島に。

さすがに疲れたのか。自然に KIKI の頬に触る。

そっと顔の向きを変えて唇を重ねる。うっすらと目を開けた KIKI の腕が MINU の顔を引き寄せ熱く深いキス。

MINU は胸が熱く鼓動が高鳴る。この唇を離したくない。

KIKI が唇を離し、MINU の額にキス。

「うたた寝しちゃった。お姫様のように王子様のキスで目覚めました。さあ、行きましょう。」

もう、彼女に振り回されてばかりだ。

KIKI はレモンイエローのバレンシアガのシャツに白のひざ丈パンツ。オレンジのミュールだ。MINU はイッセイミヤケの真っ白なりネンブラウスとパンツ。2人の雰囲気はぴったりだ。2人がガーデンに降りる。食欲を誘う香りが漂っている。幸せだ。

「MINU 様と一緒にいる女性は、ここずっと SNS で素敵な男性と写っているよね。」

「恋人って感じしない？」

「素敵な2人だよ。MINU 様って久しぶりだけどすごくカッコいい。」

大型ビールサーバー、冷えたシャンパンに濟州島の魚介、新鮮野菜。

甘みのある潮風に育てられた韓国牛。自慢の豚肉が数種類の付けダレと山盛りのサンチュと並ぶ。

クーラーによって次々とビールが注がれ、食材が焼きあがる。サンチュに巻いて、タレをつけて頬張る。最高に美味しい！

スタッフとは英語で会話する。

「KIKI さんの水上バイクは見事です。」

「大型バイクの運転もカッコ良かった。」

「MINU 様と本当にお似合いです。」

MINU はうれしくて仕方がない。KIKI にぴったり寄り添いながらあれこれ世話をしている。

「本当に MINU 様は幸せそう。相当惚れてるな。」

「確かにこっちでは見ない豪快な女性だ。」

「日本人だって！チャイナタウンの資産家ファミリーらしい。」

「凄いイケメンと記事になっていたでしょ。」

などなどクーラーも興味津々だ。

「KIKI さん、夜風も冷たくなってきたので、部屋で飲みましょう。では片付けをお願いします。リビングに

食後酒の準備もよろしく。」

「はい。ありがとうございました。スタッフ一同感謝いたします。」

「濟州島式 BBQ はいかがでしたか？」

「とても美味しく楽しかった。」

KIKI はグラッパ、MINU はジンライム。大好きなロックフォールのブルーチーズに、チェダー、イチジクにナッツだ。

「いまの気持ちを話しても？」

「どうぞ」

「わたしは恋人宣言をして本当に幸せです。どこに行っても、わたしの元に帰ってくるって約束してください。」

「ソウルは拠点にはならないので、仕事が一段落したときにソウルに入るってことですね。これから博士も海外遠征が増えますよ、世界的な新薬ですから。そしたら海外で会えますね。いいかもしれない。幸い日本とソウルは近距離ですから。互いに少しずつ合わせていけばいいです。」

「KIKI さん、お願いですから、わたしだけを見てください。」

「それはわたしも同じことですよ、博士はこれからどんどん注目されますから。いよいよソウルに入れば海外雑誌の表紙撮影です。しばらくは話題の人ですよ。今日はさすがに疲れたので、バスタブにゆっくり入ってから休みます。おやすみなさい。」

KIKI は部屋に引き上げていった。

いきなり 2 人の距離は縮まないな。

ソウルに入り、15 時から LEE と DR.MINU の表紙打合せだ。

「KIKI、博士との濟州島バカンスはどうだった？」

「うん、楽しかった。SH グループの会長と打合せがあったみたいだけど。」

「娘と結婚させたいから必死だな。3 年前からくすぶっているらしい。」

「そうなんだ。そうそう、表紙のスタイリングはこれで。巻頭インタビューも同じでいいと思う。明日 10 時からでしょ。」

「このブラウスってエルメスのオーダー？」

「そう。2 パターンのデザインでカメラ写りのいい方にするつもり。」

「夕食は？疲労回復にウナギに行かない？」

「賛成。」

MINU は明日の取材内容に目を通す。ほぼ新薬のことについてだが、結婚観やファッションなどプライベートに関する項目もあった。

以前は取材を受けたり、表紙に登場するなんてあり得なかったのに、KIKI さんと出会ってから不思議と緊張しない。

これからはあの KIKI さんと恋人同士。オトコとしての自信に溢れそうだ。

MINU ゴシップを飾る

9時に KIKI はスタジオに入る。表紙の撮影のあとインタビューだ。記者は美しいアメリカ人女性だ。カメラマンは LEE の友人 OMEGA。最高の博士が誕生するだろう。

10時10分前に MINU がスタジオ入り。ヘアメイクとスタイリング。11時に表紙撮影スタート。MINU の視線の先が KIKI のポジションだ。さわやかな笑顔と、強く鋭い視線。研究者としての研ぎ澄まされた表情と、柔軟な発想としなやかさを感じる笑顔。両極端の魅力が切り撮られていく。さすが超一流の OMEGA だ。「KIKI、博士は魅力全開じゃない？オトコの野性味すら感じるよ。どうしたんだ？」「素敵よね。数週間前とは別人のよう。」

次はインタビューだ。新薬についての話題を終えて、最後の質問へ。「DR.MINU は独身と聞きました。これからはさまざまな女性からアプローチがあると思います。結婚観を教えてください。」MINU はうつむいて、しばらくしてから顔をあげた。素敵な笑顔だ。「人前に出るのが苦手だったわたしを解き放ってくれた女性に出会いました。登壇しているときも、こうして撮影やインタビューのときも、必ずわたしの視線の先にいてくれます。彼女と過ごす毎日は驚きと感動の連続です。このままずっと一緒にいられたらと願っています。」MINU は KIKI に視線を向けて答えた。

「忙しい博士とは相手も大変では？」
「超多忙な彼女とは年に4カ月程しか過ごせない。まさに世界を飛び回っている人です。でも自分のもとに彼女が帰ってきてくれるとわかっていればそれだけで十分です。」

「素敵な関係ですね。今日のスタイリングも彼女ですか？」
「はい、彼女は超一流のイメージメーカーですから。」
LEE はここまで博士を変えた KIKI マジックに脱帽だ。SH との結婚話が再浮上しないといいな。さすがにそれは KIKI のプライドが許さない。それにしても KIKI の相手が博士とは予想外だ。博士の片思いじゃないよな。

「KIKI、博士が言っている通り、恋人に発展したの？」
「うん。濟州島で交際を申し込まれたよ。」
「それで？」
「恋人同士よ。」
「そうなんだ。なんか意外だな。」
「そう？話せば話すほど好きになるタイプ。奥深い人よ。」

OMEGA が撮ったインタビューのカットは、うつむきながら笑う、そして顔をあげて視線の先の KIKI を見つめる、そんなやわらかい表情が素敵。上がりが楽しみだ。

無事に撮影が終わった。博士のエルメスは最高にかっこいい。LEE は記者に「最高に白いブラウスが似合うオトコ。」と必ず入れて欲しいと頼んだ。

「KIKI さん、いまからデートしましょう。ホテルに1時間後お迎えに行きます。先日のリゾートホテルまでドライブしましょう。1泊でいかがですか？」

「はい。では後程。」

KIKI はバイクでホテルに戻る。確かプールもあったから水着を持っていこう。

MINU は SUHO がよく利用する宝飾店へ向かう。

「HD の代表からの紹介できました弟の MINU です。女性にプレゼントしたいので相談にのってください。」
店員は慌てて支配人を呼ぶ。

「SUHO 代表の弟さんが来店です。」

「え??? SION 代表? すぐに行く。」

「いらっしゃいませ。本日は女性へのプレゼントをご希望とか……。リング、ブレスレット、ネックレス、ピアスとどのアイテムがよろしいですか？」

MINU は KIKI の写真を見せる。先日の ARAN 氏との2ショットだ。

「この女性です。ピアスはどうかかと。」

「素晴らしく素敵な女性で、日本の方ですね。洗練されていていらっしゃるので、エッジの効いた黒真珠のピアスはいかがでしょうかととてもいい品物が入っております。」

支配人が取り出したのは大きな黒真珠だ。一粒で余計な装飾がなく輝いている。

KIKI さんの瞳のようだ。

「これだけ大きい黒真珠の粒は希少です。写真の女性にお似合いです。」

「これを贈ることにします。」

真珠に合わせたブラックのジュエリーボックスにゴールドのリボンのラッピングだ。

「どうかお幸せに。」

MINU は女性に宝飾を贈るのは初めてだ。どうしても恋人になった記念に KIKI に何かを贈りたかった。

KIKI は支度をしてから急いでジルサンダーへ向かう。

「サイズ修正をお願いしたメンズのブラウスをラッピングしてください。そしてわたしのブラウスをお願いします。」

KIKI は MINU のサイズに修正したブラウスを贈るつもりだ。

そして自分用にレディースを買った。

185 cmの高身長で手脚が長い MINU はサイズ修正が必須だ。コットンツイルの真っ白いブラウスは光沢が美

しく、エアリー感が気持ちいい。きっと素晴らしく似合うはずだ。

いつか恋人ができれば、2人で着たいと思っていたジルサンダーのブラウスだ。

ホテルに戻って、こちらも先日用意した KIKI とお揃いのロエベのゲーメントケースに収納する。

2人でお揃いのゲーメントケースなんてかなり上級者カップル。喜んでくれるだろう。

ホテルのエントランスに、紺のマセラッティレバンテが停車している。MINU が助手席のドアを開ける。

「レバンテですか？SUV もありましたっけ？」

「いえ、最近納車されました。前はポルシェでしたから、今回は SUV で空間重視です。」

真っ白なセリーヌのブラウスに、ホットピンクのパンツ、フェラガモのシューズにサングラスだ。

KIKI は真っ赤なプラダのブラウスに白のサブリーナパンツ。赤のミュールにリュック、サングラスと全身プラダ。

どこから見てもモデルのようなカップルは、荷物を後部座席に入れて出発だ。

「途中で美味しいなり寿司を食べましょう。ホテルのスタッフの差し入れに包んでもらいます。」

2時間程でホテルに到着。快適なドライブだった。美味しいなり寿司を 100 個支配人に渡す。

「スタッフ皆さんで食べてください。」

「いつもありがとうございます。先日同様のお部屋を用意しました。夕食が決まりましたらご連絡くださいませ。ご用意します。」

バルコニーからの夕陽が美しい。

「KIKI さん、夕食のご希望は？」

「ガーデン BBQ はどうですか？先日は美味しく楽しくいただきましたから。」

「了解です。」

「それまでプールで泳いでからスパに行きます。」

「いま 16 時過ぎですので、夕食は 19 時にします。」

KIKI は水着にブラウスを羽織りプールへ。ゆっくり 300m ほど泳ぐ。カラダがほぐれたのでスパでマッサージだ。

MINU は KIKI の美しく泳ぐ姿に見惚れる、まるで人魚のようだ。

KIKI さんは何をしても、美しくカッコいい。

今日のピアスは大きい一粒ダイヤだ。黒真珠は気に入ってくれるだろうか。

19 時から総勢 20 名程の BBQ。海辺のリゾートだけあって海鮮が絶品だ。生ビール、シャンパンは冷え冷えでのどごしすっきり。

アルゼンチンのワインは濃いタレに付けた韓国牛にぴったりだ。

2 回目の訪問となれば、MINU の恋人で認知されている。

ホテルのスタッフが MINU の元へ。

「MINU 様、こちらに SH の代表がお見えでして、是非博士に挨拶がしたいとロビーでお待ちです。いかがいたしましょうか？」

「わかった。すぐに行く。KIKI さん、ちょっと来客に挨拶をします。」

「はい。」

ロビーには SH の代表が・・・。

「博士もこちらにいらしていると伺ってご挨拶に。」

「済州島のときもそうですがよく会いますね。事業の話はわたしではなく SUHO 代表をお願いします。」
するといきなり後ろから誰かが抱きついた。

「MINU さん、お久しぶり。わたしの婚約者でしょう？ YUMI です。」

「いきなり父親の前でお熱いな。本日は娘も同伴です。」

「その話はもう終わっていることです。」

「YUMI にどうしても博士と結婚したいとせがまれました。どうかもう一度お付き合いいただけませんか？」

「3年前もお付き合いしていませんし、いまは恋人がいますので。」

「結婚と恋愛は別よ。財閥同士は・・・。」

「いつの話ですか？ そんな時代遅れな話は HD グループには存在しないかと。」

「今日はとりあえず結婚宣言したから。」

「正式に SUHO の方からお断りをさせていただきます。それでは人を待たせているので失礼します。」

「パパ、MINU さんの恋人って誰？」

「日本人らしい。詳しいことはまだわかっていない。情報がまるでなくて・・・。ここ数カ月ソウルで仕事をしているらしく、SNS 上でたびたび記事が上がっているとか。」

「誰かわかったら教えてね。」

「お待たせしました。ここの海鮮もお気に召しましたか？」

「ここのタレは済州島とは違って辛さが際立っています。作る人によっていろいろな味が楽しめて最高。韓国料理恐るべしです。来客の方はもういいんですか？」

「挨拶だけですから。ここのタレも料理長に頼んでおきましょう。」

「タレのコレクターになれそう。」

海辺のリゾートは夜が静かだ。バルコニーに並んですわり食後酒を愉しむ。今日の2人はジンライムだ。

「ジンライムは濃い目の食事の後にぴったり。兄の JIN が教えてくれたんです。わたし以上に味覚が鋭い。」

「確か料理人とか・・・。」

「いまは経営の方が忙しいようですが、料理の腕は一級品です。帰国するたびにわたしの大好物を作ってくれます。今日はわたしから博士にプレゼントがあります。」

KIKI はゲーメントケースごと渡す。

「わたしにですか？ うれしいです。」

MINU はケースからブラウスを取り出す。

「世界で一番白いブラウスが似合う博士に贈ります。それもロエベのケースとともに、わたしとお揃いで。明日着てくださいね。」

「いますぐに着たい。」

MINU はブラウスを脱いで上半身露わに・・・。

肩から上腕、胸筋、腹筋と美しい筋肉に KIKI は顔が赤くなる。

服を着てはわからなかったけど、かなり鍛え上げられたボディだ。

「凄く肌触りがいい。似合いますか？」

「わたしの見立ては最高、スペシャルエディションです。」

「わたしからもあります。」

MINU はブラック×ゴールドのギフトボックスを KIKI に渡す。

KIKI が開けるとそこには輝く黒真珠のピアスが並んでいた。

「ブラックパールなんて珍しい。なんて美しい。吸い込まれそう。」

「KIKI さんの腫の色ですよ。」

KIKI はダイヤのピアスはずして、黒真珠を付けた。大きな粒が耳たぶから落ちそう。

「素敵。ありがとう。」

「本当に良く似合う。女性に宝飾を贈るのは初めてで、SUHO 行きつけの宝飾店に相談しました。KIKI さんの写真を見せたらこれを薦められました。」

「ハイセンスな支配人に感謝します。」

「明日から SION の撮影や番組出演で KIKI さんは忙しいようですね。わたしも 2、3 日は海外からの医薬品メーカーと会議が入ります。うちに来ませんか？帰る場所が同じ・・・予行演習です。」

「そうですね。いいかもしれません。」

寝室も一緒にしたい・・・。と思っても MINU は口に出せない。SION だったら迷わず抱きあげて寝室に連れて行くだろうな。わたしにはとてもできない。

「では明日。海辺を散歩しましょう。」

「おやすみなさい。」

KIKI は MINU を抱きしめる。

「キスは？」

MINU は顔を傾けながら KIKI の唇に触れる。これでいまは十分幸せだ。

博士とはゆっくり愛を育むのが心地よい。

ジルサンダーのブラウスを着た 2 人は、海辺でもホテルでも最高に目立つ。

MINU の美しい肉体が太陽の光で透けて浮き上がる。セクシーだ。

「午後にはソウルに到着します。SG に入りますか？」

「はい。まずは LEE と打合せです。」

「わたしは午後、病院で手術です。」

そう。博士は内視鏡手術でも一流の医師だと聞いた。まさにスーパードクターね。

「LEE、午後から SION 代表とのミーティングは一緒でしょ。14 時？」

「そうだよ。デジタルクローゼットの件だとか・・・。」

「了解。」

「そのブラウスはジルサンダー？いいね。」

「着やすいよ。いつもまとめ買いする。エルメス同様、コットンツイルはエアリー感がいいよね。」

「さっそく明日にでもチェックするよ。」

14時にLEEのレクサスでNEXT DOOR33階へ。

SION代表は、ロロピアーナのニットにギャルソンのカーゴパンツ、コンバースだ。SION代表はコンバースのハイカットがよく似合う。

「KIKIさん、お久しぶりです。明日から取材や記者会見、撮影と忙しいので、スタイリングの方をよろしくお願いします。」

「パーティ用も含め10着ほど用意します。あとでご自宅に伺いますので警備の方に連絡をお願いします。」

「デジタルクローゼットは、かなり手間取っています。気候によって最適なアイテムを選別するまでいなくて。いくらコーディネートデータがあってもそれを認識できないんです。まだまだです。」

「急いでいません。それにDR.MINUは毎日ファッションナブルです。じっくり開発してください。必ず世界仕様になりますから。」

「そう言っただけで助かります。セクレタリーの方は万全です。これを是非使ってみてください。天気、選曲、スケジュール管理など問題なく答えますから。いまダウンロードさせます。」

「ありがとうございます。これで大好きなBTSの曲をどこでもいつでも聴けます。」

「経済誌から3兄弟で3ショットの撮影と取材の依頼があります。そちらのスタイリングもお願いします。」

「HD3兄弟同時ですか？それは最高に華やかだ。うちでも特集組ませてもらいます。いまやファッションスタですから・・・。」

「花嫁さん募集みたいですね。」

「SION代表はやはりゴシップキングでないとつまらない。」

「LEEさんの後継者と言われてますよ、俺。」

KIKIはSION宅にバイクで向かう。警備を通り室内へ。ここは女性を入れないのか、気配がしない。聖域なのかしら・・・。

素敵なクローゼットだ。彼のファッションはもろにKIKIの好み。見ているだけで幸せだ。

撮影用のジャケット&パンツ、会見用のスーツ、プレゼンテーション用には、いまセレブの指名が高いストレッチの効いたプラダ。タキシードはジョニデ仕様のアルマーニ。

10セットを靴、アクセサリ全て揃える。

何を着てもカッコいいSION氏ではあるが、このスタイリングで、さらにファッションスタとしての地位を確立するだろう。

頭脳、財力、感性、そして容姿を兼ね備えた最高のオトコが出来上がる。この仕事の醍醐味だ。

「KIKIさん、お疲れ様。」

「SION代表。ビシッと決まるスタイリングをご用意しましたので。さらにカリスマ経営者として騒がれます。メディアからのオファーが絶えないですよ。」

「KIKIさんのおかげです。」

「SION代表のゴシップってかっこいいですよ。素敵な女性とのツーショットは最高にセクシーです。」

「KIKI さんとの2ショットならいいのに。」

「わたしは一般人ですから。しかも年上、勘弁してください。」

「MINU の表紙は明日だね。今日からポスターが貼り出されている。とにかくカッコいい。HD の広報は取材の申し込みで電話が鳴りやまないらしい。さすが KIKI さん。」

「もともとがいいからですよ。」

「MINU は完全に KIKI さんに惚れているね。プレゼンでわかったよ。」

「それはうれしいですね。」

「久しぶりにお鮨に行かない？」

「是非。」

SION のベントレーでお寿司を食べに行く。彼のエスコートはスマートだ。

クルマを降りてからシャッター攻撃が始まる。さすがカリスマ経営者、最高の被写体が女性連れだ。5分後には記事と写真がアップされるだろう。

「凄いシャッターだね。」

「ハングルはわからないので気になりませんよ。」

「そうだね。俺も慣れているから気にしないしね。」

カウンターに案内されると声をかけられた。

「SION さん、お久しぶり。彼女と？」

「YUMI か。デートか？」

「うん。MINU さん呼び出した。」

「MINU は来ないだろう。いい加減に落ち着け。」

「MINU さんとの結婚話を進めるつもりだから。」

「へえ、それは面白い。」

「じゃあね。」

「あのきれいな女性はどなた？」

「SH グループの娘 YUMI。3年くらい前に MINU と結婚話があったけど自然消滅。合うわけないよ。あいつ遊び人だもん。」

「MINU さんとあの女性が？想像つかない。」

「SH は MINU の研究者としての才能が欲しいから何とか縁戚関係になろうと必死なんだ。それに今回世界中から注目されているから古い話を掘り返したんだな。」

「財閥って面倒ね。」

「そんな時代じゃないって。HD は十分グローバルだから財閥の力を必要としない。もちろん俺もそうさ。」

「呼び出したって・・・。」

「あの MINU が来るわけないよ。」

SION 代表とは仕事の話で相当盛り上がる。

「俺たちって戦友、同士みたいだよね。」

「わたしの方が年上よ。だから先輩でしょ。」

「年齢や性別、国籍なんて関係ないよ。俺の世界はボーダレスだから。」

「わたしもボーダレスよ。」

「KIKIさんが惚れる相手ってどんなオトコなのかな。」

「タイプとしては長兄の ARAN みたいな人がいいな。」

「オトナ過ぎて俺にはわからない。」

SION 代表との食事は話題がてんこ盛りだ。

MINU とはゆったり時間が流れて癒される。常に神経を張り詰めている仕事のせいか、やはりプライベートはホッとできる相手がいい。

「KIKI さん、バーに行こう。」

SION は行きつけの会員制バーに KIKI を誘う。ソウルの繁華街にあり、店内はハイセンスな内装だ。客層は芸能関係や若い事業家が多い様だ。セレブ御用達といった感じか・・・。

SION の来店で店内がざわつく。やはりカリスマ、芸能人以上だ。先ほどの YUMI 氏もいる。MINU は来なかったのだろう。ここは彼におよそ似つかわしくない場所だ。

「ここにくるモデルや芸能関係の女性は結婚相手を物色するのが目的なんだ。御曹司や事業家が会員だからね。」

「SION 代表も狙われているね。」

「どうかな。いまここにいる人間は俺たちのことを噂しているよ。」

「ハングルはわからないので無視。」

「明日は俺との2ショットでゴシップ一面を飾りそうだ。」

「もう慣れた。」

「SUHO に LEE さんに、俺、それに KIKI さんの兄貴とも撮られているからね。」

「ゴシップってホントいい加減ね。明日は雑誌の表紙撮影と特集のインタビューね。場所は NEXT DOOR のスタジオで10時から。9時半に伺います。準備があるのでホテルまで送ってください。」

「バイクはホテルに運んだから。」

「ありがとう。」

やっぱり MINU さんの自宅というわけにいかないな。

翌日、広告効果もあってか MINU が表紙を飾った雑誌は売り切れ続出。増刷注文が殺到している。さっそくテレビ出演も組まれている。まさに1日で時の人だ。

KIKI はスタイリングの準備に追われている。テレビ、雑誌、webの取材だけで20本だ。すべての撮影現場に同行することになる。あと2週間はこの状態が続く。KIKI は超多忙だ。各メゾンに連絡をしてHD3兄弟3様のアイテムを揃える。すべて新品新作だ。

メゾンもまたとない宣伝チャンスなので協力は惜しまない。

ちょうど1週間経った頃、ソウル中にニュースが駆け巡る。一斉にメディアが報道する。

(HD グループ次男 DR.MINU と SH グループ長女 YUMI 氏、財閥同士の結婚間近！)

「KIKI、LEE。ニュース見た？」

「ハングルがわからないから見ないけど。」

「テレビつけてみて。凄いことになった。」

KIKI は MINU と令嬢のそれぞれの写真の映像で内容が理解できた。

「いつの間にかこうなったの？LEE は知ってた？」

「いや、知らない。HD はパニック状態じゃないかな。」

SUHO 代表は MINU 氏に確認をする。

「MINU、テレビつけろ。いつ婚約したんだ。結婚間近ってどういうことだ。」

「え????これは誤報だ。すぐに訂正して欲しい。」

「株価操作が疑われたらたまらない。すぐにこちらで対処する。もう一斉に報道されている。」

KIKI さんに連絡とらないと。誤解される。

KIKI は間違いであったとしてもソウルのゴシップにはさすがにうんざりだ。人を何だと思っているのか。もう大体の仕事はクリアしたので帰国準備に入る。

「LEE、あたしはやることすべてしたよね。あと1週間ほどの3人のスタイリングは完璧。悪いけどこれ以上ゴシップ大国は無理。バカにするのもいい加減にして欲しい。すぐにジュネーヴまでの便をお願いします。それからこの国内用の携帯は返却します。いまから電源はOFFに。連絡はこれまで。ギャラに関してはお任せしますが違約金を支払う必要はないと思っているので。むしろこっちが請求したいくらいよ。もうソウルでの仕事は引き受けないから。ここまで人を落とすなんて許さない。」

「KIKI 何かの誤解だよ。もう少し状況をみようよ。結婚なんてあり得ない。」

「誤報だとしても、もう嘘のネタにされてうんざり。SUHO 代表にはくれぐれもよろしくお伝えください。」

YUMI 氏のインタビュー内容が KIKI を完全に怒らせた。LEE の翻訳によると

「いろいろと恋人の存在を騒がれているかもしれませんが、結婚とは別です。

これからは2人で幸せになります。誰にも邪魔されることはありません。」

KIKI は MINU 氏より年上で、キャリアも認められ、世界で活躍する女性だ。その上育ちもいい。小国韓国の財閥、それも小娘にここまで言われたら、許せないだろう。

どんなに言い訳しても聞く耳は持たない。MINU 氏の恋愛はここで終止符だ。

「LEE さん、MINU です。KIKI さんは？連絡がつかません。ホテルもチェックアウトしたらしくて。誤報なのに。」

「帰国の準備に入っています。彼女との契約は今日で終了です。携帯も返却されました。」

「誤解をそのままにしたくない。」

「誤解というよりあそこまで報道されたら彼女なら無理でしょう。きちんとケリを付けなかったのだから仕方ありません。」

「日本に帰国ですか？」

「わかりません。」

KIKI はソウルから日本に帰国せず、今晚の便でジュネーヴに入る。すでにファーストクラスを押さえた。

「外野がうるさいから SG のホテルに避難させてね。電話は一切取り次がないで。」

「誤報だって MINU 氏から連絡あったけど。」

「誤報だとしても報道されたら終わりよ。空港に 17 時に入るからクルマをお願いします。長期間お世話になりました。ありがとう。」

「送っていくよ。」

KIKI は 19 時の便で仁川空港を飛び立った。もう二度とソウルに来ることはないだろう。

KIKI を探すことはたとえ HD でも不可能だ。LEE も出国した KIKI を追うことはできない。結婚報道は HD サイドの発表で誤報とされたが、結果を KIKI が知ることもない。

MINU は報道から、もう人前に出ることはなかった。

新薬に関してはすべて SUHO、プレゼンテーションの動画は SION によって発信された。

もちろん取材も全てシャットアウトだ。

KIKI との数か月は夢のようだった。もう 2 度と会えないのか・・・。

なんとか RON 氏に連絡が取れた。

「まるで KIKI さんと連絡が取れません。どうしたら許してくれるのか、どうか助けてください。お願いします。」

「わたしでも不可能です。誤解は当人同士でしか解決できません。他人が割って入ればかえってこじれるでしょう。KIKI が納得するまで待つしかありません。あれだけの女性とはそう簡単につき合えない。それだけ強情でプライドも高い。ゴシップネタにされるなんて絶対にプライドが許さない。KIKI があなたを深く愛していればそのうち吹っ切れるでしょうがわたしにはわかりません。」

「許してもらえるか自信はありません。」

「まだ帰国していません。どこの国にいるかはわたしでもわかりません。」

RON は博士が気の毒だった。ゴシップの相手は三流でしかも誤報とは・・・。以前結婚話が浮上したとはいえきちんと解決しなかったのが悪い。かえってこの段階でよかったかもしれない。KIKI が彼の元に戻る確率はかなり低い気がする。

ソウルでゴシップのネタにされるなんて絶対に彼女は許さないだろう。

「SUHO、KIKI さんに誤解されたまま会えなくなった。どうしたらいい？」

「わたしにも彼女を探すことはできない。LEE 氏もわからないんだ。もちろん報酬は満額振り込んだが振込先は LEE 氏の会社だし。RON 氏が待つしかないというならそうなんだろう。SH とは契約することはない。何を考えているのか。あのとききちんと解決しなかったのが悔やまれる。」

「解決しても同じことをするよ。」

KIKI はジュネーヴで横浜のホテルと外国人向けの住宅リニューアルの打合せに、RON の友人の設計事務所を訪ねた。

「外国人が長期滞在できるホテルと、外国人向けマンションの設計をお願いしたいの。期間はお任せします。資料はこちらに。イメージデザインができれば連絡ください。多分その頃はオーストリアで仕事をして

いるので、ジュネーヴまですぐに飛んできます。」

「任せてください。日本にない唯一無二の建物を作るから。」

「それで話題になれば最高ね。期待しています。」

「ジュネーヴにはいつまで？」

「バーゼルの友人に会ってから、バリーで父と兄にシューズ、シャネルで母と義姉にスノーブーツとスニーカーを買ってから帰国します。こっちでしか手に入らないから。」

ソウルを出国してから10日後、KIKIは帰国した。

KIKI 日本の休暇

帰国してから次の仕事まで1カ月の休暇だ。

「ARAN、湯河原で釣りしない？」

「横浜の方が美味しいだろ。」

「だから、料理人も一緒に・・・。」

「JINか。聞いてみる。エスカレードも買ったしな。」

KIKIの頼みとあらば、兄貴は万障繰り合わせで従う。

翌日、エスカレードに1週間分の荷物を積んで出発だ。

「1週間で気持ちが癒されればいいけど、今回はいろいろとあったみたいだぞ。」

「うちの姫様に？なにが？」

「恋愛物語らしい。RONの話だと・・・。」

「失恋はあり得ないだろう。」

「ゴシップネタにされたとか？」

「ソウルで？いつものことだろう。」

「うーん。詳しくはわからない。」

「では最高に美味しい料理でご機嫌を直してもらいますかね。」

「次はどこ？」

「ウイーンとか。」

湯河原の別荘には3人のスタッフが常駐している。

「ねえ、JIN。別荘のあたりは道が狭いからこのクルマ不便じゃない？」

「YAMAHAの中型バイク2台とレクサスのSUVがある。」

「YAMAHA？どしたの？」

「買った。エスカレードは向かないから。」

「ふーん。さすがJIN。」

「KIKIのおかげでARANがソウルで儲けたから、ARANの資金です。」

「ARAN、HDの株は絶好調？」

「博士にNEXT DOORとSUHO代表は超多忙らしい。」

「博士とはどうした？」

「別に・・・。どうもしない。」

湯河原には昼に到着。スタッフが迎えてくれる。

庭も室内もプールも全て完璧に掃除されている。

「お疲れ様でした。本日の食材は用意してあります。クルーザーにはクルーが待機しています。ランチは船上でいかがですか？」

「そうします。着替えてすぐに行こう。水上バイクも積んでね。」

「1週間ほど滞在します。というかKIKIが納得するまでかな。」

「ARAN 様、JIN 様のお仕事は？」

「姫様最優先。仕事はこっちでもできるし。書斎の掃除をお願いします。」

「かしこまりました。」

KIKI、ARAN、JIN はクルーザーに乗船。ポイントまでしばし海を眺めながらサンドイッチとビールでランチだ。

「ARAN、恋人なら ARAN みたいな人がいいって言ったでしょ。いたんだよねー。仕草も笑顔も声もスタイルまで似てるんだ。穏やかで癒される空気が好きだった。3 歳ほど年下みたいだけどね。恋人になってくださいと言われて 2 週間しないうちに終わった。」

「原因は？」

「ソウル中の笑いものにされた。財閥の令嬢との結婚説が浮上してニュースになった。」

「結婚するの？その令嬢と・・・。」

「さあね。もうソウルのニュースは聞こえないからわからない。」

「DR.MINU なら相手方が流したデマだろう。博士と縁戚になれば相当の利益が見込めるし。HD は得にもならない結婚なんて興味ないだろうし、訂正しているはずだ。」

「なんでわかるの？」

「わたしだったらそうするから・・・。株価操作も疑われるし、早々に訂正したはずだ。」

「発表されたその日に、ソウルの契約を終えてジュネーヴにはいったからわからない。」

「KIKI に本気だったとしたら、あまりにも博士が気の毒だな。連絡は？」

「ソウルの国内電話は返したし、連絡方法はないもん。LEE だっていまは無理だし。ソウルはうんざりって思ったから。」

「確かにネタにされたらプライドが許さないな。ソウル脱出は最善策だ。」

「そうでしょ。」

「嫌いになったならともかく、そうでなければ博士に連絡するのは当然な気がする。離れる理由はないだろう？」

「うーん。でもソウルにいまは入りたくないし。」

「他の国で会えばいいよ。もちろん日本でもいいし。ともかく LEE 氏にソウルの状況を聞いてみれば？」

「どうしようかな。このままフェードアウトもいいかな。」

「自分で決めろ。」

すると背後から JIN が声をかける。

「ARAN に賛成だな。別れるにしろ、彼の弁解はきちんと聞くべきだと思うよ。恋人なんだから。LEE 氏に連絡するより博士が先だな。」

「JIN までそう思う？博士の味方なの？」

「KIKI が引きずっているからそうアドバイスしただけさ。」

釣果が望めない KIKI と JIN は水上バイク。ARAN はクルーとポイントを移動して釣りに真剣だ。

日が傾きかけた頃に別荘に戻る。KIKI は夕陽を眺めながら展望風呂だ。

夕食はスタッフやクルーとガーデン BBQ。濟州島が懐かしい。

新鮮な魚介に、葉山牛。三浦半島の野菜が次々と鉄板に。

冷えた生ビールがサーバーから注がれる。

「そう言えばソウルでも BBQ だったな。だいぶ昔のことみたい。」

「近いうちに連絡したら？ どう見ても嫌いじゃないんだから、というか惚れてるんじゃない？ かなり珍しい展開ではあるけれど。」

「うーん。弁解の余地はあるよね、というか彼も別れたつもりで、気持ち的に終わっているかも。」

「それはないな。」

「どうして？」

「博士にとって KIKI はかなり衝撃的で強烈なキャラクターだったから、のめり込むことはあっても冷めることはあり得ない。同じオトコとして、そして KIKI をよく知る身内だからわかるんだ。どっちにしろ連絡はとるべきだと思う。いまの状態じゃ敵前逃亡だぞ。それこそ KIKI らしくない。」

「うーん。気が向いたら連絡してみる。」

KIKI は久しぶりにたつぷりとお酒を飲んだせいかほろ酔い気分……。JIN に部屋まで抱えられてベッドに入る。

「ゆっくり休んで。明日は市場につき合ってね。食材を調達するから。」

「うん。おやすみなさい。」

「いい夢を。」

電話が鳴った。

「KIKI、RON。湯河原だって？ 週末そっちに行くよ。ソウルのゴシップは SUHO 代表によって速攻で訂正されて、SH の謝罪記事も掲載された。」

KIKI が怒るのは無理もない。怒りが治まったら博士に連絡してあげたら？ 人前にまるで出なくなって、取材や撮影も拒否しているらしい。メディアは相当困っていると SUHO 代表が嘆いていたよ。」

「関係ないよ。もうソウルはいいって。」

「博士のこと好きなんだろう？ 誤解で終わったらさすがに気の毒過ぎる。せめて謝罪は受けないと。」

「ARAN、JIN にも言われたのに RON までソウルの味方なの？」

「KIKI の怒りは十分わかるけど、このまま消滅するのは KIKI らしくないよ、中途半端で。」

「機嫌が直ったらかけてみる。」

「そうすべきだよ。すぐにとは言わないけれど。」

「うん。待っているね。」

SUHO の社用車が MINU の研究室兼自宅の敷地内に入る。

「在宅か？」

「はい。わたしもはここ数日顔を拝見していません。プライベートエリアから出てきません。」

SUHO は自宅へ向かう。

「MINU 入るぞ。」

「SUHO か。」

「食事の支度にスタッフを呼んだ。酒でも飲もう。」

「ああ。」

SUHO に続いて調理スタッフがキッチンに入る。

「キムチの煮込み、参鶏湯、チヂミあたりで一杯やるぞ。」

SUHO は食前酒にシャンパンの栓を抜いた。

「KIKI さんの行方はわからない。LEE 氏がなんとか KIKI さんに連絡しようと手を尽くしてくれているから。」

「どうして弁明させてくれないのかな、KIKI さんは。」

「ゴシップネタにされたこと自体がプライドをズタズタにしたのでは？KIKI さんだから許せないんだよ。」

「だって誤報なのに・・・なんで？」

「少し前に LEE 氏から聞いた話がある。これを聞けば KIKI さんのことがわかるかも。」

SUHO は以前 LEE から聞いた北京からの仕事について話した。

北京から第3国の仕事を依頼されて、家族が脅迫されたこと。

家族のことを考え、単身北京に乗り込み第3国の指導者の採寸、仕事をこなしたこと。

ヨーロッパのメゾンにオーダーし、サンプルを再度北京に持って試着に立ち会う。

先方はたいそう気に入ったらしく、10年以上イメージメーカーとして、各メゾンとともに継続していること。

「だから一流メゾンは、彼女に一目を置いて最優先に仕事を受けるんだ。わたしでも北京の仕事は怖くてとても受けられない。北京からの条件は不明だが、彼女が断ることはできなかつたんだと思う。もし、気に入られなかつたらという恐怖もあつただろう。日本に帰れないかもしれない。それをやり通し、しかも気に入られ継続する彼女って底知れない強さがある。そして相当のプライドの持ち主だ。今回のように誤解であつたとしても、ゴシップネタにされたこと自体、彼女は許せないんだろう。」

「そんなことが10年も前にあつたなんて。」

「この話も LEE 氏がメゾンの代表から聞いた話だが、業界ではかなり有名らしい。報酬として日本国内に所有する莫大な不動産を KIKI さん名義にしたとか・・・。敵わないよな。」

「そんな・・・KIKI さんは高嶺の花なんてレベルじゃない。」

「だから彼女が吹っ切れるまで待つしかないってことだ。」

「もう彼女しか考えられないんだ。」

「強烈な初恋だな。結婚話をそのままにしたわたしにも責任がある。何とか連絡を取れるように最善を尽くすよ。」

湯河原では連日 KIKI と JIN はクルーザーで海に繰り出し、ARAN は書斎で仕事だ。

今朝は市場に買い出し。レクサスで市場に向かう。魚介、精肉、野菜、調味料と何でも揃う。

「獲れたてのイセエビにアオリイカ、カワハギも絶品だよ。それにアワビも。」

「JIN、カワハギとアワビの肝が食べたい。イセエビはお刺身がいい。」

「了解。」

「八宝菜も食べたい。あと魚介スープもね。」

「さすがどんなことがあつても食欲は衰えないな。」

「オーストリアは食事が期待できない。」

「フレンチもどきを堪能できるだろ？」

「うーん。地中海エリアの国は美味しいけれど、ウイーンは中途半端だからな。全体的に素材がいまひとつ。スイーツは美味しい。」

「こっちでたっぷり食べて。昼にはRONが到着だって。」

「久しぶりに揃うね。」

「父さんが嫉妬するな。」

「ARANは仕事？」

「RONか。お疲れ様。バイク？クルマ？」

「電車。事故で当分通行止めと聞いたから。電車にしたら速いね。何十年ぶりに日本の電車に乗ったよ。」

KIKIは？」

「JINと市場に買い出しに行ったよ。」

「ご機嫌は？」

「さあ、どうかな？よく遊んでよく食べているよ。ソウルの話はしないな。」

「連絡とったみたい？」

「いや、まだ怒りが治まっていないのかも。」

「だろうな。SUHO代表から泣きつかれている。」

「本人次第だな。一番の強者だ。」

「KIKIが戻ったら水上バイク乗りに行くよ。」

「了解。」

「RONだ。クルマもバイクもなかったけど。」

「事故で通行止めだから電車で来たよ。」

「へえ・・・」

「明日とか言ったらまたへそ曲げるだろ。」

「確かに。帰りはエスカレードで。」

「水上バイクに乗ろう。」

「ランチはJINがペスカトーレだって。」

「最高だな。」

船上では水上バイクに疲れたKIKIとRON、釣り三昧のJINとクルーがランチタイム。

「KIKI、ソウルはどうしたの？」

「早めに仕事を切り上げて脱出した。」

「そうなんだ。」

「ゴシップは即日訂正されて終わったみたいだよ。」

「ネタにされたことが許せなかったの。」

「そりゃそうだ。兄貴として遺憾だ。しかしそれと恋は関係ないでしょ。」

「何したってゴシップネタになるからソウルは嫌い。」

「公認の仲だって年中、不仲や別れと騒がれるし、順調な結婚生活だって別居や離婚って……。ハリウッド並みだよ。でもソウルのゴシップなんて外国人からすれば大したことないって。堂々としていればいいし、言語がわからないからいいじゃん。英語だったらむかつくけど。連絡してみたら？」

「もう兄貴3人に連絡しろって言われる。」

「あのまじめな博士が気の毒で。KIKIが相手じゃ敵うわけないし。」

「そうかな。今晚でも連絡してみようかな。」

夕食はJINが作るご馳走だ。JINの食センスは父親譲りだ。

「八宝菜はダディの方が上だね。」

「キャリアが違うよ。親父にはかなわない。」

「さすがJINだよな。本当に何作っても最高。」

「味覚上級者の皆様にお褒めいただき光栄です。」

日付が変わる頃KIKIは自室へ。

こんなに美味しい料理とはあと少しでお別れ。ウーンって何が美味しかったっけ。

憂鬱だな。ソウルは何食べても美味しかったのに。

MINU氏のこだわり鉄板焼きは良かったな。

KIKIは携帯からDR MINUの番号にかける。夜遅いので3回コールで切ろう。

きっと発信者不明で無視される。

「はい。」

「あの……」

「KIKIさんですね。KIKIさんでしょ。」

「はい。そうです。」

「連絡くれてありがとう。それだけで十分です。どうやっても連絡が取れなくて。謝りたいのにできなくて。声が聞けて夢みたいだ。」

「遅くまで仕事ですか？」

「いつかかってきても出られるように電話を肌身離さず携帯しています。いまどちらに？」

「日本です。別荘で兄たちと休暇を楽しんでいます。3人の兄に博士の話を聞くようにと言われたので連絡しました。」

「誤解は言い訳になりませんね。3年前にきちんと終結させなかったことが罪でした。恥ずかしいです。大切な人をゴシップのネタにするなんて許されません。ただ直接謝りたかった。言い訳するつもりはありません。本当に申し訳ありませんでした。」

「もういいです。この話は終わりにしましょう。以前の博士に戻ってください。取材もきちんと受けてくださいね。人見知り卒業しましょう。それだけが気になります。」

「KIKIさんがいなければ戻っても意味ありませんから。」

「ともかく今回の件はもう気にしないでください。それでは。」

「これがKIKIさんの番号ですか？連絡しても？」

「また海外出張です。」

KIKIは電話を切った。

別れなんてどうってことない。会わないうちに心も自然に離れていって終わる。

「おはよう。明日横浜に戻る。今日は水上スキーだ。そうそう昨夜博士に連絡したから。」

「で？」

「ゴシップの件はもう気にしないでくださいと言ったから。それだけ。」

「博士は？」

「謝ってた。」

「別れたの？」

「なんかつき合ってた記憶も薄れた。ついこの間のことだから。やっぱり冷めてんのかな、あたしって。そばにいれば恋しいけど離れるとどうなんだろうって。」

「会いたくなったらでいいんじゃないか。」

「うん。」

MINUは眠れなかった。KIKIさんと恋人同士ではなかったのか。謝るだけで精一杯、なんの約束もできない。たとえ彼女が別れたと言ってもわたしは愛し続ける自信はある。

時間と記憶を共有するのが恋愛だと彼女は言った。わたしの元に帰ってきてくれる彼女は、もう夢でしかないのか。

KIKIは、オーストリアに入る準備だ。

まだホテルやマンションは解体作業中だ。ARANに任せておけば間違いない。

今度のウィーンは貴族社会がまだ色濃く残っている。当然KIKIの需要は高い。連日バザーや寄付を募るチャリティ、オークションが開催される。出席者はそれなりのファッションが要求されるのでKIKIのようなイメージメーカーが重要なのだ。見た目と肩書がすべての社会だ。もちろんKIKIは一部の元貴族のファミリーのみの依頼を受ける。そうやたら引き受けては彼女の価値が下がる、メジャーに生きていないから。

空港には秘書が運転するメルセデスのリムジンが待機。荷物は自分で運ぶ必要はない。

ウィーンの郊外にある、まるで宮殿のような屋敷が拠点となる。

「お部屋とスタッフ2名、携帯電話他、電子機器そして大型バイクを用意しました。クルマ移動は運転手にお任せください。各メゾンは屋敷の方に来る予定です。」

「ありがとうございます。」

数日毎に開催されるパーティ、国賓との会食用、ランチに晚餐会に茶会用。ゴルフウェア、取材用の各アイテムと普段の軽めのファッションの刷新だ。2か月の契約だ。

KIKIはヨーロッパの貴族階級の仕事が好きだ。彼らには持って生まれた資質のおかげで、オートクチュールを着倒すパワーがある。

サンローラン、ディオール、シャネル、ジパンシーからエスメス、アルマーニ、プラダ、ロロピアーナとな

んでもエレガントに着こなす。かといって王室のようにお姫様デザインでないところがいい。最新ファッションを着こなすミューズであることが重要なのだ。

毎日一流に囲まれる仕事は KIKI にさまざまな感性をインプットしてくれる。少々堅苦しい環境ではあるが絶対にはずせない仕事だ。ここではドイツ語が公用語になる。

海外に赴任するとその国専用の携帯を確保する。その番号を知る人は少ない。もちろん DR.MINU に知る術はない。

滞在途中で 2 回ほどジュネーヴに設計の打合せに出かける予定だ。気分転換とショッピングにちょうどいい。

KIKI の顧客であるレディマリザは公爵家の血筋で、ヨーロッパでもハイソサエティの憧れだ。恋の噂も絶えない気品漂う女性だ。

「KIKI、最近恋してる？」

「終わりそうです。」

「嫌いになったのなら次の相手を見つけるまでよ。」

「いえ、ソウルでゴシップネタにされたことで深く傷つきました。許せないほど・・・。」

「それで彼を嫌いになったの？浮気？心変わり？」

「いえ、ゴシップは誤報で即日訂正されました。彼に怒りはありません、ただネタにされたことが許せなくて。わたしも記事が出たその日に姿を消しました。しばらくして兄から言われて、彼に電話をかけてみたけど好きとは言えなかった。」

「そうなの。恋愛にプライドは必要ないわよ。彼との素晴らしい関係で、たった一つの誤解なら許すべきでしょ。彼の KIKI への想いは聞いたの？」

「言い訳も一切しませんでした。ただ許して欲しいとだけ・・・。」

「彼の KIKI への想いが心に届いたなら、あなたからまた恋をはじめればいいんじゃないかしら。プライドなんてくだらない意地よ。嫌いになったなら仕方ないけど。」

さすが一流の恋多き女性だ。彼女の前ではプライドで恋が終わるなんて考えられないのだろう。凄い説得力だ。

「いまさら、恋人同士に戻りましょう、なんて言えないかも。」

「え??? またプライド? 好きなら言えるでしょ。彼がそこまで KIKI を愛しているのに逃げるなんて卑怯よ。思い切って彼を抱きしめてやっぱり愛してるって、それで十分よ。」

KIKI はどうすればいいかわからない。経験がないのでどこでどうやっていつ抱きつけばいいか見当もつかない。

「ARAN、ウイーンの仕事に目途が付いたらジュネーヴに入る、1 週間後。チケットは手配したから、そっちでいつものホテル押さえてくれる? スイスバンクの頭取にアポをお願い。ついでに口座でも作ろうかな。」

「十分に条件は満たしている、うちのファミリーでも KIKI がダントツだ。」

KIKI が来週ジュネーヴ入りか・・・。博士に機会を作るべきか・・・。

ジュネーヴで再会というのもいいかもしれない。それで終わるか始まるかは2人が決めることだ。

「ARAN です。博士のおかげでこちらの運用は好調です。KIKI をお探しですか？」

「お久しぶりです。どうやら探しても見つかることは難しいようです。」

「もう諦めましたか？」

「とんでもない。このままにはできません。もう一度きちんと謝罪するチャンスが欲しい。それで関係を修復できないなら諦めます。まともに話もできていないんです。相当プライドをズタズタにしてしまったので。」

「KIKI が博士を好きならそのうち吹っ切れるでしょう。来週ジュネーヴに入ります。ホテルはわたしが押さえました。会いに行きますか？最後のチャンスかもしれません。」

「ありがとうございます。たとえ無視されてもこのまま諦めるよりずっといい。」

「健闘を祈ります。」

KIKI は博士に惚れている。多分丸く収まるとは思うが……。ダメだったとしたら縁が薄かったってことだ。

KIKI はウイーンの仕事からジュネーヴ入りだ。

「KIKI、たかがプライドとやらで、素敵な恋を逃したら悔いが残るわよ。経験豊富な私が言うんだから間違いないわ。会って、抱きしめて、愛してるってそれだけでいいのよ。」

「はい。ジュネーヴからソウルもいいかなって思えてきました。」

「どっちにしても結果は教えてね。うまくいったら2人をウイーンに招待するわ。」

「それではマダム、またお会いしましょう。」

「KIKI、今回も素晴らしい仕事をありがとう。まだハイソサエティで存在価値がありそうよ、あなたのおかげでね。」

「マダムの気品は、天性に加え、数々の恋愛で磨かれた賜物ですから。ファッションは付加価値でしかありません。いつまでも美しく世界中の紳士を魅了してください。」

MINU は仕事を早々に切り上げて、KIKI のジュネーヴ入りの翌日に出発だ。

「SUHO、ジュネーヴに行く。帰国は未定だから。連絡するよ。」

「どうしたんだ？」

「仕事より何より大切なコト。」

「え????」

「KIKI さんを捕まえる。今日ジュネーヴ入りだって。ホテルもわかってる。ARAN 氏から連絡をもらった。ダメでもとにかく会って気持ちを伝えないと一生悔やまれるから。」

「MINU が？信じられない。相当 KIKI さんに惚れたんだな。恋人関係は無理なんじゃないか？ダメだったら仕事に集中して欲しい。うまくいったら彼女をソウルに連れて来い。」

「連絡するよ。」

MINU は当面の支度をして翌日出国だ。

撃沈しそうだけど、それは仕方ない。高嶺の花に惚れたんだからすっぱり諦めるだろう。仮にうまくいったとしても遠距離恋愛は難しいか、わたしは好都合だけど。

「SION か？MINU が行動に出たぞ。KIKI さんを追ってジュネーヴだって。まるで追っかけだな。結果はどうであれこれですっきりするはずだ。」

「へえ、勇気あるね。いまの状況だと振られる確率が高い。付き合ってもいないんでしょ？無謀だな。」

「思い込みって凄いな。」

SUHO と SION は最近恋人同士になったことを知らない。あまりにも短かったのも、誰も気づかないうちに、結婚スクープが流れて離れ離れになったからだ。MINU の勝手な片思いだと信じている。

抱きしめて、愛してる

空港からタクシーでホテルに。まずはジュネーブでウインドウショッピング。ここは一流ブランドから新鋭のデザイナーまで、あらゆるファッションが揃う。数日はショッピングとグルメでウイーンの疲れを癒し、リフレッシュだ。

定宿のドアマンに迎えられ、いつもの部屋に。支配人の話では先日 RON と SION 氏が宿泊したらしい。ウイーンほど空気が重くなく、ジュネーブは花々が美しい。

KIKI の携帯が鳴った。

「KIKI、ロジャーだよ。ジュネーブに到着したでしょ？ディナー一緒にね。」

「レースは？ちょうど夕食のお相手を探そうかと思っていたの。ありがとう。」

「その前にテストドライブするからコースにつき合っ。」

「了解。」

「15時にホテルに迎えに行くよ。」

ロジャーは一流の F1 レーサー、RON の友達だ。モナコやジュネーブに家があるので KIKI とも交流がある。ブラッドピットによく似た甘いマスクで、女優やモデルからのアプローチが凄い。さっそく洋服を買いに行く。

ジュネーブは、シャネルのカジュアルアイテムが豊富だ。

なぜかハイソな仕事の後は、甘い女性らしいファッションが気になる。

ホワイトのジャケット&パンツ、レースを使ったピンクのシャツ、ロゴがかわいいサンダル。シャネルのロゴのピアス。ついでにキルトのリュックをゲット。スイートなデートスタイルで決める。世界で最も愛されるブランドと言われるだけあって、着ると甘い感触に包まれすごく気分が上がる。

今シーズン気になるセリーヌで、ディナー用のワンピースとパンツスーツを買ってホテルへ。シャワーを浴びてさっそくシャネルに着替える。サーキットは久しぶりだ。

ホテルのエントランスに漆黒のポルシェ 911 が。ロジャーだ。

周囲から一斉に注目される。クルマに合わせたのか全身ブラック。トムフォードのパンツスーツのようだ。

「KIKI、迎えに来たよ。サーキットに行こう。」

「相変わらず最高に素敵ね、ロジャー。この頃 911 に縁があるかも。」

「RON にも薦めたんだ。乗ってるでしょ？」

「うん、相変わらずポルシェラヴァーよ。」

やはりアジア人×ロジャーは珍しいのか、視線集中のなか、ロジャーは助手席のドアを開き KIKI を乗せた。30分程でサーキットに到着。車内では KIKI のファミリーの話だ。ロジャーは何度も KIKI の実家に長期滞在しているので、みんなをよく知っている。それがきっかけでチャイニーズは翠麗館でしか食べないと公言しているくらいだ。

契約しているメーカーの開発車を走らせ、データを蓄積し改良するために、ロジャーがテストドライブする。眺めの良い観客席から望遠鏡でロジャーの走りを見学する。

やはりレーサーは、神から与えられた天性の才の持ち主だ。寸分無駄なく最短コースを走りタイムを計測する。目にも止まらぬ速さとはこのことだ。爆音とともに風のように車体が通り過ぎる。視覚、聴覚、オイルの香りで嗅覚がしびれるように刺激されるセクシーな現場だ。

「KIKI、終わったから着替えてくる。ちょっと待っててね。」

ロジャーのドライビングスーツ姿は最高にかっこいい。

ロジャーを待つ30分程、サーキットの雰囲気を楽しむ。

「KIKI、何食べたい？」

「ジュネーヴのお勧めは？」

「ソーゼージとポテトに生ビール、ピヤホールがいい。」

「いいね。」

「最近気に入っているピヤホールがあるんだ。行こう。」

「世界有数のイケメンとならどこでも。」

街の中心にあるピヤホールは、中世の雰囲気をそのまま生かした城郭の一角にある。

レーシングチームのスタッフと合流し、楽しく美味しい時間を満喫した。ソウルのようにSNSやカメラを気にせず、ストレスがかからないのは久しぶりだった。

「KIKI、俺と真剣に付き合ってみない？5年は片思いなんだけど。RONに相談したらきちんと自分の気持ちを伝えろって言われた。いきなりだけど俺とのことを考えて欲しい。」

「うわー最高だね。世界一流のロジャーに交際を申し込まれたなんて、世界中に向けて叫びたい！冗談はそこまでよ。真剣になると夢から覚めるのが辛過ぎる。」

「改めて告白させてもらいます。」

店を出るといきなりカメラに囲まれる。

なに??ここはソウル?

「ロジャー、テストコースから一緒に彼女は恋人？」

「こちらの女性との関係は?モデルの女性とは終わったの？」

などなど、さすがFIドライバーでセレブのロジャーだ。ジュネーヴで記者に囲まれるなんて・・・。

「そうだよ。わたしの大切な女性。だから写真は勘弁ね。」

「アジア人なんて初めてね。」

うわー、テレビカメラ???せっかくのいい気分を邪魔しないでよ。

ほろ酔い気分のKIKIは、タクシーでホテルまで送ってもらい、部屋に入った途端ボタンキュー。久しぶりに解放されたようで気分がいい。ロジャーがなんか言っていた気がするけど、まあいいか。それに写真を撮られたような。

よく覚えていない・・・。

朝目覚めると脱ぎ捨てられた洋服とともにベッドの上に……。シャワーを浴びる。

久々騒いですっきりした。いろんな国に友達がいるのは幸せ。RONのおかげだな。

「朝食をお願いします。コーヒーはエスプレッソトリプルで。トマトジュースにオムレツとクロワッサンも。それと服をクリーニングに出します。」

今日は建築事務所でミーティングだ。外観イメージと、部屋の間取りの提案があるらしい。楽しみだ。

ソウルでは毎朝アップされるゴシップが騒がしかったが、いまではそれがない。ある意味、これもいい想い出なのかもしれない。

博士はどうしているかな？きちんと取材や撮影をこなしているか少し気がかりだ。

彼との心地いい空気感が懐かしい。話さなくてもただ同じ空間にいただけでほっとする。

ほんと ARAN に似ていたな。

どんな怒りも時間が立てば薄れていく。裏切りは決して忘れないが、博士はわたしを裏切ったわけではない。ゴシップの主人公にされてしまっただけ。若い令嬢と同じレベルに並べられたことでプライドはズタズタ、許せなかった。

マダムのように、また愛することを始められるのか。とりあえず怒りも収まったし、記事も訂正され謝罪もあったと聞いた。

ソウルに寄ってみようか。帰国前に LEE に連絡を取ろうか……。

気づけば博士のことばかり考えている……。2週間だけの恋人なのに。

今日はイタリア人の家具デザイナー、アレッサンドロから夕食のお誘いだ。今度のヴィラやホテルの家具をお願いするつもりだ。わたしらしくオリジナルのデザインが希望。

ファブリックデザイナーも紹介してくれるとのこと、楽しみだ。

やはりイタリア人は家具、ファブリックに関しては抜群のセンスだ。

「MINU、ジュネーヴに入ったら是非会って欲しい人がいるんだ。医薬品会社の CEO で会見場所は先方の会社だ。研究室でミーティングも希望している。3日間ほどどうかな。」

「まずは KIKI さんと会ってからにしたい。彼女と同じホテルをとった。撃沈したら移るつもり、それからでもいいかな。」

「ジュネーヴに入ってから連絡して欲しい。可能性は？」

「まず心から謝罪をして、きちんと説明させてもらってからだ。そしたらミーティングでも何でも言う通りにする。」

「うまく誤解が解けることを祈っているよ。」

「どうかな……。」

明日出国して、現地の昼頃にジュネーヴに到着する。そのままホテルに向かうつもりだ。

KIKI の横浜にあるヴィラは、港と海をイメージしたリゾート風の外観に、各部屋大きな窓にサンルーム。120 平米程の広さだ。

長期滞在向けでファミリーでも十分の広さを確保している。

外国人向けのホテルは低層で、各部屋が広く設計されている。庭園に十分な面積をとる予定。

ARAN 任せで売上を意識することなく、好きにできるのは幸運だ。

北京経由の仕事は、決して好ましくはないがこの報酬を考えると仕方ない。

「このヴィラに住もうかな。」

「それなら離れに1棟作ればいいよ。充分の広さを確保できるから。宿泊客を気にしなくていいしね。」

「わたし専用で・・・。」

「結婚したらそこに住めば？」

「実家も持て余す広さなのに、一人住まいは必要ない。それに結婚する予定もないし。」

「一応、提案してみるね。夕食はわたしも参加するよ。アレッサンドロの家具はいいよね。ファブリックはマリサだってね。彼女のセンスは抜群。じゃあ夕食でね。彼のオフィスに送っていくよ。」

「ありがとう。」

KIKI は彼のメルセデスで送ってもらう。ジュネーヴの中心はさほど広くないので、クリエイティブ関連のいろいろなオフィスが集中している。アレッサンドロのオフィスは16世紀の歴史的建造物だ。中庭が美しくまるで騎士でも出てきそうな雰囲気だ。

すでにイメージは伝えてあるおかげで、KIKI 好みの家具のデザイン画が並べられた。

「あら素敵。こんな家具だったらずっと住みたいよね。もしかしたら離れを造ってもらうかも、あたし専用で・・・。」

「KIKI スペシャルをデザインさせてもらうよ。」

「結婚する予定もないし必要ないか。」

「一人でもいいんじゃない？知人に貸してもいいし。楽しみだね。」

「そうだね。」

「夕食は美味しいイタリアンに行かない？トスカーナ料理でワインも多種多様。ハウスワインは絶品だし、KIKI は絶対に気に入るよ。RON が必ず行く店だよ。」

「RON が気に入っている店ならかなり美味しそうね。順調な打合せのおかげで明日はフリー、飲んで食べてジュネーヴを満喫します。」

昨晩はビール、今日はワインを堪能する。

いまさらながら、ロジャーの告白を鮮明に思い出した。ウキウキする。

トスカーナ料理は肉が中心だ。それだから赤ワインの味も種類も豊富。

アンティパスト・トスカーナは鶏レバーのパテ、羊のペコリーノチーズ、生ハムにサラミ。トマトソースに太麺のパスタ。牛すね肉の赤ワイン煮込みにフィレンツェ風ステーキ。

ワインはキャンティクラシコ、モンタルチーノが相性抜群。

店内はフィレンツェの雰囲気、イタリア語が飛び交い KIKI たちはもちろんイタリア語で会話。イタリア人であるアレッサンドロお薦めの店らしい。今晚も素敵な夜を満喫した。

「RON、KIKI。ジュネーヴは美味しいね。昨日はロジャーとビヤホール。彼に真剣にお付き合いしたいと告白された。一流からのアプローチって最高の気分。でもジェラシーで死にそうになるから無理だな。世界トップクラスのモテっぷりだからね。」

「まじめに KIKI に惚れているよ。あいつは年上でないと無理だから。かなり前から好きだったみたいだ

ぞ。」

「そうなんだ。酔っていたからあまり覚えていないけど……。ウイーンのマダムに誤解でプライドが傷ついたらで別れるなんて馬鹿らしいと言われた。そうかな。」

「ようするに KIKI が彼を好きか嫌いかってことだと思うけど。」

「そうだね。まだよくわからない。じゃあおやすみ。RON 行きつけのお店は最高に美味でした。SION 代表も連れて行ったでしょ。天才が来たってロジャーが教えてくれた。」

「SION 代表は業界関係なく有名人だったよ。」

「さあ、明日はゆっくりエステサロンでも行こう。じゃあね RON。」

朝 10 時にホテルのエステサロンに向かう。妙齢のお肌はお疲れ気味。リフレッシュだ。

MINU は無事ジュネーヴに到着。タクシーでホテルに向かう。重厚な歴史的建造物である老舗ホテルは団体観光客がいない落ち着いた風情だ。

ポーターに荷物をあずけフロントでチェックイン。

「MISS KIKI は在室ですか？DR.MINU といいます。」

「スパのご予約が入っています。あと 1 時間程でお戻りになるかと。伝言は？」

「いえ、また連絡します。」

「お荷物はお部屋にお運びします。キーです、どうぞゆっくり。」

「MINU です。KIKI さんですか？」

「KIKI です。いまジュネーヴです。」

「わたしもです。1 時間後ホテルのロビーにいますので会ってください。」

「え???? 仕事でこちらに？」

「第一の目的は KIKI さんです。」

「では 1 時間後……。」

なんで博士がジュネーヴに???? 準備しないと。セリーヌのセットアップを着よう。

急いで部屋に戻らないと……。

KIKI さんの声が聞けた。それだけでもここに来た意味がある。早く会いたい。

「KIKI 様、あの黙っていらっしゃるかと思ってんですが、ゴシップニュースの一面に KIKI 様とレーザーのロジャー氏が……。」

「え！」

「ビヤホールを出たところを写されたようです。」

タブロイド判の一面にロジャーが。KIKI はロジャーに抱かれて隠れているが、知っている人はすぐにわかる。サロンのスタッフがわかるんだから。

見出しは

「世界的レーザーロジャー、デート直撃！お相手はアジア人の大切な女性。」

うわー記念にもらっておこう。部屋にもあるよね。ロジャーが相手ならオンナ冥利に尽きる。みんなに自慢できる！いまやジュネーヴもパパラッチがいるのね。わたしみたいな一般人じゃ話題にならないのに。即 SNS のソウルに比べたら 1 日置いているのがヨーロッパらしいけど。

MINU は部屋に入るとコーヒーをオーダーする。ニューズペーパー 3 誌をめくる。英語とドイツ語だ。タブロイド判の一面に驚く。あの有名なレーサー、ロジャーの横にいるのは KIKI さんだ。顔は良く見えないけどシルエットは間違いない。ここでも注目されるなんて、それも大切な女性って・・・。SUHO や SION のレベルとは違う世界トップレベルの相手だ。彼女の仕事を考えたら十分にあり得ることだ。そろそろ時間、ロビーに向かう。

セリーヌのやわらかいシルエットの上下は白、パンツは 7 分丈。サンダル、エナメルのトートはオレンジ。香水は中東の調香師による KIKI スペシャル。ピアスは MINU 氏から贈られた黒真珠だ。

ロビーに降りると、ソファに座る後ろ姿を見つけた。博士だ。KIKI はそっと近寄って MINU をバックハグ！彼はすぐに首に回された KIKI の腕を握る。KIKI は振り返る MINU の唇にキスをした。MINU は驚きながらも KIKI に応えるように唇を重ねる。ヨーロッパでは誰も気にしない自然な光景だ。KIKI はそっと唇を離し、
「久しぶりですね。」
「いきなりでビックリしました。」
KIKI は MINU をぎゅっと抱きしめる。MINU は天にも昇る気分だ。
「許してください。2 週間だけの恋人なんて辛過ぎる。どうかチャンスをください。」
「わたしは MINU さんが好きです。もうあんなことはこりごり。今回は許してあげます。」
「良かった。元に戻れなくても、会って謝りたかった。」
「街を歩きますか？ランチはいかが？」

KIKI と MINU は街を歩く。ジュネーヴの中心街は美しい。白いコーデの KIKI に、真っ白なエルメスのブラウスにオレンジのパンツの MINU。ホワイト×オレンジで決めた長身のアジアカップルは目立つ。
「ウイーンのクライアントである元公爵夫人にアドバイスされたんです。プライドなんて恋愛には必要ないって。愛しているか、愛していないかだけが重要だって。時間の経過とともに怒りは収まるけど愛は消えない・・・。意地を張ってごめんなさい。」
「会ってくれただけで十分なのに、自分の気持ちを伝えたい。そして抱きしめたい、独占したい。本当に欲はキリがない。実はあれだけ傷つけたので諦めていました。でも終わるにしても直接会いたかったんです。ARAN 氏が教えてくれました。」
「ARAN だったんだ。うちの兄は全員、MINU さんの味方だったから。」
「ゴシップの一面、すごいですね。お相手は世界一流のレーサーだなんて。」
「RON の友人で昔からよく知っているの。」

「彼は KIKI さんが好きなのでは？」

「世界特級のモテオトコを恋人にしたらジェラシーで焦げちゃいます。恋愛は穏やかで癒されるのが理想です。」

「KIKI さん、お願いですからわたしだけを見てください。わたしは KIKI さんしか見えない。」

ランチはレマン湖に面した街並みを眺めながら、美味しいピッツェリアで。

窯で焼き上げるピザはイタリア仕込みだ。ハウスワインがイケる RON お薦めの店だ。

「RON さんは詳しいんですね、ジュネーヴの街に。わたしは SUHO の手配で 2 件のアポイントメントが入る予定です。それはまず KIKI さんと会ってから連絡するという事にしました。」

「もう DR.MINU は世界的ですね。モラ広場にはトップブランドが並んでいますので、明日時間があればショッピングしましょう。」

「世界クラスのスタイリストにお任せです。」

「滞在中にレマン湖のクルーズに行きましょう。この時期は湖面が美しく最高です。」

食事を終えた 2 人はモンブラン橋の南側に広がる旧市街へ。まさにヨーロッパの古都を彷彿させる街並みが美しい。

「まるで KIKI さんと新婚旅行に来たみたいですね。」

「ホテルに戻って仕事の調整をしてください。それから話を聞かせてもらいますから。」

2 人はホテルに戻りそれぞれの部屋に。ARAN の計らいで部屋は隣同士だ。2 人は別れることはないと思っ
てのことだろう。正解だ。

「SUHO、アポの方をよろしく頼む。KIKI さんには無事に会えた。」

「それは良かった。誤解は解けそうか？」

「これから誠心誠意尽くすつもり。」

「アポの詳細は後程連絡する。ところで MINU と KIKI さんってどんな関係なの？」

「あとでゆっくり話すよ。じゃあ。」

MINU はパソコンを開き、先日のプレゼンテーションの動画を確認、データを USB に入力。

2 時間ほどかけてミーティングの準備をする。

「KIKI さん、こちらは終わりました。そちらに伺います。」

「はい。どうぞ。」

隣の部屋をノックする。MINU の部屋同様にスイートルームだ。テーブルにはワインと KIKI 好みのアン
ティパストが用意されていた。

「久しぶりに 2 人でゆっくり飲みましょう。」

黄金色に輝くワインは、世界最古の名門が生んだ最上級のキュヴェ。上品な酸味の効いた果実味がエレガ
ントな白ワインだ。1 時間前からデキャンタに移され冷やされていた。

「KIKI 様のお好みでドイツワインにしました。お楽しみください。」

とソムリエからのメッセージが添えられている。さすが KIKI さんだ。

「どこの国でも KIKI さんの好みは知られていますね。自分の無知が恥ずかしいです。」

「いえ、RON のおかげです。ジュネーヴは仕事で訪れる回数も多いらしいです。」

キュヴェは、ブーケとミネラルの香りでのどをやわらかく刺激する。

「どうして許してくれたのですか？相当にお怒りだったようですが……。」

「自分が傷つく辛さより、別れる悲しみの方が大きいとわかったから……かな。」

「え??? 本当ですか？」

「博士が大好きだってことに気付いたから。博士はどうしてジュネーヴまで来たの？」

「嫌われても KIKI さんの顔を見て、自分の口から謝りたかったからです。あなたを探せずに途方に暮れていたとき、ARAN 氏から連絡がありました。ソウルでは誤報と発表し、すぐに訂正記事を掲載。先方の謝罪会見もありましたが、3年もうやむやにしていたのが原因です。先方とは2人で会ったこともないんですが話題だけが先行してしまって…。本当に KIKI さんには申し訳ないと反省しています。どうか許してください。お願いします。」

「下等な記事によって、同等な扱いを受けたようでズタズタになりました。ソウルのパパラッチ文化にも相当参っていたのも事実です。ともかくソウルから脱出たくて……。そして3か月経って改めて自分に問いかけたんです。あなたを好きか嫌いかって。」

KIKI は博士のカラダを抱き寄せて視線を合わせる。

「愛しています。MINU さんが大切です。」

MINU は KIKI をただ見つめることしかできない。

KIKI は MINU の頬を両手で包み込み唇にキス。

白ワインの瑞々しい味がする。KIKI は唇を離しながら

「だからもう2度とわたしを、低俗な晒しものにしないで欲しい。守ってください。」

と囁いた。MINU は

「誓います。KIKI さんを大切にします。だからわたしだけを見てください。」

「では仲直りですね。また始めましょう。」

何もかもが KIKI さんのペース。わたしはただ受け身だ。最初から翻弄されっ放しだな。

「明日はショッピングとライン川クルーズの予定ですから。ブランチは美味しいバケットがあるカフェに行きましょう。」

「はい。おやすみなさい。」

MINU は部屋に戻る。まだまだ KIKI さんとの発展はなさそうだ。

レディマリザのアドバイスに応えられるのは先になりそうだな。

やさしく、ゆっくり思いやる

KIKI とのランチデートからホテルに戻り、仕事をこなす MINU に一本の外線が入る。

「博士にウイーンのレディマリザから電話が入っていますのでお話しください。」

ホテルの支配人からだ。

ウイーンのレディマリザって？ 貴婦人の称号かな。

「はい。英語？ ドイツ語どちらで。」

「博士の得意な方で・・・。」

MINU はドイツ語に問題はないので相手の公用語で話すことにした。

「MINU です。初めまして。」

「KIKI のお相手ね。レディマリザよ。彼女のおかげでまだ社交界でも一目置かれる存在でいられるの。妹のようで今回はちょっと口出ししたくなかったの。無礼を許してね。」

「とんでもないです。夫人のアドバイスのおかげで許してもらえました。本当に感謝しかありません。」

「それは良かった。彼女は実績も実力もある分、それなりのプライドもあるからゴシップには耐えられなかったのは事実。これからは気をつけてあげてね。」

「はい。これ以上ない程猛省しています。あの、世界一流の貴夫人に教えていただきたいことがあります。恥を忍んでのことです。よろしいでしょうか？」

「もちろん、恋愛のことならわたしに相談するのが一番よ。」

MINU は SUHO や SION とは違って恋愛経験が少ない。女性に悦んでもらう行為そのものに自信がない。

KIKI さんに相手にされないのではないかと、幻滅されるのではないかと不安でいっぱいだ。

「愛の行為にルールや解説なんてないわよ。大切なのは女性を主役にする事。

抱きたいではなくて、抱いてあげたい。

感じたいではなくて、感じさせてあげたい

満足したいではなく、満足させてあげたい。

相手の感じ方を受けとめながら、やさしく、ゆっくり、思いやりをもって触れることが大切。自分のペースではなく相手に合わせるの。若さあふれる行為なんて自己満足に過ぎない、

オトナの女性は求めないのよ。愛は尽くすことだから・・・。KIKI を主役にする事よ。年齢や経験に関係なく、男性が女性をエスコートするようにね。」

さすが世界最上級の恋多き貴婦人だ。物理的思考の MINU にも理解できる。

「ありがとうございます。自信がないからとって引きたくないし、無謀にチャレンジして失望されたくもない。経験不足なだけにどうしたらいいかわからなかったんです。それにこういった話は男性より女性の方が適確かなと思ひまして無礼を許してください。」

「気になって KIKI の定宿に連絡したの。支配人も友人だし。良かったわ、お話しできて。帰国する前に、是非 KIKI とウイーンにトランジットしたらいいわよ。愛の経過も聞きたいし・・・。連絡お待ちしているわ。」

「ありがとうございます。」

MINU はウイーンから最上級のアドバイスを思い出した。

KIKI と MINU はカフェでランチの後、エルメスでブラウスをセミオーダー、そしてエルメスオレンジのパンツをお揃いで。

ジルサンダーでブラウスと紺のパンツ。アルマーニでスーツとジャケットをゲット。

バリーでシューズと旅行バッグ。どの国でもどの店舗でも KIKI は優遇される、底なしに魅力的な女性だ。サイズを調整してホテルに届けるように手配する。

ライン川クルーズは、川面の風が心地よく、ムード満点だ。

「この時期は川面に新緑が映えて一番好きなんだ。」

「KIKI さんとならどこへ行っても満喫できそうだ。」

「仕事ばかりじゃ潰れちゃう。うまく息抜きしながら楽しめるのも才能よ。」

「わたしはいままで研究、診察、オペの毎日でした。KIKI さんと出会ってから 180 度変わりました。まさか恋におちるなんて考えもしなかった。毎日苦しくて、うれしくて、輝いて、あなたのことばかり考える。連絡が取れなくなってからは何も手につかなかった。いまは夢のようです。」

「博士にとってわたしは貴重な存在かもね。」

「明日の午後チューリッヒに入り 3 日間、医薬品メーカーとのミーティングです。ソウルから現地にスタッフが 2 名入る予定です。こちらの部屋はそのまま、戻りましたら連絡します。」

「夕食の希望は？」

「お薦めで・・・。」

「ではソウルには珍しい鱒料理にしましょうか。フレンチ風の味付けで、川魚の淡白さが新しい味覚に変わります。ハウスワインが合いますね。」

「お任せします。楽しみだ。」

中心街にあるスイスのグルメ鱒料理のレストランは盛況だ。ここでも共通語はドイツ語。語尾がはっきりして力強い言語だ。

ライン川の鱒料理は確かに新しい発見だ。身離れが良く鱈と鮭の間のような・・・。

バターを効かせたコクのあるソースが絡み、濃い目のハウスワインとのマリージュが新鮮だ。

「川魚は敬遠されがちだけど、ここで食べるとすごく美味しく感じる。海の魚で慣れているせいかな新発見よね。」

「確かに自国では食べることがないだけに、ここではとっても美味しいです。」

「デザートのアイスクリュームは絶品よ。」

MINU は KIKI のおかげでいろいろなモノやコトを知る。

「KIKI さんはわたしといることでは何が得られるのかと不安になります。」

「癒しとやさしさ、そして愛されている幸せかな。一緒にいたいと思うし、帰る場所があなたであって欲しいと思うから。さてホテルに戻りましょう。明日はチューリッヒでしょう。支度もしないとね。」

「まだ早いので、わたしの部屋で軽くいかがかしら？」

KIKIはお気に入りをつらにフロントにオーダー。生ハムとレーズンバター、カマンベールチーズにジンライム。氷は球体がお決まりらしい。

どこにいてもまるで自宅のように自然に振る舞う姿に惚れ惚れする。

グラスに泳ぐ氷の響きが心地よい。

KIKIの携帯が鳴る

「ロジャー、どうしたの？」

「明日モナコに行こう。ジェットが飛ぶから。レース前のパーティにエスコートしたい。」

「グランプリね。観戦に行こうかな。」

「もちろん。レース前の王室主催のパーティに KIKI をエスコートしたい。」

「ドレスが間に合わないでしょう。」

「もう現地で衣装もサロンもすべて手配済みだよ。安心して。明日ホテルに 10 時に迎えに行くから。」

「断る選択肢はなさそうね。」

「当然だよ。俺が誘っているんだから。」

「レーサーのロジャー氏ですか？」

「モナコグランプリ観戦に行ってきます。」

「エスコートって？」

「レース前の王室主催のパーティです。」

「また話題になりますね。彼は当然優勝候補だから。」

「どうかな。」

本当に欲というのはキリがない。KIKI さんに会いたい。許してもらいたい。抱きしめたい。キスしたい。そして独占したい。どんどん欲が出てくる。そして嫉妬する。キリなんてあるわけない。

「うーん、いつものことだからなんて言えばいいか・・・。」

「自分の心の狭さに呆れています。」

「この件はここに戻った時にきちんと話し合しましょう。今日はもう休みます。」

「おやすみなさい。」

お互い明日出発なのに、気まずさが残る別れになってしまった。

翌日、KIKI はモナコに、MINU はチューリッヒに向かった。

モナコでの KIKI は、ロジャーのエスコートで世界中の女性に恨まれ、モナコのセレブレティとの会話を楽しみ、仕事の依頼を打診されたりと有意義だった。

モナコグランプリは国全体がレース場と化すため、観衆はもちろん、国中がグランプリ一色、興奮の坩堝だ。

まさにロジャーは神に選ばれし勇者。今回のグランプリは、残念ながらエンジントラブルでリタイヤとなってしまった。

「KIKI が観戦しているのに散々な結果だ。最低の気分だよ。」

「チームワークだから結果はいろいろよ。あなたが世界一流のレーサーであることは変わらない。それに世界中の女性から愛されていることもね。」

「KIKI、恋人になって欲しい。ずっと片思いなんて辛過ぎる。」

「わたしは嫉妬深いし、独占欲も強い。世界中から愛されるロジャーを独り占めはできないでしょう。それに辛い恋はしたくない。」

「KIKI が独身でいる限り諦めないから、覚悟してね。」

「世界中の女性に聞かせたいセリフね。実はいま気になっていた人と、付き合い始めたばかりよ。」

「結婚するの？」

「まだそこまでは・・・。」

「じゃあ、可能性は充分あるってことだ。安心した。」

「近いうちにモナコの仕事が入るかも。連絡するね。」

KIKI はジュネーブに戻る。

MINU はまだチューリッヒでミーティング、明日こちらに戻るとメッセージが。

そうだ。レディマリザに連絡しよう。

「KIKI、ドクターとの恋は復活したかしら？」

「まあ、一応再スタートしたみたいなの・・・。」

「誠実な彼よね。実は気になってそちらに連絡してドクターと話したの。」

「え???聞いていない。どんな？」

「内容はともかく、きっと KIKI を幸せにしてくれるって感じたわ。彼と一緒になの？」

「仕事でチューリッヒ。明日こちらに。わたしは先ほどモナコから戻りました。」

「ロジャーとの記事が気になったの。」

「タイミング悪く彼も知って気まずい雰囲気です。」

「オトコのジェラシーってデザートなのよ。コースを締めくくるライトでスイートな出演者、メインを引き立てる最高の演出よ。嫌な気はしないでしょ。」

「はい。もっといじりたくなります。」

「純粋な彼をいじめてはだめよ。あなたが最愛の人だって思いきり抱き締めてあげて。いまからチューリッヒに行ったら。」

「滞在先は知らないの。」

「チューリッヒとドクターとくればGH製薬の研究センターね。空港からすぐよ。確認してみたら。レディマリザの紹介といえばスルーパスよ。」

さすが世界一流の貴婦人。大株主なのか、パトロンか・・・。

KIKI は早速連絡する。

「レディマリザから伺っております。DR.MINU は研究センターで 16 時までミーティング。ホテルには 17 時に戻ります。」

「ありがとうございます。」

KIKIは博士と同じホテルを押さえて国内線空港に向かう。
今度はわたしが追いかけるってこと？恋愛に見栄なんてあっちゃいけないのね。
ここまで情熱的になるって不思議。レディマジックかしら・・・。

ミーティングを終えたMINUはホテルに戻る。
フロントに愛するKIKIの姿が???いや、ここにいるはずがない。

17時、KIKIはMINUに連絡する。
「MINUさん、KIKIです。いまどちらに・・・」
「振り向いたその先にいますよ。」
KIKIは振り返った。
MINUがエントランスから走り寄りKIKIを抱きしめる。
「KIKIさんだ。信じられない。どうして。」
「MINUさんに会いたくて追いかけてきました。迷惑でしたか？」
「とんでもなくうれしいサプライズです。」
MINUはKIKIを思いきり抱き締める。
「シャワーを浴びてから、MINUさんの部屋に行きますね。」
「冷たいシャンパンを用意します。」

思い切ってここまで来てよかった。あんなに喜んでくれるなんて、さすが恋の女神レディマリザ。
「KIKI、プライドの為に駆け引きするのは遊びよ。本当の愛はまっすぐ進むだけ。」
その通り！KIKIは決めた。
わたしの恋愛は駆け引きなしの前進のみ。

欧州のディナーは20時過ぎから賑わう。
部屋でゆっくりシャンパンを飲んでからでも十分時間がある。
MINUはシャワーを浴びてシャンパンとアペリティフをオーダー。
KIKIに会えたことがうれしくてたまらない。

扉を開けたMINUの胸にいきなりKIKIが飛び込む。
「会いたかった。明日まで待てない。」
「わたしも驚きました。まさかKIKIさんがチューリッヒにいるとは・・・。」
「自分の気持ちに素直になると決めました。」
KIKIはMINUの首に腕を回し、MINUの顔を引き寄せせる。MINUは屈みながら顔を傾けKIKIの唇にキスをする。
MINUの胸は鼓動が激しく、奥が燃えるように熱い。KIKIを思いきり抱きしめる。
KIKIは唇を離しMINUを見つめる。
「とっても素敵なキスにとろけそうです。」

MINU はいきなり KIKI を抱き上げ奥に。

そして KIKI をゆっくりベッドへ寝かせ、身体を重ねながら熱く深いキス。

博士ってとっても情熱的だったのね。

MINU は KIKI を見つめた。

「愛しています。」

「愛してください。」

MINU は身体を起こし、ブラウスを脱ぐ。鋼のようなボディが美しい。

KIKI は思わず視線を外した。ゆっくり、やさしく KIKI を刺激する。

恋愛経験がないってホントかしら。MINU の繊細な指の動きに身体が疼く・・・。

十分に満たされたとき、突き抜けるような快感の波が押し寄せた。

愛されるって最高だ。

MINU はさらに KIKI の熱る身体を指と唇で刺激する。まるで KIKI の反応を楽しんでいるようだ。

さすがの KIKI もノックアウト。呼吸が激しい。

「KIKI さん、素晴らしい。絶対に離しません。」

「愛する人に抱かれるってホント幸せです。」

「どうしたら KIKI さんに悦んでもらえるかがわからない。これから学習するつもりです。」

「かなり刺激的でした。毎日 MINU さんに抱かれて眠りたい。」

「そうしましょう。ずっとこれから・・・。」

「お腹が空きました。」

ふたりのそれから・・・

「KIKI、アムステルダムから仕事の依頼だ。いまはシンガポールか。」

「RON、だめよ。クリスマスは日本でしょ。三日後帰国する。」

「そうだと思った。すぐに断るつもりだよ。旧正月前に終われるようスケジュールを組むからそれでいいかな。」

「MINUの予定もあるから・・・。お正月はソウルになるし。聞いてみる。」

「了解。」

「一緒にいられる時間が少ないんだから、気を使ってね。」

「はいはい。」

KIKIのプライベートフォンから着信音が。

「KIKIさん、MINUです。これからシンガポールに入ります。定宿はラッフルズですね。」

「そうよ。入国したら連絡してね。3日後、日本に入るから。」

港が一望できる広大な敷地に、海外からの長期滞在客で常に満室のヴィラがある。

大きなもみの木にはクリスマスイルミネーションが輝き、高台の先端に離れがある。

稀子のプライベートヴィラだ。

クリスマス休暇はここにMINUと滞在し、家族や友人と過ごす。

「お待ちかねの来客が無事に空港から到着したよ。」

「KIKI、最高のチャイニーズを食べに来たよ。もちろん北京ダックと飲茶ね。」

「HDオトコマエ3兄弟勢揃いね。大家族のクリスマスへようこそ。快適な滞在をお約束します。」

眼前には横浜港の夜景とイルミネーションが輝いている。

読者が選ぶ、推しフレーズ

読者イチ推しの胸キュンなシーン、極甘フレーズをセレクトしました。

さてパーソナルで美しいSUHO ブティックを創りますかね。機能的より創造的でありたいよね。ファッションはその人を映す鏡というでしょ。インテリアや建築とは異なって呼吸や体温が感じられないと意味ないんだな。

スーツは戦闘服というより事業家としての個性を引き立てます。
プライベートアイテムは、その人の喜怒哀楽を魅力的に表現するための服です。
新しい代表が楽しみです。

「恋はするものではなく、落ちるものだ。」

「素晴らしいです。わたしは先端技術こそ生活を豊かにし、人に寄り添うことが重要だと信じています。会えない愛する人と、音声と映像、そして文章でつながっていたい。情報量、通信速度を競う時代は過去です。SION 代表には人にやさしい技術を開発して欲しいです。」

さすがオトナの女性には敵わない。告白してもなかなか通用しない。100回は悩んで決断したけど、見事に空振りだ。

「そうなの。恋愛にプライドは必要ないわよ。彼との素晴らしい関係で、たった一つの誤解なら許すべきでしょ。彼の KIKI への想いは聞いたの？」

「KIKI、たかがプライドとやらで、素敵な恋を逃したら悔いが残るわよ。経験豊富な私が言うんだから間違いないわ。会って、抱きしめて、愛してるってそれだけでいいのよ。」

「ウイーンのクライアントである元公爵夫人にアドバイスされたんです。プライドなんて恋愛には必要ないって。愛しているか、愛していないかだけが重要だって。時間の経過とともに怒りは収まるけど愛は消えない・・・。意地を張ってごめんなさい。」

「オトコのジェラシーってデザートなのよ。コースを締めくくるライトでスイートな出演者、メインを引き立てる最高の演出よ。嫌な気はしないでしょ。」

「KIKI、プライドの為に駆け引きするのは遊びよ。本当の愛はまっすぐ進むだけ。」